

## ■まえがき 「御遺告」の宗祖大師真撰説を疑う

古典の原文を一字一句調べながら丹念に読むと、作者の言葉選びや書き方（書きグセ）や修辭法や表意方法が伝わってくる上に、その古典が書かれた年代が想像できる。弘法大師空海（以下、空海）の場合もそうで、格調高い書きはじまりに最後まで乱れない博識に満ちた言葉が続き、それが絶妙なレトリックや四六駢體などによって流麗な漢文で綴られる。一字一句・一頌一文から空海の文芸的才能や気概が伝わってくる。二十四才で書いたという『聾瞽指歸』（『三教指帰』）にしてすでにそうであり、晩年に書いた『秘密曼荼羅十住心論』もそうである。

然るに、この「御遺告」、すなわち真言宗の伝統教学（宗乘）では長く空海の実撰と言われてきた「二十五箇條遺告」を具に解読してみると、漢文の語選び・レトリック・文体が粗略・稚拙で空海らしくないことに気がつく。とくに「空海伝」とも言うべき第一の条からは、伝記の当事者たる空海の生の声がいっこうに聞こえてこず、「これが空海最後の文章か？」と次々疑念がわいてくる。

周知の通りこの「御遺告」は、空海が入滅する六日前の承和二年（八三五）三月十五日付で、弟子たちに自分の死期と遺誠を告げたものであるが、空海には古来二つの「遺誠」と四つの「遺告」が伝えられ、その異同や真偽が、真言宗では長く問われてきた。二つの「遺誠」とは、いわゆる「弘仁の遺誠」（弘仁四年、八一三）及び「承和の遺誠」（承和元年、八三四）であり、四つの「遺告」とは、いわゆる「官符遺告」（承和元年）と「遺告真然大徳等」「遺告諸弟子等」そしてこの「御遺告」である。

このうち「御遺告」は、その第一の条が真言宗内では長く空海真撰の「空海伝」として絶対視されてきた。ちなみに、平安時代後期、経範が寛治三年（一〇八九）に著した『弘法大師御行状集記』（『弘法大師全集』首巻）の「御出家条第九」には、「爰に大師石澗贈僧正々々後に改めて如空と稱す」という、横尾山寺での沙弥戒受戒の「御遺告」の文がそっくり転載されているのもそれを物語っている。

しかし近代になって、富田籙純・加藤精神・佐々木憲徳といった碩学が真撰説に疑義を呈し、空海に明るい文芸家上山春平氏が偽作と断じたほか、近年の密教学界では「弘仁の遺誠」「承和の遺誠」もふくめ空海真撰説に否定的な見解が多く出されている。真偽の別は措くとして、「御遺告」の成立年代に言及した先学の論及に、私の知る範囲で次のものがある。

守山聖真『文化史上より見たる弘法大師傳』、上山春平『空海』（朝日選書）、武内孝善『弘法大師空海の研究』「御遺告の成立過程について」（『印度学仏教学研究』第四十三卷、第二号）・『空海僧都伝』と『遺告』二十五ヶ条』（『密教文化』二〇〇七卷、第二一八号）、白井優子『空海伝説の形成と高野山―入定伝説の形成と高野山納骨の発生』。

付け加えれば、この「御遺告」の成立年代は、「安和二年（九六九）七月五日、有縁の本を以て書写す、歴能」の奥書をもつ写本が発見されていることから、それ以前の成立を言う推論が目立つ（例えば、井上友莉子「貞崇と空海の虚空蔵求聞持法修学説話」、名古屋大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』三十三号）、ただ、この写本は明治時代の漢学者・桂五十郎（湖邨、早稲田大学教授）が所蔵したもので、現在は奥書の部分の画像以外所在不明である（和多昭夫「高野山と丹生社について」（『密教文化』一九六五卷、第七十三号）。この写本の年号を論拠にする推論からは、空海真撰説は出てこない。

もとより私は伝統教学や史誌文献にうとく、空海の伝記文献を精査考証する余力もないのだが、以下、私なりに原文の解読の過程で見えた空海真撰説への疑念を例示してみる。

①まず最初に、第一の条は、真言宗内では長く絶対的な「空海伝」とみられてきた空海自伝であるが、真言密教の成立、すなわち付法・伝教・血脈の正統性を言わんとする条ながら、その重要事項の選択と記述に粗略があり、この「御遺告」が空海の作でなく、後世の誰かが空海の伝聞をかき集め、空海になりすまして綴ったことを思わせる記述が目立つ。

②その第一は、虚空蔵求聞持法受法の記述である。原文に十五才の時奈良の都に出てまだ大学寮に入学していない時期に大安寺の勤操と出会い虚空蔵求聞持法を教えられたとあるが、山林修行も仏教の何たるかも知らない十代半ばの童子に大安寺の僧正が虚空蔵求聞持法を授けるわけがない。さらに空海が大学寮に入学したのはその後だと。これはまったくのフェイクで仏教修学のイロハも知らない素人のような誤記である。余談ながら、『続日本後記』は「時に一沙門有り、虚空蔵求聞持法を呈示す」として勤操の名は言わず、今研究者の間では大安寺の戒明が有力視されている。

③ 粗略の第二は、空海自身の付法・伝教・血脈においても自伝においても最重要な具足戒の受戒について一言も書かれていないことである。具足戒を受戒し官僧になつていなければ、空海という僧名もなければ付法・伝教・血脈もないし、入唐留学もなかった。横尾山寺での沙弥戒受戒と教海への改名、さらに如空への改名にはふれているのに、それよりもずっと大事な具足戒受戒と空海という官僧名への改名がなぜか書かれていない。これも素人的な感覚である。

④ 粗略の第三は、付法の意味で、仏教の基礎学を空海がどこで誰に学んだか書かれていない。大安寺や元興寺や東大寺や興福寺で俱舎・三論・法相・華嚴での学解学習について一切明かされていない。大安寺の慶俊や道慈を祖師と言いつつ、法脈を明かささない。大安寺で学んだであろうはずのサンスクリットの先生（おそらくインド僧）の名も出てこない。大学寮の恩師の名は出てくるが肝心の密教受法の基礎となる仏教学やサンスクリットの恩師の名前がないのである。

⑤ 粗略の第四は、付法・伝教・血脈の意味で最も重要な、学法灌頂から伝法灌頂の間にあつたはずの金胎両部の念誦法の伝授、また伝法灌頂後に受法したはずの各種念誦法への言及がなく、さらに恵果和尚から贈られた法具・経典・論書・法衣・学用品・身の回り品など、その名がない。その意味で、第二十四の条で語られる恵果から贈られた如意宝珠も、どれほどの付嘱品かわからない。

⑥ 粗略の第五は、伝教の意味で、帰路と帰国後、さかんに桓武天皇の訃報を気にして字数を費やしているが、空海が最も親密な関係にあつた嵯峨天皇のことは一言もない。嵯峨から東大寺の別当を命じられた空海は、四年の在職中に東南院（真言親）に灌頂道場を開き、「薬子の乱」で落飾した平城上皇（嵯峨天皇の兄）やその第三皇子の高岳親王（出家して空海の弟子になり真如親王）に灌頂を授けている。そのほか、東大寺恒例の修二会（十一面悔過 お水取り）において道場の結界を行い、閑伽井にお水を取りに向う練行衆らの先頭に立つて洒水加持を行う咒師を加えるなど、国家仏教の総本山東大寺に密教をもたらししたのは空海である。この「御遺告」の主な舞台である東寺は、嵯峨が空海に託して鎮護国家の密教道場にしたものである。嵯峨が悩んだ早良親王の怨霊を乙訓寺で鎮めたのも空海である。空海の付法・伝教には桓武より嵯峨であり、桓武に近かつたのは最澄である。

⑦粗略の第六は、この「御遺告」は他宗・他家への付法・伝教に否定的であるが、空海は高雄灌頂の「灌頂歴名」に明らかのように、金胎両部で天台の最澄・秦範・円澄、和氣真綱・和氣仲世・美濃種人のほか、太僧・沙弥・近士・童子を「結縁灌頂」の壇に入れている。

もともと、空海自身は他宗兼学・総合学習の人で、他宗を拒否する人ではなかった。とくに第十六次遣唐使船に同乗した入唐留学仲間の最澄に対しては原則寛容だった。事実、最澄から愛弟子の秦範や円澄を預かり身近に置いて密法を教授し、弘仁四年（八一三）二月には、高雄山寺において、秦範・円澄・光定らに「法華儀軌」一尊法や梵字儀軌を伝授し（光定「伝述一心戒文」巻上）、天長八年（八三二）九月（十月説もあり）には、円澄・徳円・光定ら十数名の最澄の弟子から再度の伝授を要請され、これを受け入れている。光定の「伝述一心戒文」には「円澄は）耳順の年（六十才）天長八年）に登ると雖も、先師（最澄）の跡を継がんとするために真言の大道を修学す。三密の戒契一々に指陳して空海大僧都に受く」とある。空海は密法を他宗に閉ざす人ではない。この「御遺告」が再三他宗の者への密法漏えいを禁止・警告するのは、空海の入滅後、宗の綱紀が乱れた時代を暗示しているように読める。

⑧以上、第一の条における粗略の例示であるが、次いで具体的なフェイクを挙げれば、先ず第十六次遣唐使船が漂着した場所を「衡洲」だとしているが、第十六次遣唐使船が漂着したのは赤岸村の浜辺（通称、赤岸鎮）で、そこからさらに回航して辛苦の末に上陸許可が得たのが福州の馬尾港であり、上陸許可を出したのは福州の觀察使閻濟美だったことは確たる定説で、赤岸村・福州いずれも福建省に所在する。私が知る範囲の「衡洲」とは、唐の時代に、湖南省の衡山・耒陽・茶陵・攸・常寧・衡陽の六県を管轄した州で、湖南省の一州である。『性霊集』の有名な「大使、福州の觀察使に與ふるが爲の書」で明らかかなように、第十六次遣唐使船の漂着・上陸はともに「衡洲」ではない。「御遺告」の作者が空海なら「福州」と書くはずである。

⑨具体的なフェイクの第二であるが、第二十四の条のはじめで、この「御遺告」の作者が「祖師・大阿闍梨」と言う箇所がある。この「祖師・大阿闍梨」とは空海自身のことである。「御遺告」が空海の作なら、自分を「祖師・大阿闍梨」とは言うまい。後世の擬作を思わせる。

⑩具体的なフエイクの第三であるが、後半の条に、僧房への女人禁制や飲酒禁止を強調する条がある。承和二年、空海が目を閉じる直前の弟子たちは、空海が敢えて諭さなければならぬほど、綱紀が乱れ破戒行為が横行していたのだろうか。これは空海亡きあと、時代を経た後世の高野山ではなかったか。山内の綱紀が乱れた時代誰かが空海になりすまして書いたと疑いたくなる。そもそも空海がまだ存命中に、女人を僧房に入れるなどか、僧房で酒を飲むなどか言わねばならない事態があったのだろうか。またそう言わなければならぬほど、空海の弟子たちは不始末だったのだろうか。いやそれ以前に、こんな恥さらしなことを入滅直前の空海が書き残すだろうか。

⑪具体的なフエイクのその四であるが、最後に、空海が恵果和尚から付嘱されたという如意宝珠のことが長々と書かれている。そもそも条文全体が冗長過ぎる上にこの文体は明らかに空海の文体ではない。この如意宝珠は室生寺の避蛇法とともに説かれるのだが、空海らしくない煩瑣な説明が長々と綴られ、空海が言いそうな「菩提心」の象徴としての如意宝珠がまったく語られない。他家に内緒のどこが遺告なのか、これも後世の宗の乱れた内情を思わせる。

⑫具体的なフエイクのその五であるが、この「御遺告」が説く密教とは、神泉苑の「請雨法」とか室生寺の「避蛇法」とか、降伏法などの修法のことばかりで、またそれを得意げに言う。「即身成仏」「声字実相」などの空海独自の密教思想は一切語られない。この点、密教を現世利益の修法だと誤解し、空海の密教思想を語るに無能の人がこの「御遺告」の作者であることを思わせる。

⑬全体として、空海ほどの人が、人生の最後にこんなレベルの内容の遺言を口にするだろうか、こんな拙劣な文体で綴るだろうか。御修法の供料を高野山に回せとか、女人を僧房に入れるなどか、僧房で酒を飲むなどか、如意宝珠は他宗の者には内緒にしろとか、最後の最後にこんな低レベルの内部規律を書き残すだろうか。察するに空海なら、「十住心」を弟子たちに再度言って最後の遺告とするにちがいない。

⑭この「御遺告」が空海の真撰ではないのではないかと疑念を持つに至った決定的な理由は、この冒頭に述べた通り、この「御遺告」の漢文が粗略で稚拙で空海とは思えないことにある。空海の漢文は本格的な八朝調の漢文であり福州の

觀察使閻濟美の度肝を抜いた。この「御遺告」の漢文を以て空海の文体だと言う人が今いるとすれば、私には理解できない。

以上、私の疑念の一部を例示した。まだまだフェイクはある。挙げれば切りがないが、「まえがき」としてはこの程度にとどめる。要は、近年の研究者が指摘するように、この「御遺告」は空海の真撰ではない可能性が大だということである。

日本の仏教宗派には、その宗派の正統性を強調するための宗学がある。私どもはこれを宗乗と言い、あるいは伝統教学とも言っている。つまりは真言教学・大師教学であるが、時に宗祖大師を絶対化する信仰教学にもなる。新義系の私どもには信仰教学の独善的主観主義は稀薄で、これが学山智山のすぐれたところだが、鎌倉仏教の宗門のなかには、あまりに独善的で失笑したくなる信仰教学もある。鈴木大拙や西田幾多郎までが禅学や真宗学の独善のなかで禅や他力を語った。二人と同世代にはじまる近代仏教学の方法に学んだ仏教研究者は、たとえ宗派に属する僧侶であっても、信仰教学に陥ることなく自宗の宗学を客観的学問的に考究した。この「御遺告」の空海真撰説への疑義は、その事情から発している。

この「御遺告」を読むにあたって、「原文」を「大正新脩大藏經テキストデータベース版（大正 20.2.23）」を依用した。だが、ところどころ誤記があり、「高野山アーカイブ」の「定本 御遺告」を参照しながら、私なりに直して読んだ。また、「定本 遺告真然大徳等」「定本 遺告諸弟子等」（同アーカイブ）、「弘仁の遺誠」（『弘法大師全集』第四巻、筑摩書房）等にも目を通した。

「原文」に続いて「書き下し」を付した。私の漢文読解力もだいぶさびついでいて、読みちがえがあるかも知れないがご容赦願いたい。「書き下し」のあとの「註記」は、けっこうな時間をかけて調べたものもふくめ、できるだけ正確を期したが、調べ尽くせないものや長くなるので簡略にしたものもある。ご参考になれば幸いである。

「註記」に続いて「私訳」を付けた。私なりの現代語訳である。さらには、「私訳」のあとに「付記」を加えたところがある。空海の重要な事蹟で「原文」の粗略なところを補足する意味である。伝統教学に暗い私なりに先学の研究をできるだけ探しあて、それらにも一応目を通した。多くの学恩に感謝している。誤字・誤記にはご容赦いただきたい。

■「御遺告」 原文・書き下し・註記・私訳・付記

序

【原文】

遺告諸弟子等。應勤護東寺眞言宗家後世内外事管、合貳拾伍條狀。  
竊以大法同味興廢任機。師資累代付法在人。鷲峯視聽傳流中洲、鐵塔傳教利見烏卯。探流尋源鑒晃討本。大唐曲成既有血脈。日本末葉何無後生。仍聊示之。

【書き下し】

諸々の弟子等に遺告す。應に東寺眞言宗家、後世内外の事を勤め護るべき管、合して貳拾伍カ條の狀。

竊ひそかに以おもるに、大法だいぼうは味を同じくすれども興廢は機かに任せり。師資累代の付法も人に在り。鷲峯じゆぶの視聽ちゆんは中洲ちゆうしゆうに傳流し、鐵塔てつたの傳教でんきやうは烏卯うまうに利見りけんす。流れを探り源みなもとを尋ね、晃ひかるに鑒かんみて本もとを討たずぬ。大唐たいとうの曲成きよくせいに既に血脈けちみやく有り。日本の末葉まつえつ何ぞ後生ごせい無からん。仍いまだて聊ちやうか之これを示しさん。

【註記】

- ①管かん…所管しよかん・管理かんり・管轄かんかく。
- ②大法だいぼう…すぐれた教えおんぎ＝仏教ぶつぎやう。
- ③味あじ…法味ほふみ。仏法の深い味わい。妙味めうみ。
- ④機か…人の根機こんか。能力なりき。器き。

⑤ 鷲峯… 釈迦の説法所として有名なインドの靈鷲山。

⑥ 中洲… インド各地。

⑦ 鐵塔傳教… 「南天の鐵塔」の傳承。

⑧ 烏卵… 烏兔。烏兔忽忽。歲月・時が早く流れること。

⑨ 利見… 世間衆生を利益するのが見られた、の意。

⑩ 曲成… つぶさに成されて残すところなく、の意。

### 【私訳】

諸々の弟子たちへの遺告。東寺の真言宗一門が後世、宗の内外の諸事について勤め護るべき所管の二十五カ条の書きつけ。静かに思うに、仏法は法味を同じくするが、その興廢は仏法をになう者の能力により、師資相承の付法も受法者（の能力）にある。靈鷲山で視聽された釈迦の説法はインドの各地に広がり、南天の鐵塔の傳承はあつという間に世間衆生を利益するのが見られた。法流を探り、その源流を尋ね、法の光に照らしてその本をたずねる。大唐にはすでにつぶさに成された血脈があり、日本の末弟とて、どうして密法を後世に伝えないことがあるうか。それ故いささかこれを示しておく。

### 一、初示成立由縁起 第一（雖未資從非東寺一阿闍梨以降。勿令此遺告寫持守惜如眼肝）

初めに成立の由を示す縁起 第一（未資と雖も東寺一の阿闍梨に非ざる從り以降、此の遺告を寫し持せしむこと勿れ。守り惜しむこと眼肝の如し）

### 【原文一】

夫以吾昔得生在父母家時。生年五六之間夢常見居坐八葉蓮華之中諸佛共語也。雖然專不語父母況語他人。此間父母偏悲字號貴物年始十二。爰父母曰。我子是昔可佛弟子。以何知之。夢見從天笠國聖人僧來入我等懷。如是任胎產生子也。然則齋此子將作佛弟子吾若少之耳聞喜以渥土常作佛像造宅邊童堂安置彼內奉禮爲事。

【書き下し文一】

夫れ以るに、吾れ昔 生を得て父母の家に在る時、生年五・六の間、夢に常に八葉蓮華の中に居坐し、諸佛と共に語るを見たり。然りと雖も専ら父母には語らず、況んや他人に語るをや。此の間父母偏いづくしえに悲み、字あざなして貴物とうともの（多布度毛能止）と號す。年始めて十二なり。爰に父母曰わく「我が子、是れ昔佛弟子なるべし。何を以てか之を知るや。夢に天竺國てんじくこく従り聖人僧來りて、我等の懐に入るを見たり。是くの如く任胎して產生せし子なり。然れば則ち此の子を齋もたらして將に佛弟子と作さんとす」と。吾れ若少の耳に聞き、喜んでていと泥土を以て常に佛像を作り、宅邊に童堂わらへんどうを造つて彼の内に安置し禮し奉るを事と爲す。

【註記】

- ①八葉蓮華…胎藏曼荼羅の中央の八葉蓮台。
- ②貴物…宝物。神童。
- ③泥土…どろ土。どろ土を固めて仏像をよく作ったこと。
- ④童堂…小さなお堂。京都で地蔵盆を行う辻の地蔵堂のようなもの。

【私訳一】

思うに、私が昔、誕生して父母のもとにいた時、すなわち五く六才の頃、いつも八葉蓮台のなかに坐つて諸仏と語り合つている夢を見ていた。しかし、父母にもましてや他人にもそれは言わなかった。この間両親は殊のほか私を慈しみ、私のことを「貴物」と言つてはばからなかった。十二才になった頃、両親が言うことには「この子は昔、仏弟子だったにちがいない。どうしてかと言うと、インドから偉いお坊さんが来て、私たちのふところに入る夢を見た。そんなことがあつて、この子を懐妊し出産したのである。つまり、この子を恵んで、仏弟子にしようとしたにちがいない」と。私はそれを幼い

耳で聞き、喜んで泥土で仏像を作り、家の近くに小さなお堂を造ってそれを安置し、礼拝することを日課とした。

【付記】「貴物（とふともの）」真魚のルーツ

空海は、宝亀五年（七七四）六月十五日、讃岐国多度郡屏風ヶ浦、すなわち今の普通寺のあるあたりで生まれた。

空海の誕生地に異説があるのは周知の通りで、例えば多度津町の海岸寺（の奥の院）だという説。これには普通寺と海岸寺の間でかつて論争があった。今は普通寺を「誕生所」、海岸寺を「産湯所」ということになっている。また近年、空海の誕生地を畿内だとする説も出ている（武内孝善氏）が、讃岐国多度郡屏風ヶ浦でなければ普通寺が成り立たなくなる。

父はこの地の国造である佐伯直田公善通（さいきのあたゐ・たぎみ・よしみち）、母は同じくこの地の氏族阿刀家の出自の阿古屋（あこや）といった。空海は「真魚（まお）」と名づけられ、父母や親族に「貴物（とふともの）」といわれて珍重された。長子でもないのにさほどに珍重されたのは、生来健康で病氣ひとつせず、言葉が発する頃から稀にみる知能の才気を発揮したからであろう。とくに言葉の発達が早くまた神威的なものに敏感であった形跡がある。誕生日の六月十五日は、密教經典の訳出や宮中での祈祷を通じて唐代密教の大成に大きな役割を果たし、真言付法第六祖と仰がれる不空三蔵の命日と重なるため、空海には自分を「不空の生れ代り」という自意識があったと言われている。

ところで、「貴物」の意味について書いておきたいことが二つほどある。一つは幼い頃から言葉の発達が早く利発であったから「貴物」と言われたという従来の説。もう一つは、私見であるが、母阿古屋が実家である阿刀家の領する土地の産土神（うぶすなかみ）から授かった「神の御子」であるから「貴物」と尊ばれたという見方である。

空海が幼い頃から言葉の発達が早く利発だったというのは本当であろう。長じて入学した奈良の大学寮での漢籍の暗記力はおそらく群を抜いていた。三十一才で渡った長安では唐語をたくみにあやつった。当時の日本ではごくまれなことだが、インドのサンスクリット語を相当に解したし、マントラ（咒、真言）に靈力の内在を觀じとる言靈（コトダマ）の氣質も充分に持ち合わせていた。この破格の言語の異能は、当然ながら「貴物」、いわゆる「天才」と言われるにふさわしい。

そのバックグラウンドには、佐伯氏の家系が異言語や言靈など特殊な言語世界にかかわりをもつ一族であったことが想定される。佐伯氏について、この『御遺告』は「昔、敵毛を征して班土を被れり」と言って、空海の実祖がヤマト王権による東北の蝦夷征伐に功があったことを窺わせるが、最近の説によれば、ヤマト王権によって征服され捕虜になった東北の

蝦夷の民のうち、讃岐に移封させられた一族で、大和コトバではない奇妙な異言語をあやつる人たちで、そこに空海の外国語の異能のルーツが推量できる、と。

また、『空海の夢』を書いた松岡正剛氏（編集工学研究所長）は同書のなかで、ヤマト王権の佐伯氏が伴氏とともに宮中の語り部たちの言語力、つまり言霊の管理に長く与かっていたことをいくつかの例から想定し、讃岐の佐伯（直）家には、ミコト（天皇の勅）がミコトモチによってもたらされ、ミコトのコトダマの霊力によって中央のサヘキに服属させられた歴史があるかもしれない、と。

さてもう一つ私見ながら、「神の御子」であるから「貴物」と尊ばれたという見方である。空海の母阿古屋は実家の阿刀家が領する土地の産土神である熊手八幡神社に子宝授与を祈り、「神の御子」である空海を身ごもったという伝えが阿刀家の屋敷跡といわれる仏母院（香川県多度津町）にある。阿古屋はまた「玉依（たまより）（姫）」と尊称される。「玉依（姫）」とは水の神・豊穰の神である。このことから、空海の母が讃岐平野の水利と耕地耕田を守り豊かな実りをもたらす母神的存在として人々の崇敬の対象になっていたことが想像される。空海は、産土神から授かった「神の御子」であり、水の神・豊穰の神である「玉依（姫）」が産んだ「神の御子」なのである。「貴物」とは、「神の御子」としての尊称ではなかったか。香川県多度津町の市街地から西に約二・五kmほどに仏母院という真言宗のお寺がある。お寺と道を隔てた反対側に小さな不動堂を中心に空海の母の史跡のそれらしい遺物や説明版や石碑がいくつか建っている。ここが阿刀家の屋敷跡で、空海の母阿古屋はこの土地の産土神である熊手八幡神社に子宝授与を祈願して「神の御子」空海を身ごもったという。

屋敷跡の中心に建つ不動堂にはご本尊の不動明王のほか母阿古屋と空海の尊像が二体祀られている。この不動堂の前を通り左の細い畦道を行くと、田園のなかに空海の胞衣とヘソの緒を納めてあるという胞（えな）衣塚があり、道路わきには産湯井跡がある。またお寺の東南には、空海が泥で仏さまを造って遊んだという童塚があり、お寺にも泥でできた仏像が残っている。この仏母院に伝わる空海誕生の伝承が仮に後世の作り話としても、阿刀家がこの地に広大な神域をもつ八幡神につながる家柄であつたらしい話は興味深い。

ひもろぎの 三角の地にて 玉依は 神の御子なる 大師を宿す

【原文2】

此時吾父佐伯氏。讚岐國多度郡人。昔征敵毛被班士矣。母阿刀氏人也。爰外戚舅阿刀大足大夫等曰。從爲佛弟子不如出大學令習文書立身。任此教言受俗典少書等及史傳兼學文章。然後及于生年十五入京。初逢石淵贈僧正大師受大虚空藏等并能滿虚空藏法呂入心念持。後經遊大學從直講味酒淨成讀毛詩左傳尚書。問左氏春秋於岡田博士。博覽經史專好佛經。恒思我之所習上古教眼前都無利弼乎。期之後此風已止。不如仰眞福田。

【書き下し2】

此の時、吾が父は佐伯氏。讚岐國多度郡の人なり。昔敵毛を征して班士を被れり。母は阿刀氏の人なり。爰に外戚舅の阿刀大足大夫等の曰わく。「從い佛弟子と爲るとも如かず、大學に出て文書を習い身を立てしめん」と。此の教、言に任せて俗典少書等及び史傳を受け、兼ねて文章を學ぶ。然る後、生年十五に及んで入京す。初めて石淵贈僧正大師に逢い、大虚空藏等並びに能滿虚空藏の法呂を受け、心を入れて念持す。後に大學に經遊し直講の味酒淨成に従つて毛詩・左傳・尚書を讀み、左氏春秋を岡田博士に問う。博く經史を覽じるも専ら佛經を好む。恒に思う、我の習う所の上古の俗教は眼前に都て利弼無し。一期の後、此の風已に止まん。眞福田を仰ぐに如かず、と。

【註記2】

①佐伯氏：佐伯氏に、ヤマト王權（大和朝廷）の警備・軍事を担当する佐伯部を率いた中央の佐伯氏（伴造、大伴氏と同族）があり、朝廷官僚だった佐伯今毛人が知られている。今毛人のあとに人が出ず、地方の官人になり下がったと言われる。本文の「昔敵毛を征し」はこの中央の佐伯氏の血統を言い、また「班士を被れり」は、私の想像に過ぎないが、中央政權

の佐伯氏の一族が天皇の詔（ミコトノリ）を奉じて讃岐に下ったミコトモチとしての佐伯氏の意味か。

いずれにしても、空海の父の通称佐伯善通は、讃岐の国の豪族、「直」（あたゐ）の姓（かばね）の国造（地方官人）で、名は佐伯直田公（さえぎのあたいたぎみ）。善通は別称で官職は多度郡の少領。近年の説によれば、もともと古墳の時代から中央政権は東北地方の蝦夷の「まつろわぬ」民を捕えては播磨・讃岐・伊予・安芸・阿波の五方国に移住させ、在地の佐伯直や佐伯造がこれを管理し、それをまた中央の佐伯部が管轄したことから、空海の佐伯氏はこの讃岐の佐伯直だと言われる。

また一説には、「さえぎ」は「さえぎ」に由来し、「さえぎ」はさわがしい、ざわめく、やかましくしゃべる、といった意味で、大和コトバとちがう異語をしゃべる東北の蝦夷の民は「さえぎ」の民でもあり、東北から連れてこられ、播磨・讃岐・伊予・安芸・阿波に封じられた民を佐伯氏と言ひ、空海の佐伯氏はその異言語の佐伯氏で、空海が幼少から言葉の発達が早く、また漢語やサンスクリットに長じ、留学先の長安でも通用する中国語をあやつったのは、異言語の一族だから、という説もある。

②敵毛…大和朝廷による幾度かの征伐に反抗した東北地方の蝦夷の「まつろわぬ」民。延暦二十一年（八〇二）征夷大将軍として陸奥の国胆沢に陣した坂上田村麻呂に、土着の族長アテルイ（阿弭流為）が降伏した話は有名。

③班土…領地。

④阿刀氏…阿刀氏の阿刀（あと）は、安斗・安都・安刀・阿斗・迹とも言う。物部氏と同族で、本拠地を河内国淡川郡跡部（あとべ）郷（今の八尾市の一帯）とした。姓に、宿禰・連・造がある。神護景雲三年（七六九）、阿刀造子老（あとのみやつこおゆ）ら五人が、宿禰の姓を賜っている。そのルーツは高句麗・百済系渡来人だという説がある。

阿刀氏は学問を以てなる家柄だったらしく、大和の国高市郡出身で元正・聖武両天皇の内裏に供奉した法相宗の義淵や、義淵の弟子で入唐留学経験をもつ法相の玄昉や、玄昉の弟子（実子だという説もある）で法相宗の六祖に数えられる著述家の善珠といった学問僧のほか、空海の叔父で桓武天皇の皇子伊予親王の侍講をつとめた大足（おおたり）や、『日本紀』『続日本紀』の編纂局「撰日本紀所」に出仕をしたといわれる安都宿禰笠主（あとのおおくさぬし）や、『万葉集』に歌がある安都宿禰年足（あとのおおくねとしたり）や、大学助（だいがくのすけ、大学寮の教授）をつとめた阿刀宿禰真足（あとのおおくねまたり）らがいる。

空海の母（阿古屋、タマヨリヒメ）この阿刀氏の出で、大足の妹か娘と言われている。佐伯善通は自分の家よりも身分の

高い阿刀氏と縁を結んだのである。一説には、阿刀氏の阿古屋のところへの通い婚だったという説がある（武内孝善氏）。  
⑤外舅：妻の父。この意味で言うると、空海の母は阿刀大足の娘ということになる。本文の「外」と「舅」の間にある旧字は不明。

⑥俗典少書等及史傳・四書五経やその註及び『十八史略』など史伝。朝廷官僚に必須の世間の学識。

⑦文章：官職に必須の四六駢儷体や漢詩文などの文体や修辭。

⑧石淵贈僧正大師：大安寺の勤操。

⑨大虚空藏等并能滿虚空藏法呂：虚空藏求聞持法。

⑩法呂：秘法。

⑪直講：奈良の大学寮の経書の教授。

⑫味酒淨成：奈良の大学寮で空海に毛詩・左傳・尚書を教えた。

⑬毛詩・左傳・尚書：『毛詩』は毛氏が伝えた『詩経』、『左傳』は『春秋左氏伝』、『尚書』は『書経』。

⑭左氏春秋：『春秋左氏伝』。

⑮岡田博士：岡田牛養。奈良の大学寮の教授。讃岐出身。

⑯經史：四書五経と左氏伝など。

⑰利彌：自分を利し養うもの、の意。

⑱眞福田：福德を生む田（教え）。

### 【私訳2】

この時、私の父は讃岐の国多度郡の国造佐伯氏の当主で、佐伯氏は昔東北地方の「まつろわぬ」民を征服し、領地を得たと言われている。母は阿刀氏の人（で、伊予親王の侍講阿刀大足の妹）である。外舅にあたる大足は「たとい、仏弟子になることになってもやむを得ず、（まず）大学寮に入學して學問の書物を習い、身を立てさせよう」と言っていた。この方針で、言われるままに四書五経など世俗の典籍やその註釈及び史伝を受學し、漢文の文体や修辭も兼學した。その後、十五才の時奈良の都に入った、初めて大安寺の勤操大徳（石淵僧正）に出逢い、虚空藏求聞持法の秘法を受法し、（それを）心をこめて念持した。それから大学でさまざまな學問を涉獵し、直講の味酒淨成先生に付いて『毛詩』『左傳』『尚書』

を読み、岡田牛養先生から『春秋左氏伝』を学んだ。しかし広く四書五経や史伝（など立身出世の世間の学）を閲覧して学んでも、心は専ら仏教の經典を好んでいて、いつも「私が習っている上古の世間の学はすべて、自分を利し養うものが眼前に現われない、死後その風も止むだろう。ならば真の福德を生む田（教え）を仰ぎ学ぶにしかず」と思っていた。

#### 【付記】奈良の大学寮

真魚は、讃岐の国学を中途でやめ、十五才の時奈良の都に出た。すべて阿刀大足の導きで大足の家でやっかいになったのだろう。奈良の都はやがて長岡京へと遷る時代で、伊予親王の侍講の大足は奈良と長岡京の往復に忙しかったが、空海に漢籍を徹底して教え暗記させた。

「原文」では奈良の都に出てすぐに、すなわちまた大学寮にも入学していない十五才の時に、大安寺の勤操大徳と出会い虚空蔵求聞持法を教えられたとあるが、これはまったくデタラメであり、山林修行も知らず仏教の修法も知らない童子に虚空蔵求聞持法を授けるわけがない。しかも、大学寮に入学したのはその後だともあり、この部分の粗略はまるで素人の記述のようである。

然るに真魚は、延暦十年（七九一）、叔父大足を家庭教師にした受験勉強が実り、奈良の大学寮「明経科」に入った。大学寮は正式には「平城京式部省大学寮」という。旧平城京の左京三条一坊の九、十、十五、十六坪、長屋王の屋敷の東一坊大路を隔てた西隣にあったと言われている。大学寮には明経科・文章科・明法科・書科・算科があり、文章科は中国の詩文や歴史を学び、明法科は律令国家のしくみや法令を学び、書科は書法等を学び、算科は天文暦数を学ぶ。真魚は明経科を選んだ。明経科はいわば行政科といったもので、朝廷をはじめ国のレベルの高等官を養成するところ。募集定員は他の学科が二十人や若干名の程度であったのに対し三百人を超え、いわば基幹学科であった。阿刀大足の指南はもとより、父母や一族の期待もそこにあっただろう。朝廷の高官として名をなした佐伯今毛人のような栄達を、神童真魚に託したとしても不思議ではない。

明経科では中国の經書を学ぶことになっている。『周易』を鄭玄・王弼の『注』（注釈書）で、『尚書』『孝経』は孔安国・鄭玄の『注』で、『周礼』『儀礼』『礼記』『毛詩』は鄭玄の『注』で、『春秋左氏伝』は服虔・杜預の『注』で、『論語』は鄭玄と何晏の『注』で読む。漢籍の思想の内容を研究するのではなく暗記し大意をつかむのである。『注』の一字一句をまじがうことなく暗誦できた者だけが高等官試験に合格をする。その暗記は漢文を書き下し文にして棒読みする素読を何度

もくり返えずことで確かなものになる。

真魚は、すでに相当に漢籍を素読暗誦し暗記術や記憶術に長けていた。阿刀大足のもとでの三年間の受験勉強は濃密にそのことに集中していた。漢籍の内容理解も怠らなかつた。だから岡田牛養や味酒浄成といった教授陣が教える漢籍はほとんど学習済のものが多かったにちがひなく、自ら進んで初見の典籍にも挑戦をし、自力で読み下し、暗記し、内容を『注』を使って理解したのである。その『注』の多くを占める後漢の鄭玄の訓詁学（解釈学）も同時に飲み込んだ。

さらに、退屈からか余裕からかおそらく他の学科にも手を伸ばし、『文選』などの詩文を片っぱしから身につけたであろう。また唐語をおそらくは浄村浄豊（阿刀大足とともに伊予親王の侍講）に手ほどきを受けみるみる会話をものにしていったと思われる。この時に習った唐語はおそらく長安のある陝西で多くの漢人が話す「西北官話」（中国七大方言で代表的な北方方言（官話方言）の一つ）であつたと思われる。書にも非凡な才を発揮し、王羲之や欧陽詢や顔真卿をよく臨書したのである。真魚にとつて、受験期とこの大学寮における漢籍の暗誦体験や詩文・唐語・書の習学が後に入唐の際や長安での修学中に大きくものをいう。また、それらは空海密教の言語哲学や総合性やさらに空海の文芸的志向にもリンクする。

### 【原文3】

因作三教指歸三卷。成近士號稱無空。名山絶巘之處嵯峨孤岸之原。遠然獨向淹留苦行。或上阿波大瀧嶽修行。或於土左室生門崎寂暫。心觀明星入口。虚空藏光明照來顯菩薩之威現佛法之無二。厥苦節也則嚴冬深雪被藤衣而顯精進道。炎夏極熱斷絶穀漿朝暮懺悔及于二十年。爰大師石淵贈僧正召率發向和泉國槇尾山寺。於此剃除髻髮授沙彌十戒七十二威儀。名稱教海後改稱如空。

### 【書き下し3】

因つて三教指歸三卷を作り、近士と成り號して無空と稱す。名山絶巘の處、嵯峨孤岸の原に、遠然として獨り向ひ、淹留し苦行す。或いは阿波の大瀧嶽に上つて修行し、或いは土左の室生門崎に於いて寂暫す。心に明星の口に入るを觀じ、

虚空藏の光明照らし來たりて菩薩の威を顯わし、佛法の無二を現す。厥その苦節は則ち嚴冬の深雪に藤衣とういを被まて精進の道を顯わし、炎夏の極熱に穀漿を斷絶し、朝暮に懺悔すること二十年に及ぶ。爰に大師石淵贈僧正召し率いて和泉國槇尾山寺まきのおさんじに發ち向う。此に於いて髻髮けいはつを剃除ていじょし、沙彌しゃみの十戒・七十二威儀を授く。名を教海と稱し、後改めて如空と稱す。

【註記3】

①三教指歸…儒家の思想・仏教・道教の三教の優劣を説き、自らは仮名乞児として登場し、仏教を選び仏教に身を置くことを宣言した空海の書。『龍誓指帰』の再編版。空海が大学寮を出走して七年後の二十四才の時に書いたものにしては、儒・仏・道のいづれにも学識が深く広く、『龍誓指帰』の文体（四六駢儷体）や書法（雜体書）に至っては中国の書聖たちに比肩するもの。

②近士…近事。三宝の近くに仕え、五戒（不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒）を受戒した在家信者。

③名山絶嶽…名の聞こえた山、高くそびえる山なみ。

④嵯峨孤岸…高く険しい断崖。

⑤淹留…長く留まる。

⑥大瀧嶽…今の四国八十八カ所第二十一番太龍寺の舍心岳（捨身嶽）。

⑦土左…土佐。

⑧室生門崎…室戸岬。

⑨寂暫…しばらく寂靜の境に住す、の意。

⑩明星…金星。虚空蔵菩薩の応現。

⑪藤衣…藤の蔓皮の織維で織った布の粗末な衣服。

⑫穀漿…穀類と飲み物。

⑬槇尾山寺…今の西国三十三方所第四番槇尾山施福寺。

⑭髻髮・頭髮。

⑮沙彌・二十才以前に出家し、師から十戒を受戒し、師に随つて修行する具足戒受戒前の修行僧。

⑯十戒・不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒・不著香華鬘不香塗身・不歌舞倡妓不往觀聽・不坐高广大床・不非時食・不捉持生像金銀宝物。

⑰七十二威儀・沙彌が守るべき七十二の日常作法。

### 【私記3】

よつて『三教指歸』三巻を著わし、三室に仕える近事となり、名を無空と称した。名の聞こえた山のそびえるところ、高くて険しい断崖のわずかな平地にはるばると独り向い、幾日も滞留して苦行した。ある時は阿波の大瀧嶽（今の太龍寺舎心岳）に上つて修行し、ある時は土佐の室戸崎でしばらく寂靜の境地に住した。そこで、明けの明星が口に入るのを觀じ、虚空藏菩薩が応現して光明を照らし来たり、仏法の二つとないことを現じた。その苦節は、嚴冬の深い雪のなかで、藤のつる皮の纖維で織つた粗末な布服を着て精進の道理を頭わし、炎夏の灼熱のなかで穀類も飲物も断ち、毎日朝夕懺悔し二十才になった。然れば、勤操大徳は私を召し率いて和泉の槇尾山寺に向い、そこで剃髮し、沙彌の十戒と七十二威儀を授かつた。名を教海とし、のちに如空と改めた。

【付記】 大学出奔、山林修行、剃髮して沙彌へ、『叢誓指歸』（『三教指歸』）を著す

真魚は中央官僚の佐伯今毛人が建てた佐伯院に寄宿して大学寮に通うかたわら、すぐ近くの大安寺にもしばしば出入りし、生まれてはじめて仏教というインダ的な思惟の世界を知つた。さらに、やがて自分の将来を決定づける虚空藏求聞持法に出合った。この大安寺で真魚の異能をいち早く認め仏教入門への道をひらいたのが勤操大徳である。勤操は、隣の佐伯院からしばしば来ては仏教や渡来人や異国の言語に異常なほどに関心を示し、その吸収に天賦の才を發揮する大学生の真魚を好ましく思い、おそらく佐伯今毛人の仲介もあつたであろう、真魚を厚遇したと思われる。虚空藏求聞持法を実際に伝授したかどうかは別として、大学寮での漢籍の学習と経学の内容に飽き足らなさを感じていた真魚を仏教に覚めさせたのは事実であろう。おそらく、勤操は阿刀大足や佐伯今毛人から真魚の漢籍暗記の才について聞いていた。だからいきなり『大智度論』や『中論』を与えて諳んじさせ、それを講じたかもしれない。

やがて真魚の暗記力の並はずれた異能を身近に感じ、勤操は迷うことなく虚空蔵求聞持法に彼を導いたに相違ない。実際修法を伝授したのは戒明だったかもしれない。あるいは真魚に求聞持法を教えたのは「一沙門」ということになっているから、大安寺と関係の深い吉野比蘇(曾)寺の「自然智」宗に属する無名の行者であったろうか。空海とは密接な関係があった元興寺の護命も「自然智」宗の人で、それに関与していたかもしれない。

大学寮での漢籍の世界に物足りなさを感じていた真魚は、この大安寺で知り合った異国の言葉や文化とくに仏教のインドの思考や行法に総毛立つ思いをした。青年期に向かう早熟な真魚のなかで、漢籍の世界はすでに満足できないものになっていた。ことに大学寮で学ぶ経学は畢竟、朝廷高官のエリートコースをものにするための処世学であり、真魚が感じはじめている例えば絶対者や自己や生命や認識や言霊といった哲学的宗教的な問いに何も答えてくれないものであった。

ほどなく真魚の心中に大きな価値転換が起きる。忽然として大学寮から姿をくらし山林での修行生活に入ってしまうのである。真魚は約束されたエリートの人生活を送り捨てて在家のまま五戒または八戒を保つ乞食同様の修行者(優婆塞)となったのである。山林修行はまず奈良の近くの葛城・金剛山系、そして吉野から大峰山系を経て熊野へ、あるいは途中十津川から分かれて高野山へ、熊野では海べりに行場を得たかもしれない。そして四国へ。大瀧嶽(今の太龍寺の舎心カ岳)に室戸崎の御厨人窟・神明窟に石鎚山での乞食行だった。室戸の御厨人窟では明けの明星が虚空蔵菩薩の真言を唱えている口のなかに飛び込んできた(虚空蔵菩薩の応現)。

真魚はある日山から下りて大安寺の勤操を訪ねそのことを明かしたかと思われる。勤操は真魚の並外れた知力・体力・精神力の高さに改めて驚きながら、それを解決する手立てとして官大寺の三論や法相の講筵に列するためにも、出家をして正式な仏教僧になることを勧めたであろう。勤操は、真魚の機根や才気からして国家にとって有為の大器になるであろう大いなる可能性を見出していたから、当面は沙弥となつて仏教の修学や修行に専念しその先に機会をえて東大寺で「具足戒」を受け官僧になることを勧めたにちがいない。

延暦十二年(七九三)、おそらく春から夏にかけての頃、真魚は和泉の槇尾山寺において勤操に従つて剃髪受戒し、大安寺所属の沙弥「教海」となった。それ以後教海は私度僧であるものの、大安寺の見習い僧として南都の官大寺の各種講筵に出入りできるある種公的な身分となった。大学寮を出奔して二年、二十才だった。

このあと『三教指帰』（『聾瞽指歸』を再編）書くまでの四年間を、真魚はどこでどうしていたか不明である。『三教指帰』の内容と依用する典籍から推せば、山林修行の傍ら南都諸大寺の講筵に参加し、大安寺を拠点にして、『俱舍論』をはじめ、大安寺の三論、元興寺・興福寺の法相、東大寺の華嚴などのほか大乘の主要経論や護国經典を学んでいたことは明らかである。そして二十四才の時、仏道入門宣言の書『聾瞽指歸』を書き、儒家の思想・仏教・道教の博識を動員して、自分のこれから進むべき道が仏教であることを宣言し、それを顔真卿・李邕などといった名だたる中国書聖の筆法を用い、独自の雑体書で墨した。『三教指帰』はこの『聾瞽指歸』の再編である。

#### 【原文4】

此時佛前發誓願曰。吾從佛法常求尋要。三乘五乘十二部經心神有疑未以爲決。唯願三世十方諸佛示我不二。一心祈感夢有人告曰。於此有經名字大毘盧遮那經是乃所要也。即隨喜尋得件經王。在大日本國高市郡久米道場東塔下。於此一部解總普覽衆情有滯無所憚問。更作發心以去延曆二十三年五月十二日入唐。爲初學習。天應慰勲載勅渡海。彼海路間三千里。先例至于楊蘇洲無質云云而此度般增七百里到衡洲多礙。此間大使越前國大守正三位藤原朝臣賀能。作自手書呈衡洲司。洲司披看即以此文已了。如此兩三度。雖然封船追人令居濕沙之上。此時大使述云。切愁之今也。抑大德筆主呈書云云爰吾作書樣替於大使呈彼洲長。披覽含咲開船加問。即奏長安經三十九箇日。給於洲府力使四人且給資糧。洲長好問作借屋十三烟令住。經五十八箇日給存問勅使等。彼義式罔極。覽之主客各各流淚。次後給迎客使。給於大使以七珍鞍。次次使等皆給粧鞍。長安入京義式無可説盡。見之者滿於遐邇也。此間大使賀能大夫達向者歸國。惟延曆二十四年電時也。即配大唐貞元二十一年也。

#### 【書き下し4】

此の時、佛前に誓願を發して曰わく。「吾れ佛法に從い常に要を求尋す。三乘五乘十二部經、心神に疑い有つて未だ以て決を爲さず。唯だ願わくば三世十方の諸佛、我に「不」を示したまえ」と。一心に祈感するに夢に人有りて告げて曰わく。「此に經有り、名字は大毘盧遮那經。是れ乃ち所要なり」と。即ち隨喜して件の經王を尋ね得たり。大日本國（大和國）高市郡

たかいちぐん

の久米道場の東塔の下に在り。此に於いて一部總を解き普く覽るに、衆情滯有りて憚問する所無し。更に發心を作し、去んじ延曆二十三年五月十二日を以て入唐す。初めて學習せんが爲なり。天應じ慰勲にして勅を載せて渡海す。彼の海路間三千里。先例は楊蘇洲に至りて質すこと無し云云。而るに此の度、七百里を般り増して衡洲に到り礙多し。此の間、大使、越前國の大守、正三位藤原朝臣實能。自ら手書を作り衡洲の司に呈す。洲の司披き見て即ち此の文を以て已に了りぬ。此くの如く兩二度。然りと雖も船を封じ人を追ひ、濕沙の上に居らしむ。此の時大使述べて云わく。「切愁の今なり。抑も大徳は筆の主なり、書を呈されよ、云云」と。爰に吾れ書様を作つて大使に替り彼の洲長に呈す。披覽して咲を含み、船を開いて問を加えり。即ち長安に奏するに三十九箇日を経て洲府の力使四人を給ひ、且つ資糧を給う。洲の長好んで問ひ、借屋十三烟を作つて住わしむ。五十八箇日を経て存問の勅使等を給わる。彼の義式極まり罔し。これを覽る主客各々流涙す。次いで後迎客使を給わる。大使に給するに七珍の鞍を以てし、次次の使等に皆粧鞍を給う。長安の入京義式は説き盡くす可き無し。これを見る者遐邇に滿つ。此の間、大使賀能大夫達向う者歸國す。惟れ延曆二十四年の電時なり。即ち大唐貞元二十一年に配するなり。

【註記4】

①三乘…声聞・緣覺・菩薩。

②五乘…人・天・声聞・緣覺・菩薩。

③十二部經…仏教の教説を十二に分類したものを。修多羅(スートラ、散文)・祇夜(ゲイヤ、散文のなかの韻文)・和伽羅(ヴァーカラナ、授記)・伽陀(ガーター、偈)・優陀那(ウダーナ、自説)・伊帝日多伽(イティウタカ、本事)・闍多(ジャータカ、本生譚)・毘仏略(ヴァイプルヤ、方広)・阿浮陀達磨(アドウブフータダルマ、未曾有法)・阿婆陀那(アヴァダーナ、譬喩)・優婆提舍(ウパデーシヤ、論議)。

②心神…本心。

③不二…二つとない教え。

④大毘盧遮那經…『大日經』。

⑤所要…空海が必要としているもの。

⑥經王…經典の王。最高の經典。

⑦高市郡…今の奈良県橿原市の南方、明日香村の西方。

⑧久米道場…久米寺(現在、真言宗御室派)。来眼精舎とも。

⑨緘…封緘。

⑩衆情滞有りて…どんな人が読んだとてそこで止まってしまふ、の意。おそらく、具縁品以下の事相部分。とくに真言。

⑪憚問…問い質す。

⑫延暦二十三年五月十二日…一年おくれの第十六次遣唐使船団の第一船に乗り、難波ノ津を出航。日本における最終寄港地は平戸島北端の田ノ浦(肥前国松浦郡田ノ浦)。

⑬楊蘇州…揚州・蘇州、揚子江沿岸の大都市。

⑭衡洲…唐の時代、湖南省の衡山・耒陽・茶陵・攸・常寧・衡陽の六県を管轄した州。第十六次遣唐使船団は、肥前田ノ浦を出てまもなくの東シナ海で暴風雨に遭い、大使や空海が乗った第一船は海に漂うこと約一ヵ月、今の福建省霞浦県福寧湾の内湾の奥、赤岸村の浜辺(赤岸鎮)に漂着。そこでは上陸叶わず、福州の馬尾港に回航した。衡洲は当時、赤岸村や福州などを含む洲だったのだらう。ここでは福建省という省名は出てこない。

⑮藤原朝臣賀能…賀能は藤原葛麻呂の別称。

⑯切愁…心配・焦りが切迫している。の意。

⑰書様…例文案。

⑱ 力使…世話係。

⑲ 存問…安否を確認する、の意。

⑳ 義式…礼儀作法・

㉑ 七珍…七種類の宝。金・銀・瑠璃・瑪瑙・玻璃・蝦蛄・珊瑚。

㉒ 粧鞍…飾られた鞍。

㉓ 遐邇…遠近。

㉔ 電時…仲春。

#### 【私訳4】

その時、私は仏前で誓願し「私は仏法に従い、いつもその枢要を求め探しております。しかし三乗・五乘・十二部經に本心では疑念があつて決着できておりません。三世の諸仏、どうか二つとない教えをお示しく下さい」と言つた。一心に祈つてみると、夢にある人が現われて「ここにそのお経がある。大毘盧遮那經（大日經）と言ひ、あなたが必要としてゐるものだ」と告げた。喜び勇んでその最高のお経を探したところ、日本の大和高市郡の久米寺の東塔の下にあつた。早速封緘を解き全体に目を通してみると、どんな人が読んだとてそこで止まってしまうところがあり、それを問ひ質す所もなかつた。そこでさらに発心して、延暦二十三年五月十二日、（第十六次遣唐使船で難波ノ津を出航し）唐に渡つた。初めて密教を学ぶためである。天運が慇懃にして詔勅を乗せて渡海すること（通常は）三千里、前例では（揚子江沿岸の）揚州や蘇州に着岸でき問題ないのだが、云云。ところがこの度は、（最終寄港地肥前田ノ浦を出てまもなく、私が乗つた第十六次遣唐使船の第一船は東シナ海で暴風雨に遭ひ、難破船と同様になつて海を漂ひ）漂流約一ヶ月にしてようやく唐土の衡州にたどり着いたが、（倭寇とまちがえられて上陸は叶わず）その間大使の藤原葛麻呂は自ら上申書を作り、再三州の長官に（上陸許可と長安での朝貢を）申し出たが聞き入れられず、船から追い出されて湿つた砂浜に放置された。（然るに、）大使が「焦りと心配が切迫しています。大徳は書をよくします。私に代つて代筆していただけませんか」と申し出られたので、私は文案を作つて州の長官に呈示したところ、彼は読みながら笑みを浮かべ、船を開放してなお今後のことなどを聞いてきた。（長安の朝廷に日本からの使節団を相承するのに）三十九日を要しつつ州の世話役四人を与えてくれ、かつ食料を支給してくれた。州の長官は好んで問ひかけてくれ、十三の借屋も作つて住まわせてくれた。五十

八日後には（長安から私たちの）安否を確かめる使者も来た。（彼らの私たちへの）礼儀作法はこの上ないもので、その態度に主客皆涙を流して感激した。ついで長安から歓迎の使者がやってきた。大使が乗る馬の鞍は七宝で飾られ、次々と遣唐使たちの馬に飾られた鞍が付けられた。長安に入京する時の礼法は言葉に尽くしがたく、遠くも近くもこれを見る人がいっぱいだった。しばらくして大使の一行は帰国の途についた。時に延暦二十四年の仲春、唐では貞元二十一年に当る。

### 【付記】『大日経』との出会いと入唐留学

『大日経』とは。言うまでもなく、唐の開元十三年（七二五）にインド僧善无畏三藏が中国にもたらし、中国人の弟子一行の協力をえて漢訳をした『大毘盧遮那成仏神変加持経』（七卷）のことである。日本には、天平七年、在唐二十年で帰国した入唐僧玄昉がもたらし、天平九年（七三七）にわが国ではじめて書写され以後何十回も書写されていたことが「正倉院文書」（『写経目録』）に記されている。それから約二十年後の天平神護二年（七六六）には、朝廷の高官で学者である吉備真備の娘で、従三位尚藏の吉備由利が『大毘盧遮那経』を書写し西大寺に奉納している（国宝「天平写経」）。空海は久米寺の東塔の下で『大日経』を感得し、実際はこの西大寺で天平写経の『大毘盧遮那経』を開封して具に読んだに相違ない。しかし、空海には『大日経』の内容が理解できなかったため、唐に留学することを決意したという。おそらく具縁品第二以下の事相（実修）部分あるいは巻七の儀軌に出てくる作法や真言がわからなかったのだろう。

空海の入唐留学は幸運にしてまたあわただしかった。延暦二十二年難波ノ津出航した第十六次遣唐使船（大使・藤原葛麻呂）が瀬戸内海で悪天候に見舞われ、船が破損して修理のため一年おくれになったのである。さらに、唐への留学生は具足戒を受けた官僧でなければならなかったが、空海の具足戒受戒が仮に「延暦二十四年九月十一日付太政官符」及びそれと同文の『梅園奇賞』（野里梅園（毛利元壽））が言う延暦二十二年（八〇三）四月七日（□僧空海 俗名讃岐国多度郡方田郷 戸主正六位上佐伯直道長 戸口同姓真魚 右去延暦廿二年四月七日出家□□□□□□承和□□度之到奉行）だとすると、第十六次遣唐使船出航の直前であるが、空海はその時なぜか参加しておらず、瀬戸内海での海難がなければ、空海は第十六次遣唐使船に乗っていなかったし、そうなら恵果和尚に出逢うことはできなかった。

もう一つ、確たる典拠を知らないのだが、理源大師聖宝に、延暦二十三年（八〇四）四月九日に授戒し六月に出航したという説があると聞く。これは一年おくれの第十六次遣唐使船の出航（延暦二十三年五月十二日）直前で、あわただしくもいかにも現実的である。いずれにせよ、空海は第十六次遣唐使船で入唐する前に東大寺戒壇院で具足戒を受け、官僧にな

つていたことはまちがいない。受戒には、戒師に元興寺の唐僧泰信律師、(教授・唄師・承仕などで)東大寺の安積・真良・安暨・薬上の諸律師が立ち会ったという。おそらく勤操が上座で陪席し、親族席には阿刀大足らが坐ったであろう。度牒願はその日のうちに僧綱所に出され、日を待つことなく大安寺所属の官僧「空海」が誕生したにちがいない。「空海」という僧名は、「空」は中観の「空」(「十住心」第七)、「海」が華嚴経の「海印三昧」(「十住心」第九)の「海」だという説がある。

研究者に、空海の入唐留学の許可は、当時低落傾向にあった三論宗補強策の一環だったと言う説があるが、入唐留学前後や長安での空海の動向からして符合するものがないし、それよりも空海の叔父阿刀大足を侍講とする伊予親王の好意的なバックアップがあったという説もある。いずれにしても私費ながら留学生の許可が出たのである。

#### 【付記】 苦難の渡唐

藤原葛麻呂を大使とする第十六次遣唐使船団は、肥前国松浦郡田ノ浦(平戸島北端の田ノ浦)を出てまもなく東シナ海で暴風雨に遭い、波間に漂うこと三十四日、まさに生と死の狭間を行きつ戻りつする漂流の末、やつとの思いで台湾海峡西方の唐土に漂着した。赤岸鎮、今の福建省霞浦県福寧湾の内湾奥にある赤岸村の浅瀬であった。

この赤岸鎮では村人から海賊と誤解されたり襲われたりすることもなく無事に上陸できたと思われる。しかし泊る宿はない。一行は浜辺で思い思いに場所を選びそこをしばしの休息の場とした。大使は早速交渉役や訳語(通訳)を村の役所らしいところに行かせ、ここに漂着した次第と身分や渡海目的を明かし上陸と長安へ行く便宜の措置を願い出たが、村長にはその真意が通じたかどうか、長溪県の役所の方に回るよう勧められた。むかし閩人が領したこの中国東南の多様言語の地で、同行の通訳の唐語がどこまで福建人に通じたかは甚だ疑わしいが、ともかく交渉役らは長溪県の役所に赴いた。

ところが県でも結果は同じだった。県令の胡延派という役人も、日本の国使一行が東シナ海で遭難しここにたどりついたので信用しなかったのか、地方官として国交問題の措置権限がなかったのか、言葉が通じなくて本意が伝わらなかったのか、答えは「ここでは対応ができないから州の役所に行ってもらいたい。ただし、陸路は道が険しいので海路を行った方が安全である。だが今のところ、福州の刺史(長官)は前任者が病気で辞め後任がまだ赴任していないと思う」ということだった。

やむなく一行は、福州に向けて二百五十kmの海路を南にまた船に乗って行くことになった。赤岸鎮では四十五日を費やし

た。入国手続きで長引いただけではないだろう。おそらく難破船同様の船体や帆などの用材を調達し応急の修理をしたにちがいない。この船は空海らが下船したあと福州に留まって本格的な修理を行ったらしく、翌年春には明州に回漕され、その六月大使の藤原葛野麻呂らに乗せて対馬に帰還する。

八月十日に赤岸鎮にたどりつきそこで四十五日間留まったとすると、赤岸鎮を出たのはおそらく九月二十五日頃だったと思われる。それからまた二百五十kmを海上に浮かぶこと十日余り、十月三日、一行は福州の馬尾港に入った。福州は楓霞山脈を源とする閩江が東シナ海に流れ込む河口を少しなかに入った閩江河岸の大きな都市で、空海の頃もこの地の政治経済・外交交易の中心であった。馬尾港は福州の町から東南約二十kmのところにある古くからひらけた大規模な港で、福州の玄関口としてその発展のもとになっていた。

この港で一行の上陸手続きは難航する。交渉役たちが州の治所に向いたところ怪しまれ、州吏が船にやってきて全員を引きずり出し船を封印してしまった。この時代、馬尾港クラスの大きな港では外国の船に対する扱いが嚴重になっていた。朝貢船に対しては鄭重で関税も取らなかつたが市舶といわれる交易船には所定の関税をかけていた。空海たちの船は、見知らぬ上にアポなしの船で怪しまれたに相違ない。大使は思わぬ事態に当惑しながら何回も文書を書き、それを通訳にもたせて州の治所を往復させた。しかしそれもその都度黙殺され徒勞に終った。大使は東シナ海の嵐の時から空海のただならぬ靈威を感じていた。この頃の空海には生来の異能的オーラのほかに、山林や海浜で積み重ねた修行によって醸成された独特の神威がみなぎっていたはずである。この難事の時、大使はそれに感じた。聞けば書と文をよくするという。大使は懇慫に空海に文書の代筆を頼んだ。空海はそれにすぐ応じて、唐の文章家でさえうなるような美文の上申書を書いた。『性靈集』に残る有名な「大使、福州の觀察使に与ふる為の書」である。

これを読んだ福州の刺史兼觀察使（巡察使）の閩濟美は、書風・修辭・内容ともにはげぬけた異国の僧空海の文章力に驚嘆し、すぐさま州吏に命じ先ず船の封印を解き金貨を船のなかに保護した。さらに宿舎を十三棟も建ててそこに住まわせ、充分な食糧を提供した。同時に使いを長安に急行させ事の次第を報告するとともに取扱いの指示を仰いだ。使いは三十九日後に帰ってきた。一行を国賓として鄭重に遇せよとの勅命が下ったのである。閩濟美はじめ州官吏の態度と待遇は一変した。

やがて十月も終る頃、長安の都から迎えの勅使が福州にきた。乗員百二十名中、船員はこのまま船に残り船の修理や船荷などの整理に当る。長安に行くのは大使以下随行員の高等官たち、あとは留学生である。ところが留学生空海の名が長安へ行く人の名簿になかった。空海はさすがにあわてた。すぐ大使にかけあつたが、選抜の権限は州の刺史にあつた。空海はまた閩済美にあてて書（「福州の觀察使に与へて入京する啓」）をしたためた。はずされた理由は、空海の文才に驚いた閩済美が空海を福州に留め自分の配下として使おうとしたらしい。

事なきをえて空海は長安に行く二十三人のなかに加えられた。幼少期から漢籍に親しんできた空海が、中国の有職故実や中国人の文章についてどれだけの素養を身につけていたか、この福州のできごとがすべてを物語っている。二十三人は十一月三日、勅使が用意をしたチャーター船に乗り馬尾港を発つて閩江をさかのぼり南平に向つた。難波ノ津を出てからもう半年、やっと長安への途についたのである。

十二月二十一日、延暦二十三年もまもなく暮れようという年の暮、空海の一行は長安の入口ともいふべき長樂坂を下り、やっと長樂駅に着いた。京を出発してから幾日を要したであろうか。難波ノ津を発つてからとつくに半年が過ぎていた。一行はここで二日間休息した。勅使一行に厚く礼を述べ、お互いに長旅の労をねぎらつたであろう。空海もさすがに心の高揚を抑えられなかつたにちがいない。二日はまたたく間に過ぎ、十二月二十三日、内使の趙忠が用意した駿馬二十三頭に一人ひとり跨り列を正して長安城に入った。

一行はまもなく、宣陽坊（左街「東市」の西側）にある外国人用の宿舎に入った。鴻臚寺（館）ではなく使院（公館）であつた。鴻臚寺（館）は同じ時期に朝貢にきていた吐蕃と南詔（雲南地方の吐蕃の友好国）の一行で満室のようであつた。大使藤原葛野麻呂ほか随員はにわかになつて忙しくなつた。この年新年早々の徳宗の薨去に対し、二十八日には宮城正面中央の「承天門」で儀仗を立てて国家としての弔意を表した。その日、順宗（第十代）が即位したが、父帝の喪中のため城中はいたつて静かであつたという。

明けて延暦二十四年（大同元年）正月、大使らは国使としての新年朝賀を無事に終え、長安滞在わずかに三十日にして、二月十一日帰途についた。

【原文5】

爰少僧并橘大夫准勅留學即少僧遇上都長安青龍寺大德内供奉十禪師惠果大阿闍梨。沐五智灌頂學胎藏金剛兩部祕密法。及讀毘盧遮那金剛頂經等二百餘卷。并諸新譯經論唐梵合存。少僧以大同二年歸我本國。此間海中人人云。日本天皇崩云云聞諫是言尋本口言船内諸人論爭首尾都<sub>レ</sub>不一定。注繫著岸。或人言告。天皇某日時崩者。少僧懷悲給素服。從爾以降帝經四朝奉爲國家建壇修法五十一箇度。亦神泉菌池邊御願修法祈雨靈驗其明。上從殿上下至四元。此池有龍王名善如。元は無熱達池龍王類。有慈爲人不至害心。以何知之。御修法之此吒人示之。即敬眞言奧旨從池中現形之時悉地成就。彼現形業宛如金色長八寸許蛇。此金色蛇居在長九尺許蛇之頂也。見此現形弟子等賞惠大德并眞濟眞雅眞照眞慧眞曉眞然等也。諸弟子等敢難覽著。具注言心奏聞内裏。少時之間勅使和氣眞繩御弊種種色物供奉龍王。眞言道崇從爾彌起也。若此池龍王移他界淺池減水薄世乏人。方至此時須不令知公家私加祈願而已。亦授灌頂者蓋以員多。具不注之。若存灌頂流者自我身始。祕密眞言此時而立。

【書き下し5】

爰に少僧並びに橘大夫、勅に准じて留學す（具に別記に在り）。即ち少僧、上都長安の青龍寺大德、内供奉十禪師、惠果大阿闍梨に遇い、五智灌頂に沐し。胎藏・金剛兩部の祕密法を學び、及び毘盧遮那・金剛頂經等、二百餘卷を讀む。並びに諸々の新譯の經論、唐・梵合せ存せり。少僧、大同二年を以て我が本國に歸る。此の間海中の人人云わく。「日本の天皇崩す云云」と。聞いて是の言を諫め、本口の言を尋ぬるに、船内の諸々の人首尾を論爭し都て一定せず。著岸して注繫しするに、

ある人の言告げらる。「天皇、某日に崩す」と。少僧、悲しみを懷き素服を給わる。爾れ從り以降、帝四朝を経て國家の

奉爲に壇を建て修法すること五十一箇度、亦た神泉菌の池邊に御願もつて祈雨を修法し靈驗其れ明らかにして、上は殿上

從り下は四元に至る。此の池に龍王有り善如と名づく。元は是れ無熱達池の龍王類なり。慈有りて人の爲に害心に至らず。

何を以てこれを知るや。御修法の此、人に吒してこれを示す。即ち眞言の奥旨を敬つて池中従り形を現ずる時、悉地を成就す。彼の現ずる形業宛も金色の如く、長さ八寸許りの蛇なり。此の金色の蛇長さ九尺許りの蛇の（頭）頂に居在するなり。此の現形を見る弟子等は實惠大徳並びに眞濟・眞雅・眞照・堅慧・眞曉・眞然等なり。諸弟子等敢えて覽著し難し。具に言心を注し内裏に奏聞す。少時の間に勅使和氣眞繩、御弊の種種の色の物を龍王に供奉す。眞言道の崇きこと爾れ従り彌起るなり。若し此の池の龍王他界に移らば、池を淺くして水を減じ、世を薄くして人を乏しくす。方に此の時に至り、須く公家に知らしめず私に祈願を加うるのみ。亦た、灌頂を授くる者蓋し以つて員多し。具にこれを注さず。若し灌頂の流れを存する者は我が身より始まり、祕密眞言は此の時にして立つ。

【註記5】

- ①少僧・拙僧。空海のこと。
- ②橘大夫・同じ留学生の橘逸勢。空海と同時代の朝廷官僚。書と琴に長じ、空海・嵯峨天皇とともに日本三筆と言われる。承和九年（八四二）、承和の変で謀反の疑いをかけられて捕縛され、伊豆に流罪となつたが護送の途中で病没した。
- ③上都・帝都。長安。
- ④青龍寺・空海の師惠果和尚が住した長安城中の仏教寺院。惠果の時代から以後両部密教を奉じたが、会昌の廢仏以降廢没の憂き目にあつた。空海のと、眞言宗の円行・惠運・宗叡、天台宗の円載・円仁・円珍が法全から受法している。
- ⑤内供奉十禪師・宮中の内道場に出仕する学徳ともに秀でた十人の仏教僧。玉体安穩を祈るほか、新年の齋会を司り、天皇病氣・不快の際はその平癒・本復を祈る。
- ⑥惠果大阿闍梨・眞言付法の第七祖。第六祖不空三蔵の弟子。空海の師。金剛界・胎藏界両部不二の密教を伝持。

⑦五智灌頂…五瓶に入れられた五智の瓶水を、伝法の阿闍梨が受者の頭上に注ぐ作法。

⑧胎藏・金剛兩部…胎藏界と金剛界の大法。

⑨毘盧遮那…『大日経』。

⑩唐・梵…漢訳本と梵本（サンスクリット原文）。

⑪天皇…桓武天皇。

⑫本口…一番最初に言った人、うわさ話の出所、の意。

⑬著岸…帰国船の着岸、すなわち那ノ津（博多）の岸。

⑭注繫…注意し続ける、聞いて回る、の意。

⑮素服…白無地の服、生地のままの色の服、喪服。

⑯帝四朝…平城・嵯峨・淳和・仁明の四天皇。

⑰壇…修法壇。

⑱神泉園…今の神泉苑。平安京時代、内裏近くに造られた天皇のための庭園（禁苑）。天長元年（八二四）、空海が西寺の守敏と争った善如龍王への雨乞いの修法以降、東寺が管理する雨乞いの道場になった。

⑲殿上…宮中、天皇。

⑳四元…東西南北。

㉑無熱達池…ヒマラヤの北にあり阿耨達龍王が住むという伝説上の池。阿耨達池あのかたじちとも言う。原語の「Anavatapta」は、音訳で

阿耨達、意識で無熱惱（池）。

㉒御修法…承和二年（八三五）、空海が宮中に真言院を設けて『金光明最勝王経』に基づいてはじめた玉体安穩・鎮護国家の宮中新年行事。新年八日より十四（後七日）に行われる玉体加持の密教修法。現在は東寺の灌頂院で真言宗十八本山の管長ほか出仕のもとに行われている。ちなみに前七日は神道による節会。

㉓悉地…普通「成就」の意味であるが、ここは祈りの具現。

㉔實惠大徳…空海の上位の弟子。東寺長者。讃岐の佐伯氏で空海の一族。

㉕眞濟…空海の高位の弟子。高雄山寺別当。東寺長者。『性霊集』の編者。高雄に隠棲。

②6 眞雅・空海の弟。空海入定後、弘福寺（飛鳥の川原寺）・東大寺真言院・東寺大経蔵を任せられ、東寺に住し、東大寺別當を兼ね、貞観寺を創建した。弟子に眞然・源仁・聖宝など錚々たる逸材がいる。

②7 眞照・堅慧・眞曉・堅慧は室生寺の開祖。空海に師事。眞照・眞曉は不明。

②8 眞然・空海の甥。九才で空海に隨身、眞雅に師事。空海から高野山を任せられ、空海入定の際は葬儀の指揮をとる。中院に住し高野山の経営に当る。

②9 色物・種種の色の御幣。

③0 和氣眞繩・朝廷の高官和氣清麻呂の五男・眞綱。兄の広世とともに氏寺高雄山寺で最澄・空海に協力した。

③1 薄・薄幸。

### 【私訳5】

ここに、私と橘逸勢は詔勅に従って唐に留学した。私は唐の帝都長安の青龍寺大徳、内供奉十禪師の恵果大阿闍梨に出逢うことができ、五智の灌頂を受け、胎蔵界・金剛界両部の秘法を受學し、さらに『大日経』『金剛頂経』等二百余巻を読解したほか、漢訳本・梵本の新訳の経論も読んだ。

私は、大同二年（八〇七）に帰国したが、海の上で乗組員が「日本の天皇が崩御した」と言うのを聞いた。（まさかと思ひ）そうした（不謹慎な）流言を諫め話の出所を探すと、船内のいろいろな人が事の顛末をあれこれと言ひ一定しない。那ノ津（博多）に着岸したので注意し続けていたら、ある人から「（桓武）天皇が、某日時に崩御された」と聞き、悲しみに沈んでいると（鴻臚館あるいは大宰府から）喪服が支給された。

それ以降、平城・嵯峨・淳和・仁明の四朝の間、国家鎮護のために修法壇を建立し修法すること五十一回。また、神泉苑では（日照り・干ばつに悩む）天皇の勅願に従ひ、その池の側で「雨乞ひの修法」（請雨法）を行ひ、その靈験は上は天皇から下は庶民に至るまで顕著であった。この池には善如という龍王が棲み、そのもとにはヒマラヤの北にあるという無熱達池の龍王の種姓である。（姿は異形だが）慈悲深く人を害さない。なぜ知っているかというとき、年正月の御修法の頃人に託してこれを示したことがある。すなわち、真言の奥義を敬つて池のなかからその姿を現す時、雨乞ひの勅願が成就したのである。龍王の姿は金色で、身長は八寸程度の蛇である。身長九尺の大蛇の頭頂に乗っていた。その姿を目の当たりにした弟子たちは實惠・眞濟・眞雅・眞照・堅慧・眞曉・眞然で、ほかの弟子たちは敢えてまぎまぎと見なかった。早速、

事の次第を注記して内裏に奏上した。まもなく勅使として和氣真繩（真綱）が来て種種の色の御幣を供えた。真言の密法の尊いことはこれからはじまっている。もし、この池の龍王がほかの世界に移住したら、池は浅くなり水は減り、世の中は薄幸になり人々は窮乏するだろう。まさにこのような時は、すべからず公卿に言わなくとも（人々のために）内々に祈願を加えるべきである。また、灌頂を受ける者が多くなつた。詳しくは記さないが、もし灌頂を受けた者があるとすれば、私からはじまつていて、真言密教はその時に（世の中に）確立するのである。

【付記】奇跡的幸運がもたらした密法受法

「御請来目録」に奇跡的幸運に恵まれた密法受法の様子が次のように略記されている。

城中を歴て名徳を訪ふに、偶然として青龍寺東院の和尚、法の諱恵果阿闍梨に遇ひ奉る。

空海、西明寺の志明・談勝法師等五六人と同じく往ひて和尚に見ゆ。和尚忽ち見て笑を含み、喜歡して告げて言わく。「我、先より汝が来れることを知り相待つこと久し。今相見ゆること大ひに好し大ひに好し。報命竭きなんと欲するに付法に人無し。必ず須く速かに香花を弁じて灌頂壇に入るべし」と。

六月上旬に学法灌頂壇に入る。是の日、大悲胎藏の大曼陀羅に臨み、法に依りて花を抛つに、偶然として中台毘盧遮那如来の身の上に着く。

五部灌頂に沐し三密加持を受く。是より以後、胎藏の梵字儀軌を受け、諸尊の瑜伽観智を学す。七月上旬に更に金剛界の大曼荼羅に臨み、重ねて五部灌頂を受く。亦た抛つに毘盧遮那を得たり。和尚驚嘆したまふこと前の如し。

八月上旬にも亦た伝法阿闍梨位の灌頂を受く。是の日五百の僧齋を設け普く四衆を供す。青龍大興善寺等ノ供奉大徳等、並んで齋筵に臨み悉く皆随喜す。『金剛頂瑜伽』五部の真言・密契を相續けて受け、梵字梵讀を間もて

是を学す。

(惠果和尚の遺告)

宣しく是の両部大曼荼羅、一百余部の金剛乘の法、及び三藏転付の物、並びに供養の具等、本郷に帰って海内に流伝せんことを請ふ。纔に汝が来れるを見て、命の足らざるを恐れり。今即ち授法の在るあり。経像の功畢んぬ。早く郷国に帰り、以て国家に奉じ、天下に流布して、蒼生の福を増せ。然れば則ち四海泰く万人樂しまん。是れ則ち仏恩を報じ師徳に報す。国の為には忠、家に於ては孝なり。義明供奉ハ此処にて伝へん。汝は其れ行きて、是れを東国に伝へよ。努力、努力(努めよ、努めよ)。

この時代の唐の密教は不空三藏の愛弟子である惠果和尚を最高の依止師としていた。惠果が東塔院に住する青龍寺には、内外から千人を超える弟子が密法の受学に来ていたという。青龍寺は、西明寺とは正反対の、東側の城壁南門の「延興門」の目の前、左街の最東辺、新昌坊南門の東の高台にあつた。当時は参詣者も多くにぎやかな密教寺院であつたらしい。惠果の時代までは密教寺院だつた形跡はないが、惠果のほか惠応、惠則、惟尚、弁弘、惠日、義満、義明、義照、義操、義愍、さらにその弟子らの高僧が輩出し、平安時代に入唐した留学僧八人(最澄、空海、常暁、円行、円仁、惠運、円珍、宗叡)のうち太字の六人を教えた。そのうち義操は空海と並ぶ正嫡で、さらに日本僧とは大変縁が深く、円行・円仁・円載・円珍・宗叡らはその高弟の義真や法全から金胎の大法を受法している。惠果が衣鉢を託した義明は不運にも若くして没している。しかし、八四五年に武宗が強行した「会昌の廃仏」は西明寺を含む四カ寺を残し九十を超える仏教寺院をことごとく破壊し、青龍寺もまた容赦ない法難に遭つた。幸い、翌年「護国寺」として復興し、八五五年にはもとの青龍寺と呼ばれるようになった。この年円珍が長安に入り青龍寺で法全に師事している。

惠果(七四六〜八〇五)は、幼少時に出家し当初から青龍寺に入り、聖仏院の曇貞を師とする。その後、不空に師事し、二十才で「具足戒」を受け、『金剛頂経』系の密法を受法した。二年後、善無畏門下の玄超から『大日経』系を授かつた。三十才の七五五年、青龍寺東塔院に灌頂道場を下賜され、内供奉十禅師に任じられた。七八九年には日照りに際し請雨法を修し徳宗の帰依を受けた。八〇二年病をえて愛弟子義明に後事を託し、八〇四年般若三藏の醴泉寺に金剛界曼荼羅を造

り、般若ほか諸大徳が法筵に随喜した。その時請雨を修しその功頭があつたという。最晩年の八〇五年空海とめぐり合い、義明とともに空海に金胎両部の大法を授け、そのほか五十種からの諸尊念誦法を伝授し、曼荼羅・法具・付嘱物を与えた。同年十二月十五日に東塔院で示寂した。遺骸は場外の龍原にある不空の塔の側に埋葬された。弟子を代表して空海がその碑文（「大唐神都青龍寺故三朝國師准頂阿闍梨惠果和尚之碑」）を撰した。

長安の西明寺で、在唐二十年にして今度帰国する大安寺の永忠が起居した部屋に落ち着いた空海は、しばらくの間市中を見学しながら師事すべき大徳を探した。まず、おそらく西明寺で親しくなつた志明や談勝の助言により、長安城右街「西市」の一筋北、醴泉坊の醴泉寺に般若三蔵をたずねた。般若はインドの学僧で『四十華嚴』（華嚴經最終章の「入法界品」）を漢訳した人であり、当然梵字・悉曇には明るく、おそらく華嚴宗の当代澄観と親しかつたので、華嚴と密教の親和性についてもよく知つてゐるのではないか、『四十華嚴』訳出の際には、この西明寺の円照も手伝つてゐるとも言つたかと思ふ。この般若三蔵のところには、空海のサンスクリット学習の先輩（十四才年長）で、同じ第十六次遣唐使船で入唐した靈仙が後日入り、般若三蔵の訳經を手伝つた（『大乘本生心地觀經』）。その功績は皇帝憲宗の認めるところとなり、その名声に対して淳和天皇は黄金を日本から贈つてゐる。好事に魔は多く、憲宗の仏教擁護に反発した反仏教徒によつて憲宗が暗殺されると、靈仙は危険を察知し五台山に身を隠した。しかし不運は続き、五台山でも皇帝の寵愛に対する羨望と反発に遇い、靈鏡寺の浴室院で毒殺された。承和七年（八四〇）、五台山に上つた円仁が靈鏡寺でそれを聞いてゐる。

延暦二十四年（八〇五）六月十二日、空海は西明寺の志明・談勝らとともに青龍寺東塔院に惠果和尚をたずねた。おそらく般若三蔵の仲介があつたにちがいないが、この時期までに般若三蔵や牟尼室利三蔵から学んだ空海の本場のサンスクリット語力は相当なレベルに達し、華嚴思想も本場のものを身につけ、『大日經』は「具縁品」以下も学解ではほぼ掌中に収め、命がけの渡唐の目的はほぼ達成してゐただろう。ただ、般若が言うには密教は学解と修法（実践）の両方が大事で、それには密教の阿闍梨から受学・受法することが必須だと言われた。そのこともあつて惠果に会い『大日經』の学解と修法の受法が叶うかどうかだけでも聞いてみたかったのである。

幸い、その日空海は幸い惠果に会えた。見るからに病弱の気配がありありの老師であつたが、空海を見るや否やいきなり「君が長安に来てゐることは知つてゐた。いつ来るかとずいぶん待つたものだ」と喜んだ。おそらく、情報源は般若三蔵

であつたらう。般若が空海の異能を一番早くまた最も濃密に見抜いていた。それをすぐ惠果に伝え、惠果の正嫡候補として推薦していたと思われる。般若は惠果の最期が近いことを察していた。さらに惠果に千を超える弟子がいても、そのうち両部の大法を授けた高弟が何人かいても、まだ正嫡に価する機根の弟子に恵まれていないことが惠果の懊悩であることもよく承知していた。

惠果は空海の尋常でない機根を般若三蔵から聞いて、ほぼ正嫡に価する法器であると心に期してはいた。般若によれば、空海のとくにサンスクリット語力が抜群であるという。例えば、金胎両部の念誦法にしる諸尊供養法にしる、行法のなかの真言はそれを聴いた瞬間にほぼサンスクリットそのものの意味が、あるいは唐語や和語への変換が、わかるというほどである。そのレベルにしてはじめて密法は正しく伝わるのである。それこそが伝法の本来である。般若が空海のことを惠果の待ちわびる正嫡候補として推薦をする主因はそこにあつたにちがいない。

空海に直接対面した惠果は、般若の推薦が誤りでないことをすぐに悟つた。即座に灌頂を授けようと言ひ出した。空海はその意味を計りかねた。空海にはそこまで密教というものがわかつていなかった。空海にわかる密教とは山岳修行レベルの雑密と『大日経』の学解だけであつた。空海は惠果の真意を恐る恐る聞いたであらう。惠果は苦笑しながらも、自らの「金胎不二」の密教を諄々と説いた。ここではじめて空海は大乗仏教の最新バージョンを知つた。教理的には華嚴の理解が役に立つた。奈良で学んだ三論（中観）や法相（唯識）も役立つた。しかし惠果の密教はそれらを大きく超えていた。

惠果の話聞いて、釈尊からの全仏教史が「無執著」「無我」「空」「縁起」「法性」「仏性」「本覚」「諸法実相」「法界」「法身」「生仏一如」「菩提心」「速疾成仏」という教理概念の連鎖として空海の腑に落ちた。だからその瞬間、ここで惠果の勧めに従つて金胎両部の大法を受法することが、とりもなおさず仏道を選んだ自分を全仏教思想史のなかに投歸することであり、この望外のチャンスを逃す手はないと悟つた。空海は慇懃に「密教の修行未履修の私が灌頂の壇に入つていいのでしょうか」と聞いたであらう。惠果は笑つて「あなたの機根はそれを越えている、明日灌頂をやろう」と答えたに相違ない。同席した志明も談勝らも驚きながら大いに喜んだ。一番喜んだのは惠果だつたであらう。空海はすぐ般若三蔵にこのことを伝えた。般若は懇切に灌頂受者の心得から準備するもの、さらにこれから必要な修学について助言もしてくれたであらう。

翌六月十三日、空海は胎藏界の学法灌頂（＝受明灌頂）を受け、七月上旬に金剛界の同じ「受明灌頂」を受けた。「受明

灌頂」とは、まず所縁の一尊と結縁し、その印と真言を受法し、密教を受學しようとする者に弟子の資格を与えるいわば略式の灌頂である。とはいえ、灌頂の秘儀で一番に重要な「投華得仏」とその結果結縁した曼荼羅中の一尊の秘印（最極秘の印）・秘明（最極秘の真言）の授受を行う。

「投華得仏」とは、灌頂道場に設えられた「敷曼荼羅」の上に受者が櫛の房（「華」）を投げ落し（「投華」）、「華」が落ちた曼荼羅の一尊と結縁する（「得仏」）儀礼をいう。空海は、六月の胎藏界につづき七月の金剛界の時も「華」が曼荼羅の中央の大日如来に落ち恵果を驚嘆させた。恵果は空海の靈威的氣質にも驚きながら、胎藏界大日と金剛界大日それぞれの秘印・秘明を授けたに相違ない。

六月の胎藏界「受明灌頂」のあと、空海は胎藏界の梵字と儀軌の伝授を受けたという。胎藏界諸尊の「種子」と「胎藏界念誦次第」のことか。これによって胎藏界の三摩地法（念誦法）の練磨に入ったのである。空海はそれを一ヶ月ほど行い、続けて七月に金剛界「受明灌頂」を受け、同じように金剛界三十七尊の「種子」と「金剛界念誦次第」の伝授を受け、それによって金剛界三摩地法の練磨を重ねた。それもまた一ヶ月ほどである。

恵果は胎藏・金剛両界の三摩地法の熟達ぶりを見届け、問を置かず八月十日、空海のために阿闍梨位に上る「伝法灌頂」を行った。先ず空海は三昧耶戒道場に引入され、壁代（布の囲い）のなかの高座に坐す恵果の御前に進み、仏性戒（「四重（禁）戒」「十無尽戒」「（仏性）三昧耶戒」）を受けた。次いで胎藏界の灌頂道場に引入され、覆面（目かくし）をされ、「普賢三昧耶」の印を手に結び、その真言「オンサンマヤサトヴァン」を口に唱え、曼荼羅壇の側まで進み、そこで「投華得仏」した。さらに恵果の待つ「小壇所」に入り恵果から「五瓶」の五智水を頭上に注がれた。この受者の頭上に水を注ぐのが「灌頂」という文字の意味である。そして灌頂の秘儀中の秘儀である秘印・秘明の口授である。空海は宝冠を頭にかぶせられ、胎藏界大日如来の秘印・秘明を授かった。同じ日続けて金剛界の伝法灌頂が行われ、空海は胎藏界と同様の流れで金剛界大日如来の秘印と秘明を授かった。灌頂の秘儀中受者の空海は、恵果阿闍梨に従い滞りなく印を結び真言を唱え、いくつもの作法所作を違えなかつたろう。六月上旬から八月上旬までの両部念誦法の練磨はこの時のための練行だった。

惠果が千人からの弟子を差し置いて空海に伝法したこの異例の措置に、早速門弟たちから異論・反発が起った。玉堂寺の珍賀は再三妨害の申し出を試みたが、やがて夢のなかで非を悟り空海に詫言ひた。

秋にかけて空海の日々は一変した。西明寺の居室を早朝に出て一日中青龍寺の惠果のもとで各種修法の伝授を受ける日が続いたと思われる。この時期に『大日経疏』の伝授もあったのではないか。『大日経疏』は七二五年に善無畏三蔵が漢訳した『大日経』の註釈であり、善無畏が講じ弟子の一行がそれを筆受し註釈を加えたもので、『大日経』理解のための必読の書である。

空海はこの『大日経疏』をはじめ新訳の密典・儀軌・梵字真言讚を書写生に頼んで書写しはじめ、橘逸勢らの手も借りて『四十華嚴』ほか修学の記録を書き留めることもはじめた（『三十帖策子』）。また詩文や書の書籍も集め、注文した絵図や法具のほか筆や墨に至るまで作らせ、日本に持ち帰る算段をはじめた。橘逸勢は「君は、国禁を犯してまですぐにでも帰るつもりなのか」といぶかったであろう。

空海は幸運というか、折りしも同じ第十六次遣唐使船団の僚船で東シナ海で遭難し那ノ津に引き返していた判官高階真人遠成率いる第四船が単独で渡唐し、朝貢のため長安に入っていることを聞いて知っていた。さらに鴻臚館に滞在中の判官に直接面会し、自分が奇跡的に受法した得がたき仏法を早く日本に持ち帰り国家のために役立てたいため、国禁を破ってでも判官とともに帰国したい旨を申し出（「本国の使に与へて共に帰ることを請ふ書」（『性靈集』））、いかに国家のためにも有益かを必死に説いた。真人はこの国禁破りの尋常でない申し出に官吏として困惑しながらも、空海の意志の堅固さを理解して早速空海の帰国を唐朝に奏上し、ほどなくその許可が下りたのである。

そうこうする間に、年末の十二月十五日、師惠果が自坊の東塔院で示寂した。空海はまさに、惠果の惠命が尽きるぎりぎりの時に間に合って師法を授受したのであった。惠果の遺骸は、翌年（大同元年（八〇六））正月十六日に埋葬された。空海は師の埋葬を見届けると帰国を急いだ。手配していた曼荼羅ほかの品々も皆できあがってきた。空海が長安を辞した日はわからないが、その年の四月にはもう浙江にいたことが判明していることから、二月中旬から下旬には長安を発つていたと思われる。

盛大な送別の宴が催されたという。醴泉寺の般若三蔵や牟尼室利そして靈仙、青龍寺の義明たち、西明寺の円照・志明・談勝、長安の文芸界の著名人たち、書の師韓方明も出席したであろう。皆が空海の早い帰国を惜しんだ。

旅立ちの朝、長安城外の灊橋のたもとに空海との別れを惜しむ人が溢れていた。別れの最後に般若三蔵が柳の枝を空海の手渡し抱擁しながら、「できることなら君といっしょに日本に渡りたいものだ」と言ったかと思ふ。七十を越えた般若は老令を悔やみながら、日本に渡りたい願望をいつも空海に明かしていたのである。

帰りの船で空海は桓武天皇崩御の声を耳にした。「そんな不謹慎なことを言うものではない」とその話に興じている船員たちを諫めたが、ほかの誰に聞いても真偽のほどはわからなかった。しかし那ノ津に帰着して迎えの鴻臚館官吏や大宰府の官人たちに聞くと、皆口をそろえて桓武の崩御を答えた。早速大宰府の府庁に帰国挨拶に出向くと、そこで待っていたのは太宰帥として春に赴任した伊予親王（桓武の第三皇子）で、悲しみ暮れていた。空海の叔父の阿刀大足は伊予の侍講で、空海は幼い時から伊予と親しかったが、不運にも伊予はこの翌年秋、謀反の疑いをかけられ憤死した。

#### 【付記】神泉苑での雨乞い（請雨修法）

天長元年（八二四）二月、空海は、折からの干ばつや飢饉を脱するため、勅命によって神泉苑で行われた雨乞いの祈禱に参じた。その功験によって三日間雨が降りつづけ、全国の田畑が潤ったといわれている。

神泉苑は内裏の南側にあり、二条から三条にまたがるほど広大で、美しい池庭をもつ禁苑であった。延暦十九年（八〇〇）に桓武が行幸し、翌々に雅宴を催して以来、天皇や朝廷貴族の宴遊の場になっていた。

その神泉苑の池に龍が棲んでいると言われていた。龍はもともと空想上の生物で神獣・靈獣の一種である。中国では皇帝のシンボルであったり、道教の神（青龍、白虎・朱雀・玄武とともに四方神の一つ）に変じたりする。龍は水に棲み春分に天に昇り秋分に水底に沈み雨を司るといふ。平安京を風水で観ると、神泉苑の池は龍口水といわれ、龍脈（京洛を囲む山々）の気が（平安京の）龍穴に向って動くその軸線上にかならず配置される水場である。龍が動いている時は、そこでかならず水を飲む。水を飲む所がなくなれば龍は逃げてしまい、龍脈の山々は存在しても気はなくなってしまう。神泉苑は龍を生かすための水飲み場だといふのである。

伝えによれば、西寺の守敏は嵯峨天皇のおぼえめでたい空海を常日頃から不愉快に思っていたが、空海を重用する嵯峨・淳和の二帝を逆恨みするまでになり、修法によって干ばつの飢饉を起すことを企み三千世界の龍神を全部捕らえて小さな水瓶のなかに押し込めてしまった。干ばつの飢饉に困った淳和はそれとも知らず、守敏に雨乞いの祈禱をさせたのだが、

十七日目にやっとわずかばかりの雨が降っただけだった。龍神を自ら封じ込めてしまったためである。淳和天皇は守敏に代って空海に雨乞いを命じた。しかし七日経っても雨は降らなかつた。空海はおかしいと思ひ、觀法によつて三千世界の龍神を探してみると、守敏によつて皆が水瓶のなかに閉じ込められていた。そこで空海は一頭だけ残っていたヒマラヤの北に棲む善如龍王を勧請すると、善如龍王が金色の八寸大の龍神の姿となり、身の丈九尺ほどの蛇の頭に乗つて池に降り立った。淳和はその實際を空海からの上表で知り、和氣真綱に命じて種々の色の御幣や供物を龍神に供えた。空海が修法を再開したところたちまち黒雲がわき起り、三日三晩大雨が降りつづいた。

守敏はこれを不服として空海をますます逆恨みし、ついに矢を放つて殺そうとした。ところが、そこに地蔵菩薩が現れて矢を代つて受け（「代受苦」）、空海は助かつた。守敏はこれによつて失脚し、以降西寺とともに歴史の舞台から姿を消したという。地蔵菩薩の背中には矢の刺さつた傷が残つた。その地蔵菩薩は今「矢取地蔵」として羅城門跡公園入口の小堂に祀られている。

この伝説の舞台となつた神泉苑・東寺・西寺は、平安時代に民間から広まつた「御靈會」の舞台でもあつた。「御靈」とは、政治的に抹殺され現世に恨みを残して死んだ者の靈（怨靈）で、人々にタタリや災いをもたらすと信じられていた。その典型が疫病である。御靈會は仏典の誦誦または講説や芸能の奉納によつて靈鎮めを行い、疫病の退散を祈るものである。貞觀五年（八六三）五月二十日にこの神泉苑ではじめて行われた。

神泉苑での雨乞いの祈祷の實際は、十三世紀に奈良西大寺の叡尊が写した「指図」によると、池の北側に修法壇をいくつかなかに設けた大きな仮屋を建て、十三本からの幡を整然と立て、主尊として孔雀明王の圖像が懸けられたことがわかる。十三本の幡が立ち並ぶ様は余白にわざわざ拡大して描かれている。四天王と八大龍王（難陀・跋難陀・紗伽羅・和脩吉・徳叉迦・阿那達多・摩那須・優鉢羅）、または四神（青龍・白虎・朱雀・玄武）と八大龍王、それに本尊孔雀明王を表わす幡ではなかつたか。

その仮屋の修法壇で空海は「請雨經法」を修した。さらに『仁王經』や『雨宝陀羅尼經』も講じたであろう。のちの『義經記』には「神泉苑の池にて仁王經を講じ奉らば八大龍王も知見納受垂れ給う」とあるという。

【原文6】

夫師資相傳嫡嫡繼來者。大祖大毘盧遮那佛授金剛薩埵菩薩。金剛薩埵菩薩傳于龍猛菩薩。龍猛菩薩下至大唐玄宗肅宗代宗三朝灌頂國師特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空阿闍梨六葉焉。惠果則其上足法化也。凡勘付法。至于吾身相傳八代也。吾到日彼大阿闍梨曰。我命既盡待汝既尚。已果來我道東矣。故吳殷纂云。今有大日本國沙門來求聖教。皆令所學可如瀉瓶。此沙門是非凡徒三地菩薩也。内具大乘心外示少國沙門相云云大阿闍梨御相弟子内供奉十禪師順曉阿闍梨之弟子玉堂寺僧珍賀申云。日本座主設雖聖人。是非門徒也。須令學諸教。而何擬被授蜜教云云兩三般妨申。於是珍賀夜夢降伏曉旦來至。少僧三拜過失謝言云云又去弘仁七年表請紀伊國南山殊爲入定處。作二兩草庵。去高雄舊居移入南山。厥峯絕遙遠阻人氣。吾居住時頻在明神衛護。常語門人。吾性狎山水疎人事。亦是浮雲之類。追年待終爲此窟東。太上皇有勅請下安宿中務供養餘月。還更居高雄天皇帝即位任少僧都。再三奏辭不允在公。雖云萬事無違。春秋之間必二往看。彼山裏路邊有女神。名曰丹生津姬命。其社迴有十町許澤。若人到著即時傷害。方吾上登日託巫祝曰。妾在神道望威福久也。方今菩薩到此山妾之幸也。弟子昔現人之時食國璽命給家地以萬許町。南限南海。北限日本河。東限大日本國。西限應神山山谷也。冀也獻永世表仰信情云云如今件地中所有見開田三許町名常庄是也。

【書き下し6】

夫れ師資相傳して嫡ちやくちやく嫡ちやくちやく繼來する者は、大祖大毘盧遮那佛が金剛薩埵菩薩に授け、金剛薩埵菩薩が龍猛菩薩に傳う。龍猛菩薩の下、大唐の玄宗・肅宗・代宗三朝の灌頂國師で、特進試鴻臚卿、大興善寺三藏沙門、大廣智不空阿闍梨に至るまで六葉なり。惠果は則ち其の上足じょうそくの法化ほうけなり。凡そ付法かんがを勘かんえるに、吾が身に至るまで相傳すること八代なり。吾れ到りし日、彼の大阿闍梨曰わく。「我が命既に盡きなんとす、汝を待つこと既に尚なほし。己に果たして來たり我が道を東せん」と。故に吳殷ごいんが纂さんに云わく。「今、大日本國沙門有り來たりて聖教を求む。皆學ぶ所をして瓶に瀉すが如くなるべし。此の沙

門是れ非凡の徒にして三地の菩薩なり。内に大乘心だいじやうしんを具し、外に少國せうこくの沙門の相示す、云云」と。大阿闍梨とは御相弟子ごあいでしで、内供奉十禪師の順曉阿闍梨の弟子、玉堂寺の僧珍賀が申して云わく。「日本座主、設い聖人と雖も、是れ門徒に非ざるなり。須く諸教を學ばしむべし。而るに何ぞ蜜教を授けられるに擬するや、云云」と、兩般妨げ申す。是に於いて珍賀、夜に夢にて降伏し曉旦きやうたんに來たり至つて、少僧に三拜し、過失を謝して言わく、云云。

又、去んじ弘仁七年、表して紀伊國南山を請い、殊に入定の處と爲す。「一兩の草庵を作り、高雄の舊居を去り南山に移り入る。厥その峯絶遙にして遠く人氣を阻む。吾れ居住の時、頻しきりに明神の衛護在り。常に門人に語るに「吾が性、山水なに狎れ人事に疎うとし。亦た是れ浮雲の類なり。年を追ひ終りを待つこと此の窟の東と爲さん。太上皇の勅有りて請い下して中務ちゆうむに安宿し供養すること餘月。還つて更に高雄に居す。天長の皇帝即位し少僧都に任ぜらる。再三辭するを奏するも允さず公に在り。萬事違無いとましと云うと雖も、春秋の間必ず一たび往いて看る。彼の山の裏路の邊りに女神有り。名づけて丹生津姫命にうつひめのみことと曰う。其の社の迴りに十町許りの澤有り。若し人到りて著すれば即時に傷害せらる。方に吾が上登の日巫祝ふしゆくに託して曰く。「妾われ、神道に在りて感福を望むこと久しきなり。方に今、菩薩此の山に到る、妾れの幸なり。弟子(私)、昔、人に現ざるの時、食國おすくに隍命むらたのみこと家地を給するに萬許りの町を以てす。南は南海を限りとし、北は日本河を限りとし、東は大日本國を限りとし、西は應神山の谷を限りとするなり。冀わくば永世に獻じて仰信の情を表わす、云云」と。如今じよこん、件の地中に所有する開田三許りの町を見、常の庄と名づくは是れなり。

【註記6】

①特進試鴻臚卿・不空三藏の官位。特進の鴻臚寺長官見習い。鴻臚寺は唐の国家官庁（九寺・五監・十六衛）の一つ。外国からの使節や賓客を泊め接待する外交使節。日本では、平安京の羅城門の東隣に鴻臚寺があり、空海の時代に東寺（教王護国寺）となった。博多にも、平和台球場跡の発掘調査で鴻臚館が見つかっている（鴻臚館跡資料館）。

②六葉・六祖、の意。

③上足・上席。上位。

④法化・弟子。

⑤呉殷・恵果の俗弟子。「読みは「こいん」？」

⑥纂・呉殷作の「大唐神都青龍寺東塔院灌頂国師恵果阿闍梨行状」。

⑦三地・菩薩の十地のうち、第三地の発光地。

⑧大乘心・大乘教理。

⑨少國・唐から見て小国。

⑩御相弟子・不空三藏に学んだ相弟子。

⑪順曉・最澄が天台山からの帰途、越州（今の浙江省紹興市一带）の峰山道場で密教を受法した時の師。

⑫玉堂寺僧珍賀・当時、恵果和尚に師事していた密教僧？

⑬門徒・恵果の門弟。

⑭諸教・密教以外仏教思想。

⑮兩三般・二々三度。

⑯曉旦・明け方。

⑰表・天皇への上表。

⑱南山・高野山。

⑲一兩・一々二。

⑳太上皇・嵯峨上皇。

㉑中務・中霧省。

②② 餘月・一カ月。

②③ 天長の皇帝・淳和天皇。

②④ 丹生津姫命・高野山山麓の天野に鎮座する丹生都比売大神。空海が高野山上に祀った丹生明神。

②⑤ 巫祝・巫女。天野の祝(ほふり)。

②⑥ 威福・仏法、密法。

②⑦ 食國鯉命・オスクニスメラミコト。

### 【私記6】

師から弟子へ相伝え、嫡嫡相承してきた真言の法門とは、まず偉大な初祖大日如来が金剛薩埵に授け、金剛薩埵が龍猛菩薩に伝えた。龍猛菩薩以降、唐の玄宗・肅宗・代宗三代皇帝の灌頂国師で、特進の鴻臚寺長官試補の、大興善寺の三藏沙門、大廣智不空三藏に至るまで、六祖である。私の師の第七祖恵果和尚はその高弟で、私で八代である。

(長安に入りしばらくして)私が師のところに行つた日、師は「私の命はもう尽きようとしている。あなたが私のところに来るのを長く待っていた。もう来たのだから、私の進むべき道は東方(日本)に決まった」と言われた。だから師の俗弟子の呉殷は「大唐神都青龍寺東塔院灌頂国師恵果阿闍梨行状」にこう言っています。「今、日本国の仏教僧が来て密教求めている。その学びようは華瓶から華瓶に水を移すが如くで、師の教えをすぐに会得する。この僧は非凡で(菩薩の十地のうち)第三の発光地に住する菩薩である。心の内には大乘の教理を具有しているが、外見上は小国の僧の風貌をしている。云云」と。ところが(好事魔多しで)、不空三藏のもとで恵果和尚と相弟子だった内供奉十禪師・順曉の弟子で、玉堂寺の珍賀という密教僧が(恵果による空海の特別待遇への反発・不満を代表して)「日本の座主がたとい聖人であっても、恵果和尚の門弟ではない。まずはあらゆる仏教教理を学ばせるべきであるのに、どうして密教を(すぐに)受法させるのか。云云」と、二々三度妨害を申し出た。しかし、ある夜、夢のなかで珍賀は降伏し、明け方早く私のところに来て三拜し、過失を詫びた。

去る弘仁七年、嵯峨天皇に上表して紀伊国の高野山を下賜してくださるようお願いした。特に私の入定の地としたかったのである。(早速許しがあり、山上に弟子たちを派遣し、人夫・資材を集め)一々二の草庵を作り、高雄山寺の舊居を出て高野山に移った。高野山はその峰々が険しく人里から遠く離れている。(時に)私が高野山に居住していた時しきりに明

神が現われ私を擁護してくれた。いつも門弟には言っている。「私は、山水（大自然）に親しむことが性に合っていて、（政治や行政など）人との交わりには疎く、浮雲のようなのだ。歳をとって人生の終りをこの窟屋の東で待つことにした。（しかし）嵯峨上皇から勅命で呼び出しがあり、中務省に留まって供養法を修すること一ヶ月。その後は高雄山寺に戻っていたが、淳和天皇の即位に伴い小僧都に任じられた。再三固辞したのだが許されずつと公職にあった。諸事多忙を極めたが、春と秋には必ず一度高野山に往つてその実際を確認した。その高野山の裏道の側に女神が祀られていた。丹生津姫命と言う。その社（今の丹生都比売神社）の周りに十町ばかりの沢があり、その（水銀を含んだ）水に触れたり飲んだりすると身体に傷害が出るという。しかし、私をはじめめて高野山に上った日、その女神は社の巫女に託宣して「わらわは神道の身にあつて長く仏法を望んでいたが、今まさに菩薩がこの高野山に来られた。これはわらわの幸いである。わらわが昔、人間の世界に現われていた時、食国皇命（オスクニスメラミコト）が一万町の土地を支給してくれ、南は南海に、北は吉野川に、東は宇治丹生川に、西は応神山の谷に限りとした。願わくば、永久にこの土地を献じて深い信心の誠を表わしたい、云云」と言つた。現在その土地に開墾されている田は三町ばかりだが、常庄と言つのがそれである」と。

#### 【付記】高野山造営

弘仁六年（八一五）六月、高雄山寺にいた空海は嵯峨天皇に高野山の下賜を奏上する。それに対して嵯峨は、翌七月には異例の早さで紀伊国司への太政官符をもつて裁可し、空海の高野山造営の願いをかなえた。空海はまず、弘仁七年（八一六）七月から年末にかけて、實慧や泰範らの弟子を高野山と紀ノ川南岸の山麓に派遣し、現地調査をさせた。高野山と紀ノ川南岸の土地は、若き日の空海が山林修行者として幾度となく渉獵したところである。空海は弟子たちに、高野山の地形・地理や、山麓の沢の水銀のこと、丹生の一族と丹生都比売大神のことなど詳しい事情を教え、山上伽藍の予定地や資材・人夫の調達などについても具体的に指示をしたであろう。高雄山寺はあくまでも和氣氏の私寺であり、空海の意のままにはならない。別当に任せられた東大寺は前の年に離れていた。帰国から十年自らの密教を集大成するための道場、私寺開創のチャンスがきたのである。空海が住房とした境内の曼荼羅院に止宿し、そこを当面の根拠地としたであろう。ここで彼らは丹生の一族の主だった者に資材の調達と運搬、道路や水の治山治水、資金や食糧の確保、人夫の世話ほか工事道具や生活用具など一切の助力を要請し、良い答えをもらえたものと

思われる。

この天野の里のすぐ近くを、高野山と紀ノ川そして奈良や京を結ぶ旧表参道が通っている。この道をたどり紀ノ川に向い山を降りていった先、紀ノ川南岸に慈尊院という寺がある。弘仁七年（八一六）の創建というから、おそらく實慧や泰範らが紀ノ川の水運に至便なこの要衝の地に建設資材や人夫・生活必需品などを集め、山上に上るための根拠地としてここに堂宇を建立し、あわせて山上伽藍が完成しそこに空海以下弟子たちが居住できるようになるまで、宿所あるいは嚴寒期修行の道場とし、また高野山造営に關する庶事万端を司どる寺務所（政所）としたものと思われる。この時紀ノ川の渡し場にあつた「丹生官省符神社」が今は慈尊院境内に移されている。

寺名の慈尊とは慈氏菩薩すなわち弥勒菩薩のことである。空海が高野山造営に苦心苦勞していることを知つた母阿古屋が讚岐から出て来たものの女人禁制の山上に上がることかなわず、空海は月に九度高野山から下りてきて慈尊院の母をたずねた。この一帯を九度山というのはそのためである。母は空海が入定する一ヶ月前の承和二年（八三五）二月に亡くなるのだが、空海は母が弥勒菩薩になつた夢を見、弥勒尊像一体を謹刻して母の廟に祀つたという。この寺を別名女人高野と言ふ。

弘仁八年（八一七）、空海は再び實慧・泰範たちを高野山に入らせ、平坦な適地を抉び、山上の根拠地とし堂宇（一・両の草庵）を建てさせた。そして翌弘仁九年（八一八）十一月、勅許後をはじめ自ら高野山に登つた。おそらく實慧・泰範らは先に山上に上り空海の一行を迎えたであろう。この時には丹生の一族や土地の有力者あるいは治山治水に明るい山の民や資材運搬・建築土木に堪能な人夫たちも集まつていたと思われる。寢食等の準備も調つていたであろう。翌弘仁十年（八一九）の春、空海は山上を七里結界して密教による地鎮壇作法を七日間修した。今の根本大塔のところだつたという。

高野山は吉野・熊野・高野の三つの「野」に象徴される日本随一の古代宗教靈地の一角にある。「野」とは「野辺」に通じ、ヤマとサトの間にあつて死者を葬りその靈が仮泊するにふさわしい地形やサトとの距離を保つたところである。京都の化野や紫野もその例で、丹生都比売神社のある天野もふくめ、空海の高野山造営にはこの「野」に潜む古代のミステリー観念も作用していたと思われる。

敬つて十方の諸仏、両部大曼荼羅海会の衆五類の諸天、及び国中の天神地祇、並びに此の山中の地水火風空の諸鬼神等に白さく。

今、上は諸仏の恩を報じて密教を弘揚し、下は五類の天威を増して群生を拔濟せんが為に、一ら金剛乘秘密教に依つて両部大曼荼羅を建立せんと欲ふ。

所有る東西南北・四維上下七里の中の一切の悪鬼神等は、皆我が結界を出て去れ。所有る一切の善神鬼等の利益あらん者は意に随つて住せよ。〔性靈集〕

空海は先ず山上を七里結界して諸魔を排除し、そこに丹生・狩場（高野）の二明神を勧請した。清められた「野（の）」にサトの神を祀り、そこを現（うつ）の仏国土（ヤマ・山上他界）とみなすことで、サトの丹生の一族や土地の氏族たちに新しい神仏習合のグランドデザインを示して見せたのである。人々は、かつてこの山域で見たことのある無名の若き乞食僧が、いつの間にか天皇を動かし高野山に新しい神仏習合の靈域を造営する稀有のデイベロッパーとなつて現れたこと大いに沸いたであろう。高野山の造営は当然ながら長くかかった。空海は造営に着手して二十年後の承和二年（八三五）に入定する。存命中に完成を見たのは空海の構想の半ば以下ではなかったか。

高野山金剛峯寺は『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』の経題からその名をとつたと言われている。周囲を標高九〇〇mからなる内と外の八つの峰に囲まれた平坦の地に空海は七里結界した。内の八葉は「壇上伽藍」の四方四隅を囲む峯で、伝法院山・持明院山・中門前山・薬師院山・御社山・神応丘・獅子丘・勝蓮華院山。外の八峰は「奥の院」の外周に聳える峰で、今来峰・宝珠峰・鉢伏山・弁天岳・姑射山・転軸山・楊柳山・摩尼山である。

今の金剛峯寺は、第二世座主の真然が祀られている廟所の地に、文禄二年（一五九三）豊臣秀吉が母の菩提のために木食応其上人に命じて建てたもので、青巖寺・興山寺といわれていた。これを、明治二年（一八六九）に合併し、全国の末寺を代表する総本山としたのである。

当初の伽藍はおそらく薬師如来を祀る講堂（いまの金堂）と、空海の住房また持仏堂であつたという現在の御影堂（大師堂）、そして丹生・高野両明神社くらいのものであつただろうか。次に建立が企てられたのは大毘盧遮那法界体性塔と言われた二基の多宝塔、すなわち金剛界の大日如来を祀る西塔と、胎蔵界の大日如来を祀る東塔であつたらう。これで恵果か

ら授かった金胎不二の密教にもとづく道場が実現し、高野山山上に金胎両部の曼荼羅海会が顕現し、日常的に密教の行や灌頂ができるようになったと思われる。

伝えによれば、根本大塔も空海が南天の鉄塔を模して計画をしたと言われ、空海入定後五十二年を経た仁和三年（八八七）にやっと完成した。根本大塔は西塔と東塔との中間に建てられ、胎藏界大日を主尊に金剛界の四仏がその周囲に祀られ、柱には十六大菩薩が描かれていて、金胎両部の尊像が集合し二つで一つ（金胎不二）であることを表している。これこそ、恵果の金胎不二の具現ではなかったか。

#### 【付記】丹生都比売大神

高野山の山麓の天野の里に空海が以前からそこで山の民と交わり時々滞留していた丹生都比売神社があった。この社に、この土地の人々が信仰する丹生都比売大神が祀られていた。その周囲には十町の沢が流れていて、人がこれに近づくと、身体に傷をつけると言う。空海がはじめて高野山に登った日、（丹生都比売大神が）巫税（祝）に託宣して言った。「私は神道にある身ですが威福（仏法）を永く待ち望んでいました。今まさに菩薩（空海）がこの山に来てくれました。（それが何より）私の幸せです」と。

巫税（祝）とは、巫女のような神の言葉を人間に媒介する者のことであろう。この場合男で、例の犬飼のことものようにも思える。空海はこの巫税（祝）を代理人として高野山の取得と造営を丹生津姫命から許されたことになる。これを案ずるに、高野山は天野に祀られている丹生都比売大神の神域にあつて丹生の一族がこれを領していたが、この山の山に密教僧の空海が入ることを神自身が許しこれを歓迎したということであろう。神が菩薩を容認した。そればかりか、近づくると人体を傷つけるほど毒性の強い水銀の採掘や利用を許可したとの意味でもあろう。すでに神仏習合が行われていた。空海の高野山造営は、この丹生都比売大神と土地の神々に帰依していた天野の里の人々との親交なくしてはありえなかつたということである。

空海は、ヤマの熟達者であつた。ヤマに入るしきたりや礼儀作法に通じ、ヤマで鍛えた霊的なパワーにも事欠かなかつた。その上ヤマの民が見たこともない不思議な密教儀礼や聞いたこともない不思議な真言をあやつつた。水銀の精製や利用の方法やその背後にある道教にも通じていた。山の民が引きつけられるカリスマ性に満ちていた。天野のサトの丹生の一族は、氏神である丹生都比売大神もろともに空海を歓迎し帰依したのである。

丹生とは、丹が今の化学で言う硫化水銀のことで、丹砂・朱砂・辰砂とも言う。空海の時代、すでに鎮静・催眠の薬剤として用いられ、道教の要素を採り入れた古代山岳行者の間では不老不死の丹薬として重宝がられた。また古墳内部・石棺・神社仏閣の腐食防止・彩色の顔料や、天皇家や貴族の朱漆器などの原料となった。また、当時すでに合金の技術が実用化されていて、丹生すなわち水銀がメッキ剤として使われていた。その顕著な事例が、東大寺の大仏造頭にあって73万7560斤（442536kg）の塾銅に1万436両（386kg）の金と5万8620両（2169kg）の水銀が金メッキ剤として使用されたという。大量の金を供出したのは陸奥国（宮城県）の国守百済王敬福で、現在の遠田郡涌谷町の黄金山から産出されたもの。塾銅を供出したのは宇佐（大分県宇佐市）と長門（山口県美祿市）の秦氏だった。水銀の供出には、あとでふれる丹生一族を措いてほかにないかと考えるのが自然である。

その丹生一族であるが、空海の高野山開創をサポートした丹生一族は、具さには紀伊丹生氏、すなわち丹生都比売神社の天野祝（あまのはふり）の家系を言う。この紀伊丹生氏は、四世紀頃には紀伊国伊都郡の地に来ていたと言われ、先住の相伴氏から土地を譲られ、今の伊都郡かつらぎ町三谷に丹生酒殿神社を祀った。以後、紀伊丹生氏は相伴氏や土豪の紀氏と血縁の關係をもち紀伊丹生総神主家として代々続く。

高野山造営にあたって、空海が協力要請の手紙を送った大名草彦というのも、この紀伊丹生氏の当時の当主だったということが最近研究者によって明らかにされた。その手紙とは、

古人の説によると、私の先祖太遣馬宿禰は、あなたの国（紀伊国）の祖である大名草彦の分かれてあります。一度訪ねたいと久しく考えていますが、あれこれ妨げがあつてなかなか志を遂げられず、申し訳なく思っています。今、密教の教えに基づいて修禪の一院を建立したいと考えてきました。その建立の場所として、あなたの国の高野の原が最適と考えます。そのようなわけで上表文をしたため、天皇に高野の地の下賜をお願い致しましたところ、早速慈悲の心をもって裁可の太政官符を下されました。そこでまず一・二の草庵を造立するため弟子の泰範・実恵らを高野に派遣いたします。ついでには仏法の護持のために僧俗相共に高野山の開創に助力賜りたく存じます。私は来年の秋には必ず高野に参りたく考えています。

この大名草彦とは、紀伊国第五代国造の大名草比古（おおなぐさひこ）で紀伊丹生氏の祖先になる。紀氏と紀伊丹生氏の

関係は古く、丹生氏の庵田刀自（阿牟田刀自、あむたのとじ）と紀氏の豊耳（とよみみ）とが結婚して、その子孫が紀伊丹生氏の嫡流となったと言う。紀伊丹生氏は、紀氏が祀る日前宮（名草宮）のなかの草宮（紀氏の先祖が祀られているという）に、毎年丹生都比売神の神輿を渡御し（浜降り神事）、紀氏は、国造に任じられ宮中参内のために京に上った帰途、丹生酒殿神社に参詣して白犬を供えるのが恒例となった。後年紀伊丹生氏から紀氏に養子を出したり、紀伊丹生氏が犬伴氏から養子を迎えたりして、紀伊の有力氏族の間に血族関係が生まれるとともに、神事に関しても氏族間で神事の融合がみられるようになったと言う。

時に、丹生一族は水銀の鋳床の発見と採掘や精錬や冶金加工の術に長けた一族と言われ、とくに西日本地域で丹生という名前のつく土地や川や山や神社のある地方には丹生一族が展開していた。地域によって氏族名が異なり、伊勢の丹生一族は伊勢丹生氏、近江では息長丹生氏であり、丹生都比売神社に存続している丹生氏はその総称または象徴と言われる。

私見だが、丹生一族はおそらく秦氏と同系の一族ではないか。朝鮮半島の南端（伽羅・伽耶）からきて、最初はおそらく那ノ津（博多）に上陸し、やがて豊前（「秦王国」）に丹生の鋳床を見つけてそこに移住し、そこから豊後水道を横切って四国に渡った。さらに、四国を真横に（中央構造体を）横切り、淡路島を経て紀伊に上陸し、紀ノ川沿いに高野山山麓の天野に向い、そこを本拠地として吉野や宇多へ、さらに東の伊勢などに進出したと思われる。その移動ラインはほぼ中央構造線上、つまり水銀鋳脈に沿っていて、銅の採鋳と精錬の技術集団をもつ秦氏の展開と類似している。

丹生一族のルーツは定かではないが、伝説では中国の春秋時代の紀元前五〜四世紀に滅びた呉・越の民が呉の王女姉妹を戴いて南九州に渡り、姉の王女大日女姫（おおひるめのみこと）はそこにとどまって天照大神の原型となり、妹の稚日女姫（わかひるめのみこと）はミズガネ（＝水鉄・水銀）の女神として敬われ、丹生都比売神の原型となったといい、越の民は金属採集に長じていたという。これも秦氏の渡来伝説と酷似している。

さて、空海が高野山に入山する時に、二匹の犬を連れ狩人の姿をした「南山の犬飼い」に出合ったという話があり、その犬飼いが狩場明神だったという伝えもよく知られているところであるが、その狩場明神とは、実際は、空海と同じ時代の紀伊丹生氏当主の丹生家信という人で、家信の死後、空海が狩場明神として、今の伊都郡かつらぎ町宮本に祀った（丹生

狩場神社」という説がある。丹生家信は、宣化天皇（四六七〜五三九）を祖とする丹治氏から、延暦十二年（七九三）に丹生氏に養子として入り、丹生総神主家を継いだことが伝えられているが、丹治氏と言えば秩父の銅（和銅開珎、七〇八）で知られ、本拠地を河内国丹比郡とし、中央の伴氏や藤原氏や紀伊の紀氏にも根を張っていた。今の秩父地方を開墾した「武信」という人は、この家信の子だという説もある。

狩場とは、山の民が狩獵をする場所などと思われがちだが、鉾山とくに銅山のことを言う。山の民（例えばサンカなど）が使う隠語だと言われている。狩場明神には従来この地一帯の土豪の首領だという説があった。興味深いのは、その土豪とは坂上（さかのうえ）氏、首領とは犬甘（いぬかいの）蔵吉人のことで、犬甘蔵吉人を犬飼蔵人と読み、坂上氏の先祖である阿智使主（あちのおみ）のあとに蔵人の名が見えるところから、坂上氏の人だとする推定である。『紀伊統風土記』には

犬甘蔵吉は阿智使主の後蔵人と見ゆえたる人にて、応神天皇廿年阿智使主と共に帰化せしむを同廿二年の事  
当社へ寄せるたまへるなるへし。

とある。坂上氏といえば、桓武・平城・嵯峨の三天皇政権の軍人トップとして蝦夷を征伐し薬子の乱を鎮圧した征夷大將軍・坂上田村麻呂を思い出すが、坂上氏は紀伊国伊都郡から紀ノ川北方の今の橋本市一帯を本拠とし、丹生都比売神社には氏子長者として財政や神馬の管理で信助を惜しまなかったと言われている。ちなみに、空海と坂上田村麻呂は同じく嵯峨天皇のブレン（蔵人）であった。その頃リーダー（蔵人頭）が藤原冬嗣で、空海とは奈良の大学寮で同級生だった。

さて、紀伊丹生氏すなわち天野祝氏は丹生都比売命の祭祀を司る神職であって、実際に水銀の鉢床を探して採掘したり、水銀を精錬して鍍金剤にしたり、薬品加工して丹薬にしたり、朱色の顔料にしたりする技術をもたなかったという。それを天野祝氏にもたらししたのはおそらく秦氏であろう。死体に朱（丹生）を施して再生を願い死霊（怨霊）を封じる古代からの呪術的な習俗もおそらく秦氏がもたらし、それを天野祝氏の神職が司祭したことも考えられる。丹生一族と秦氏は、表裏一体の関係にあったのではないだろうか。やがて、水銀の鉢床が次第に掘り尽くされ、水銀の需要も減少するにつれ

て、秦氏は技術力・経済力を背景にさまざまな産業を興し、朝廷の氏族を支える有力なサポーターとなり、山背国太秦に本拠を構えるようになる。

南海電鉄「橋本」駅前からタクシーを走らせること約三十分、紀ノ川を渡り九度山の慈尊院の近くを通り、梅や柿の木が斜面いっぱい枝を広げる山里の道をたどるとやがて道が下りになり、やや行くと急に人里がひらけてくる。丹生都比売神社はその人里（上天野）にある。朱塗りの鳥居をくぐる。目の前にあざやかな朱塗りの太鼓橋、その奥に大楼門が見え隠れしている。朱に塗られた橋を渡って神域に入る。まさに丹生の世界である。

昔は、太鼓橋がかかる池の西側に大庵室（おおあぜち、祭祀の際、学侶方の僧侶の宿所）と長床（祭祀の際、行人方の僧侶の宿所）が、池の中島には「切経蔵（仁和寺から贈られた一切経を安置）」と「蔵（行人方の僧侶が祭祀の時に使う祭具を保管）」があり、東側には不動堂・山王堂・多宝塔・御影堂など寺院様式の建物が建ち並び、祭祀の際には高野山の真言僧も出向列座して神祇の法を修したことが偲ばれる。神域に入ると空にその軒先をいっぱい広げて重文の大楼門が建っている。朱塗りのみごとな門である。その楼門のところから祭神を拝むのである。祭神は四明神で、向って右から、第一殿の丹生都比売大神、第二殿の狩場明神（高野御子（たかのみこ）大神）、第三殿の氣比明神（大食都比売（おおげつひめ）大神）、第四殿の厳島明神（市杵嶋比売（いちきしまひめ）大神）である。

丹生都比売大神は、今から一七〇〇年前の神功皇后の頃に、この山里に祀られたと伝えられる（『日本書紀』）水銀の神で、鉾山に関与して地下資源を司るのである。狩場明神は、鉾脈を求めて山中を涉獵する神でヤマの案内や導きの神であり、高野山一帯の地主神でもある。空海が高野山に入る際空海に奉仕した狩場明神を祖先ともどもここに祀ったという。

氣比明神と厳島明神は、北条政子が今から約八〇〇年前に寄進した。氣比明神は元寇の役にかかわる軍神。厳島明神は、音楽芸能・航海安全の神で、この二神に平和安穩・鎮護国家を祈るのである。

空海は高野山造営の以前からこの丹生都比売神社にかかわりをもち、滞留の際は住坊曼荼羅院（庵）に止宿したと言われている。曼荼羅院（庵）は、現在駐車場になっている広場のあたり、すなわち、大庵室があったところの近くにあってらしい。この曼荼羅院（庵）が高野山の造営の際山上に移されて山王院と言われ、のち金剛峯寺となって現在に至っている。

【原文7】

吾自去天長九年十一月十二日。深厭穀味專好坐禪。皆是令法久住勝計。并爲末世後生弟子門徒等之也。方今諸弟子等諦聽諦聽。吾生期今不幾。仁等好住慎守教法。吾永歸山。吾擬入滅者今年三月二十一日寅剋。諸弟子等莫爲悲泣。吾即滅而歸信兩部三寶。自然代吾被眷顧。吾生年六十二臘四十一。吾初思及于一百歲住世奉護教法。然而特諸弟子等念永擬即世也。但弘仁帝皇給以東寺。不勝歡喜。成祕密道場。努力努力勿令人雜住。非此狹心護眞謀也。雖圓妙法非五千分。雖廣東寺非異類地。以何言之。去弘仁十四年五月十九日以東寺永給預於少僧勅使藤原良房公卿也勅書在別。即爲眞言密教庭既畢。師師相傳爲道場者也。豈可非門徒者猥雜哉。

【書き下し7】

吾れ、去んじ天長九年十一月十二日より、深く穀味を厭いて専ら坐禪を好む。皆是れ令法久住の勝計、並びに末世後生の弟子・門徒等の爲なり。方に今諸々の弟子等、諦らかに聽け、諦らかに聽け。吾が生期今幾くならず。仁等、好く住し慎しんで教法を守れ。吾れ永く山に歸らん。吾が入滅に擬するは、今年三月二十一日寅の剋なり。諸々の弟子等、爲に悲泣すること莫れ。吾れ即ち滅すれば兩部の三寶に歸信せよ。自然に吾に代り眷顧を被らん。吾が生年六十二、法臘四十一なり。吾れ初めに思いき、一百歳に及んで世に住し教法を護り奉らん。と。然れども諸弟子等を持んで忿に永く即世に擬するなり。但だ弘仁の帝皇、給うるに東寺を以てす。不勝の歡喜にして、祕密の道場と成す。努力努力、他人を雜住せしめること勿れ。此れ狹き心に非ず眞を護る謀なり。圓なる妙法と雖も五千分に非ず。廣き東寺と雖も異類の地に非ず。何を以てかこれを言う。去んじ弘仁十四年五月十九日、東寺を以て永く少僧に給い預けらる。勅使は藤原良房公卿なり。勅書は別に在り。即ち眞言密教の庭爲ること既に畢んぬ。師師相傳して道場と爲す者なり。豈に非門徒者を猥雜するべきや。

【註記7】

- ① 坐禪…三摩地法。念誦法。
- ② 令法久住…仏法が永遠に人々の心に存続すること。
- ③ 勝計…すぐれた方法・計画。
- ④ 生期…生涯。
- ⑤ 仁…有徳、仁者。ここは弟子のことで「みなさん、君たち」の意。
- ⑥ 山…高野山。
- ⑦ 兩部…金剛界・胎藏界。
- ⑧ 歸信…帰依して信ずる、の意。
- ⑨ 眷顧…
- ⑩ 即世…世を去ること。死去。寂滅。
- ⑪ 弘仁の帝皇…嵯峨天皇。
- ⑫ 異類…顕教。
- ⑬ 猥雑…下品なものも入り乱れていること、の意。

【私訳7】

私は、去る天長九年十一月十二日から、穀類を遠ざけて専心三摩地法を修している。これは仏法が永久にこの世に存続するためのすぐれた計画で、併せて末世に生きる弟子や門徒たちのためでもある。まさに今、弟子たちよ、よく聴け。よく聴け。私の生涯はもういくばくもない。君たちは好ましい心構えで住し、身を慎んで密法を守ってくれ。私は永遠に高野山に帰る。私が入滅すると思われるのは、今年の三月二十一日、寅の剋である。弟子たちよ、悲しんで泣くことはない。私が入滅したら金胎兩部の三寶に帰依し信ぜよ。（そうすれば三寶は）自然に私に代り（君たちを）目にかけてくれるだろう。私の生涯は六十二年、仏教僧として四十一年である。

私は最初にこう思った。百年もこの世に生きて仏法を護持しよう、と。しかし今は、弟子たちに後事を託してにわかに永く入滅しようとしている。ただ（今思うことは）嵯峨天皇が私に東寺を下賜され、これ以上の喜びはなく、真言密教の道

場とさせていただいた。(だから)努めよ、努めよ。(東寺に)他(宗の)人を一緒に住まわせてはならない。これは狭い見で言うのではなく真の仏法(真言密教)を護るための方便である。(『法華経』の)圓なる妙法といつてもそれを理解できない五千もの心が驕った人(天台宗)がいるくらいだから。広い東寺とは言え顕教の人の土地ではない。何故なら、去る弘仁十四年五月十九日、私に東寺が永久に下賜された。その時の勅使は公卿の藤原良房公だった。勅書は別にある。即ち東寺がすでに真言密教の道場となったのである。これからは師師相傳して真言密教の道場たるものになっていくべきである。どうして真言の門弟でない者まで一緒にするべきか。

#### 【付記】留身入定

天長八年(八三二)五月、空海は悪瘡つまりタチの悪い皮膚の炎症を発症した。癩だともいう。癩は、黄色ブドウ球菌が毛包(毛穴の奥で毛根を包んでいるところ)や脂腺(皮脂を通す分泌線)に感染して増殖し、隣同士の複数の毛包や毛包のまわりに同時に炎症を起し、それが周囲の皮膚組織にも広がり黄色ブドウ球菌がつくるいろいろな毒素によって膿瘍ができる皮膚疾患である。今では抗生物質などで治療するが、空海の時代はなすすべもなかったのだろう。皮膚の小さい傷や皮膚が湿った状態が長く続くと発症するらしく、高野山の草堂には湿気が多かったことを想像させる。

空海は、天長九年(八三三)十一月十二日から五穀を口にするのをやめ三摩地法「三昧」に入ると弟子たちに言ってから、ずっと弥勒菩薩の尊像の前に趺坐し「慈氏念誦法」に明け暮れる日々であったかと思われる。時には金剛界曼荼羅を前にし、三昧耶会・微細会・羯磨会・降三世会・降三世三昧耶会に並ぶ「賢劫十六尊」のなかの慈氏菩薩に心を集中し、時に胎藏曼荼羅の前に、「中台八葉院」の東北の蓮弁に描かれる弥勒菩薩を心に観じ、「オンバイタレーヤソワカ」を何万遍も誦じていたにちがいない。弥勒菩薩の心象は、空海が二十四才の時著わした仏道選択の宣言の書『三教指帰』にすでに見えている。そのなかで空海は、自らを仮託した仮名乞児の乞食僧の姿を弥勒の兜率天にいく旅姿だと言っている。

弥勒(慈氏、マイトレーヤ)は、兜率天(色欲・食欲に執着する欲界のうちの六欲天の第四、内院・外院があり、内院は将来仏となるべき菩薩のいるところ)の内院にあつて、欲の執着から離れられない衆生に法を説く教化活動をしている菩薩で、釈尊亡きあと、釈尊の説法救済に漏れた者を救うため説法することを釈尊から認められていて、釈尊入滅後五十六億七千万年のうちに人間の世界に下りてくるといふ。

実はこの弥勒菩薩への信仰が、空海の若き日に奈良法相宗の寺（法隆寺や興福寺）で盛んにあった。未来世救済の仏としての信仰のほかに、法相宗では第一祖を弥勒とするからであった。わが国での弥勒信仰は観音信仰とともに仏教伝来とほぼ同時で、すでに飛鳥時代からあった。八世紀になって法隆寺の五重塔内や興福寺北円堂内に弥勒浄土や弥勒像が置かれた。今北円堂に法相学の大成者でインド大乘唯識学論師の無著・世親兄弟の尊像が祀られているのもそうした背景によるものであろう。

空海は当然、奈良の都に上京してまもなく、大安寺や元興寺や興福寺や東大寺でこの事情を知ったであろう。勤操などから、大安寺が長安の西明寺を模したものであり、その西明寺はインドの祇園精舎に倣ったものであり、その祇園精舎は弥勒のおわす兜率天の内院をこの世に再現したものだということも教えられていたに相違ない。その大安寺と西明寺で空海は学んだ。弥勒への意識がこの頃から芽生えていたとしてもおかしくはない。奈良で仏教を学んだ空海にとって弥勒への想いは自然な憧憬であった。それが密教の観法によって、自己の内なるところで弥勒と一体化する経験を積み、よりリアルな自覚になっていったのではないか。

空海は有限の時間としての六十二年の生涯を了える（滅）が、以後は兜率天において弥勒慈尊とともに無限を生きたい（不滅）と思ったのである。瑜伽観法の熟達者空海は、おそらく弥勒と一体の三摩地のまま生身を終えたのである。密法でこれを「不滅の滅」という。『続日本後紀』には、空海の死後、東寺の長者になった實慧が長安の青竜寺に送った手紙に、空海を荼毘に付したらしいことが書かれているという。

一方、空海の死後百三十年を経た康保五年（九六八）に、仁海によって書かれた『金剛峰寺建立修行縁起』には、空海の顔色等は死後四十九日経っても変わらず髪やひげも伸びていたとあり、『今昔物語』には、東寺の長者である観賢が御廟を開け、空海の伸びきった髪を剃り、着衣や数珠のほころびを直してまた封じたことが記されている。

このことが「空海は死んだのではなくこの世にまた身を留め三摩地に入ったままである」（「留身入定」という信仰に発展していった。最初は高野山内の弟子たちの間で起きたものであろう。時間の経過とともに師亡き後の山は人法ともに振るわず荒廃することもある。「空海は死んだのではない、いつもそこにいる」という戒めは、師の「令法久住」の願いを常に意識し自覚しつづける方便でもあったろう。さらにそれは、空海を信じて支えてきた土地の人々にも伝わり、朝廷の貴族

や東大寺をはじめとする南都の僧たちにも伝わったであろう。やがて、高野聖が日本全国にそれを広めるほどになった。

ありがたや 高野の山の岩かげに 大師はいまも おわしますなる

「留身入定」信仰、つまりは大師信仰をまことに言い当てて妙の和讃である。

それにしても、空海は皮膚疾患の煩わしさに悩みながら最後まで忙しかった。悪瘡を病む前年の天長七年（八三〇）、勅命により『秘密曼荼羅十住心論』十巻とその略本『秘藏宝鑰』三巻を著わした。翌天長八年（八三二）六月、病を理由に大僧都の位の返上を申し出るが、容れられず留任となった。同九月、最澄の弟子円澄たち十数名から密教の付法を請われ受け入れる。天長九年（八三三）正月、宮中の「金光明最勝会」を修し国家鎮護を祈る。つづいて紫宸殿において論義を行う。同八月、高野山ではじめての「万燈万華会」を行い、その願文に自らの人生の万感を記す。

恭んで聞く、黒暗は生死の源、遍明は円寂の本なり。其の元始を原ぬれば、各々因縁あり。日燈空に繋ぐれば、唯一天に暗きを除き、月鏡漢に懸くれば、誰か三千の明を作さん。大日遍く法界を照し、智鏡高く靈台に鑒みるが如きに至っては、内外の障悉く除き、自他の光普く挙ぐ。彼の光を取らんと欲はば、何ぞ仰止せざらん。是に於て空海諸の金剛子等と与に、金剛峯寺に於て聊か万燈万華の会を設け、両部の曼荼羅、四種の智印に奉献す。期するところは毎年一度、斯の事を設け奉つて四恩に答へ奉らん。虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願も尽きん。爾れば乃ち、金峯高く聳えて、安明の培塿を下し睨、玉毫光を放つて、忽ちに梵釈の赫日を滅さん。濫字の一炎、乍ちに法界を飄て病を除き、質多に万華、笑を含んで諸尊眼を開かん。仰ぎ願はくば、斯の光業に藉て、自他を拔済せん。無明の他忽ちに白明に帰り、本覚の自乍ちに他身を奪はん。無尽の莊嚴、大日の慧光を放ち、利塵の智印、朗月の定照を発かん。六大の遍ずるところ、五智の含む所、虚を排い地に沈み水を流し林に遊ぶ、摠べて是れ我が四恩なり。同じく共に一覚に入らん。〔性靈集〕

天長九年十一月、高野山寺を實慧・真濟らに任せ高野山に籠る。穀物を断つて三昧の日々を送る。

天長十年（八三三）、高野山金剛峯寺を真然に託し、實慧に後見させる。

承和元年（八三四）二月、東大寺真言院において『法華経』と『般若心経秘鍵』を講じる。『法華経』の講釈は生涯最後の

講釈にもかかわらず、詳細な講釈書をつくったという。『般若心経秘鍵』は、空海最後の著作であった。

同三月、勅により六人の高弟とともに比叡山に上り、西塔院の落慶法要に列し咒願師の役をつとめる。

承和二年（八三五）正月八日より七日間、空海の願い出によって、毎年年初に行われてきた「金光明最勝会」に代って

「後七日御修法」がはじめて宮中で行われた。正月から水分も断っていたといわれている。

同正月二十二日、真言宗年分度者三名を上奏、翌日認められる。

同二月三十日、金剛峯寺が定額寺として認められる。

同三月十五日、弟子たちに遺告を与える。

同三月二十一日寅の刻、入定。

同三月二十五日、仁明天皇は勅使を遣って喪料を供え、淳和上皇は弔書を送る。

同十月、嵯峨上皇が挽歌を贈る。

空海は若い頃から心に観じていた兜率天の弥勒菩薩のもとに参じた。この「御遺告」の第十七に、

吾れ閉眼の後、必ず方に兜率他天に往生し、彌勒慈尊の御前に侍るべし。五十八億餘の後、必ず慈尊と御共に

下生し、祇候して吾が先跡を問うべし。

とあるが、空海の兜率天往生（弥勒信仰）は、二十四才で書いた『三教指帰』の「仮名乞児論」にすでに見えている。

所以に慈悲の聖帝終りを示せし日、丁寧ふしよに補処ちよくんの儲君・旧徳の曼殊等に顧命こめいして、印璽いんじを慈尊に授け、撫民ぶみんを

撰臣に教う。是を以て、大臣の文殊・迦葉等芳檄を諸州わかに班わち、即位を衆庶しゅうじよに告ぐ。是の故に、余、忽ちしんに檄旨

を承わり、馬に秣まぐさかい車に脂さし、装束して道を取り、陰陽を論せずして、都史の京に向かう。

「印璽を慈尊に授け」とは、釈尊入滅の時、自分の後継者は弥勒慈尊だという印璽を与えた、という意味。また「都史の京」は、「都史」が「都史多」ṣaḍā（天）の「都史」で兜率天のこと。仮名乞見すなわち山林の乞食行者（沙弥）の姿は、兜率天へ急ぐ旅姿という意味。

一、以實惠大德吾滅度之後可爲諸弟子依師長者緣起 第二

實惠大德を以て、吾れ滅度の後、諸々の弟子の依師・長者と爲すべき緣起 第二

【原文】

夫以吾道興然專此・大德言力也。因茲所示告也。以眞言爲本宗以顯教爲邊教。他有眼青自存融通。人師國寶本豈益此國德哉。仍大經藏事一向預此大德。但若實惠大德不幸後者以眞雅法師處分封納開合。依之未知情弟子等勿令封閉。愚情師師長短深必語他家歟。可慎可慎。亦菩提實數珠是大唐帝皇給勅矣。即恩勅曰。仁以此爲朕代莫永忘。朕初謂公留將師。而今延還東惟道理也。欲待後紀朕年既越半也。願一期之後必逢佛會者。加以賞賜算算。以先日誤注大師惠果之所給也。但金剛子是大師阿闍梨耶所給。亦諸道具大師阿闍梨耶付屬也。豈可輕哉。

【書き下し】

夫れ以るに、吾が道の興然こうぜんたるは専ら此の大徳の言力なり。茲に因つて示し告ぐる所なり。眞言を以て本宗と爲し、顯教を以て邊教と爲す。他に眼青がんせい有つて自存融通。人師國寶の本、豈に此の國徳を益することあらんや。仍つて大經藏の事、一向に此の大徳に預く。但だ若し實惠大徳不幸の後は、眞雅法師を以て處分せしめ封納し開合せよ。これに依つて、未だ

情を知らざる弟子等に封閉せしめること勿れ。愚情にして師師の長短深淺、必ず他家に語ること、慎しむべし、慎しむべし。亦た菩提實の數珠、是れ大唐の帝皇の給勅なり。即ち恩勅に曰わく、「仁、此れを以て朕の代りと爲し、永く忘ること勿れ。朕初めに謂えり、公を留めて將に師とせんと。今、延べて東に還らんとす、惟れ道理なり。後紀を待たんと欲せば、朕の年既に半ばを越えたり。願わくば、一期いちごの後、必ず佛會に逢わんことを」と。加しかのみならず以、賞賜算算。以つて先日誤つて大師惠果の給わる所と注するなり。但だ金剛子は是れ大師阿闍梨耶の給わる所なり。亦た諸道具も大師阿闍梨耶の付屬ふしよぐなり。豈に輕んずべけんや。

【註記】

- ①興然…興隆している様、勃興する様。
- ②言力…信力、の誤記。
- ③本宗…国の根幹となる法門。
- ④邊教…偏つた教え、国の根幹にならない法門。
- ⑤眼青…慈悲。
- ⑥自存融通…自在に融通す、の誤記。
- ⑦國德…大德、の誤記。
- ⑧深深…深淺、の誤記。
- ⑨金剛子…金剛樹の實の數珠。
- ⑩付屬…師僧が弟子に付託するもの。

【私訳】

思うに、わが真言宗の盛んなのはひとえにこの實惠大德の信義的力量による。その故にここに示告するのである。大德は、真言宗を国の根幹の法門とし、顯教を国の本にならない法門とする。他人への慈悲の眼を持つ人があつて顯教と密教とが

自在に融通しているが、指導者や国の宝の根本にあるものも、この大徳を益することがあろうか。よって大經藏に関することは一切、この大徳にまかせる。ただもし大徳に万一のことがあった後は、眞雅法師に処理を任せ、大經藏を閉めたり開けたりするがよい。それ故、まだこの事情を知らない弟子たちに大經藏を閉めたり開けたりさせてはならない。愚かにも師僧の長所短所、知恵の深い浅いを他宗の者に語ることは、大いに慎しむべし。また、菩提樹の実の数珠は、唐の皇帝から賜わったものである。皇帝が恩勅して言うに、「あなたはこれを私の代りと思ひ、永く忘れないで欲しい。私ははじめに会った時に言ったものである。あなたを唐に留めて師にしたい、と。なのに今、あなたははるか東に帰ろうとしている。そかしこれ道理である。のちの機会を待とうと思へば、私の年令はもう人生の半ばを過ぎている。願わくば生涯を終えたあと、必ず仏のおられる処で会いたいものだ」と。そればかりでなく、賞賜の品々をあれこれといたただいたので、先日は誤つて恵果和尚からいただいた品と記録してしまつた。ただ、菩提樹の実の数珠は恵果阿闍梨からいただいたものである。さらに諸々の法具も恵果和尚から負託されたものである。めつたに輕んじてはならない。

## 一、以弘福寺可屬眞雅法師緣起 第三

弘福寺を以て眞雅法師に屬すべき緣起 第三

### 【原文】

右寺是飛鳥淨三原宮御宇天武天皇御願也。而天長聖主垂勅永常加東寺可修治之由畢也。伏惟聖恩是依少僧通詣高野所給宿處而已。依之少僧永可師師相傳修治者也。但眞雅法師一期之後者諸弟子等之中在前出身者可掌東寺。不可求年蔭次第。亦門徒之間以一成立可爲長者。爲長者者可加掌弘福寺。稱佛陀宮。非爲己宿所嚴佛修治爲宗計也。

### 【書き下し】

右の寺は是れ飛鳥淨三原宮あすかきよみはらのみやの御宇ぎょう、天武天皇の御願なり。而るに天長の聖主、勅を垂れ永く常に東寺に加えて修治すべきの由畢んぬ。伏して惟るに、聖恩是れ少僧が高野に通い詣るに依つて宿處に給う所のみ。これに依つて少僧、永く師師

相傳して修治すべきものなり。但だ眞雅法師一期のあとは、諸弟子等の中に前に在つて出身する者、東寺を掌るべし。年  
藪の次第を求めらるべからず。亦た門徒の間に一に成立するを以て長者と爲すべし。長者たる者は、加えて弘福寺を掌るべ  
し。佛陀宮と稱す。己の宿所と爲すに非ず、佛の修治を嚴にして宗計を爲すなり。

【註記】

- ①弘福寺・前身は飛鳥四大寺の一つ川原寺。天武天皇勅願の寺。のち、淳和天皇から空海に下賜されて眞言宗となる。
- ②飛鳥淨三原宮・飛鳥淨御原宮。天武・持統の二代の天皇の宮廷。
- ③御宇・御代・御世。
- ④天長聖主・淳和天皇。
- ⑤佛陀宮・仏陀の宮殿。
- ⑥宗計・眞言宗の方針。

【私記】

右の寺は、飛鳥淨御原宮の御代、天武天皇の勅願によつて創建された寺である。然るに淳和天皇は、勅によつて東寺長者  
が常に永く管理すべきことを命じた。伏して考ふるに、聖恩によつて私が高野山に往復する際の宿として給われたにすぎ  
なかつたのだが、それ故私は永く師師相伝してこれを管理しなければならぬ。ただし眞雅法師が万一のあとは、弟子た  
ちのうちで先に密法を成就した者が東寺を担当しなさい。年令や法藪を問題にしてはいけぬ。また門弟のなかで一番先  
に密法を成就した者を長者としなさい。長者たる者が弘福寺も担当しなさい。弘福寺は仏陀宮とも言う。だから自分の宿  
所とするばかりではなく、仏の管理を嚴しくして眞言宗の方法でやりなさい。

一、以珍皇寺 宇富寺 可修治後生弟子門徒之中縁起 第四

珍皇寺を以て後生の弟子・門徒の中にて修治すべき縁起 第四

【原文】

右寺建立大師是吾祖師故慶俊僧都也。依有諸門徒相共付屬加修治來者也。然則以能修治之人任寺司可令住持。莫用不能者。

【書き下し】

右の寺、建立の大師は是れ吾が祖師、故慶俊僧都きようしゆんなり。諸々の門徒相共に付屬すること有るによつて、修治を加え來たるものなり。然れば則ち、能く修治の人を以て寺の司に任じ住持せしむべし。不能の者を用いる莫れ。

【註記】

①珍皇寺 字古當寺・古名を愛宕寺（おたぎでら）。現在の六道珍皇寺。

②慶俊僧都・大安寺の学僧であるとともに山林における雑密の修行者。道慈の弟子。天応元年（七八一）、和氣清麻呂と協力して京都愛宕山（朝日峰）の愛宕社を中興し、同時に白雲寺を創建し愛宕大権現と称された。

今の六道珍皇寺の略縁起には、延暦年間、大安寺の慶俊僧都の開基とあり、謡曲「熊野（ゆや）」にあるように、平安京の三大野辺送りの墓地（東の鳥辺野、西の化野、北の蓮台野）の一つ、鳥辺野への入口（六道の辻）にあると言う。慶俊は空海より時代が前で面識はなかつた。三論・法相・華嚴の教学や山林の密法にすぐれていたという。

【私訳】

右の寺は、私の祖師である大安寺の慶俊僧都の創建である。真言の門弟たちが互いに付託し合つて管理してきた。それ故、よく管理できるものを主管に任命し住持にすべきである。能力のないものを充ててはならない。

一、可號東寺教王護國之寺縁起 第五

東寺を教王護國の寺と號すべき縁起 第五

【原文】

夫以大唐惠果大師奉勅青龍寺師師相傳。元名大官道場。然而大興善寺大阿闍梨耶被勅爲祕蜜之場。改號青龍寺。方今准彼以東寺可號教王護國寺。額是既奉勅而已。宜可奏此由。亦吾漢號遍照金剛。宜知行。

【書き下し】

夫れ以れば、大唐の惠果大師、勅を奉じて青龍寺を師師相傳す。元の名は大官道場なり。然れども大興善寺の大阿闍梨耶勅を被りて祕蜜の場と爲し、改めて青龍寺と號す。方に今、彼に准じ東寺を以て教王護國寺と號すべし。額は是れ既に奉勅に奉ずるのみ。宜しく此の由を奏すべし。亦た吾が漢號は遍照金剛なり。宜しく知行すべし。

【註記】

- ①大興善寺大阿闍梨耶…不空三藏。
- ②祕蜜の場…密教道場。
- ③教王護國寺…大日如來の法力で国を守る寺、の意。

【私訳】

思うに、私の師の惠果和尚は勅命によつて青龍寺を嫡々相承した。青龍寺の元の名は大官道場だった。しかし大興善寺の不空三藏が勅命によつて密教道場とし青龍寺と改めた。まさに今、それと同じく、東寺を教王護國寺と改号すべきである。勅額はすでに下賜されている。(改号を)よろしく奏上して欲しい。次いでだが、私の中国号は遍照金剛である。これもよろしく心得ておいて欲しい。

【付記】 国家鎮護の寺、東寺(教王護國寺)

平安京の造営にあたり、延暦十五年(七九六)、桓武天皇は朱雀大路の南端、すなわち都城の玄関口である羅城門の左右に西寺・東寺の二つの官寺を建立し、国家鎮護の寺とするよう命じた。西寺は都城の右京(西側)と西国を、東寺は左京(東側)と東国を護るという意図である。

桓武は、平安京の遷都（七九四）から大同元年（八〇六）三月に薨去するまでの十二年、南都の仏教勢力に対抗するため天台の最澄を庇護したのだが、この新しい国家鎮護の寺を最澄に託さなかった。しかも、この時期の桓武にかぎって南都七官大寺から住持を迎えることはあり得ない。一体、創建の頃の東寺は国家鎮護の寺と言いながらどんな寺であったのか。実際は外国からの使節や賓客を宿泊させたり接待をするための迎賓館（鴻臚寺）だったのだろうか。

東寺の伽藍様式はおそらく奈良の官大寺と変りなく、薬師如来をご本尊とする金堂や僧たちが経論を修学論議する講堂を中心に、南大門・中門・回廊・食堂などが建ち並ぶものであっただろう。しかし、この新しい国家鎮護の寺は造営に手間取り空海が入る頃も未完成で、大伽藍には必須の五重塔もなかった。完成まで八十七年かかったという。結局のところ、新都にふさわしい国家鎮護の寺になるには二十年という時間と空海という異才と密教という新仏教を待つほかなかった。

ともかくも、弘仁十四年（八二三）の正月、桓武の遺業を継ぐかのように、嵯峨天皇がこの東寺を空海に託し密教による国家鎮護の法城とするよう勅命した。嵯峨はほどなく春四月に退位して異母帝の淳和にあとをゆずる。空海は、この寺を「金光明四天王教主護国寺秘密伝法院」（教主護国寺）と名づけ、早速十月に真言密教を学ぶ者の経・律・論の三学を規定した『真言所學經律論目錄』（『三学録』）を朝廷に提出し、将来の密教を担うべき僧五十名を東寺に住まわせて密教を修学させた。

この時期、空海はまさに多忙だった。高野山の造営に辛苦するなか、十月に宮中の皇后院において息災法を修し、十二月には清涼殿で大通方広法を行い、国家の中枢における密教流布が本格化している。さらに、翌天長元年（八二四）二月には神泉苑で請雨の祈禱に臨んで西寺の主守敏を下し、三月には小僧都に任ぜられて僧綱所の一員となり、六月には正式に東寺の造営別当に任ぜられた。また明るる年の天長二年（八二五）には東寺講堂の建立に着手し、『金剛頂經』や『仁王經』に基づく「護国マンダラ」（羯磨曼荼羅）の建立に奔走した。

そうこうするうち、空海は天長八年（八三一）に病（瘡）を得、翌年には高雄山寺の経営を實慧・真済にまかせて高野山に引きこもり、翌々年の天長十年（八三三）には高野山を真然らに委ね、静かな三摩地行の日々になっていた。東寺講堂は承和六年（八三九）に落成したが、それを見届けることなく空海はその四年前（承和二年（八三五））に入定している。空海が東寺の講堂建設に直接かかわれたのはおそらくは企画立案の段階で、発願の天長二年（八二五）から、東寺の東に日本初の庶民の子弟のための私立学校綜藝種智院を創建し、「綜藝種智院式并序」を著す天長五年（八二八）まで、ある

いは高野山寺を弟子たちに託し高野山に隠棲する天長九年（八三二）までの三年〜五年くらいではなかったか。その後は、高野山を出て宮中に出仕する際に東寺に止宿し指揮をとったかもしれないが、空海に残された時間はあまりなかった。

だがその講堂は、日本の都平安京に出現したはじめての空海密教様式による国家鎮護の殿堂にちがいはなかった。完成した講堂のなかに入ったとたん朝廷の貴族や南都の僧らは皆、一様に驚嘆の声をあげたにちがいない。講堂に空海が仕掛けたのは、須弥壇の上に金剛界「五仏」とそれに対応する「五菩薩」「五大明王」、及び「四天王」と「梵天」「帝釈天」の二十一の彫像が立ち並ぶ「護国立体マンダラ」（羯磨曼荼羅）であった。金剛界「五仏」つまり「五智如来」（金剛界大日・阿闍・宝生・無量寿・不空成就、「自性輪身」群）を壇上中央に置き、その右側には「五仏」に対応する「五菩薩」（金剛波羅蜜多・金剛薩埵・金剛宝・金剛法・金剛業の「正法輪身」群）、左側には「五大明王」（不動・金剛夜叉・降三世・軍荼利・大威徳の「教令輪身」群）を並べ、さらに四方の端には「四天王」（持国天・増長天・広目天・多聞天）、左右の辺中ほどには「梵天」「帝釈天」を配置したのである。まさに、曼荼羅の仏たちがこの世に姿を現しこの国を守護するイメージをビジュアル化して見せたのだ。『金剛頂経』や『仁王経』の経説をベースに空海がオリジナルに護国構想したのである。この講堂のほか五重塔にも空海のオリジナルな構想がある。塔の一層部分には、芯柱を金剛界大日にみため、須弥壇の上、四角の芯柱の四面（四方）に阿闍・宝生・無量寿・不空成就の「四仏」、その間に「八供養菩薩」の尊像が配置されている。これも奈良の官大寺と同じ五重塔が密教化されている。講堂・五重塔にくらべ、本尊薬師如来と日光・月光の両脇侍および十二神将の像を祀る金堂は、空海もそのままにしたのか南都の官大寺と同じである。東寺にはこのほか、空海の住房があった西院に大師堂（御影堂）、その南面に本坊をはさんで「後七日御修法」が行われる灌頂院がある。普段一般には非公開である。

天長三年（八二六）、空海は密教様式の五重塔の建造に着手する。南都の官大寺にはいくつも立派な五重塔が建ち並んでいるが、一層部分の四角の芯柱を本尊（金剛界大日如来）にみため、それを中心に柱の四面を背に金剛界の「四仏」が四方を向いて坐る配置は、この東寺の五重塔にしてはじめてであった。塔自体が大日如来（金剛界）、つまり「法界体性塔」である。この五重塔の用材を空海は伏見の稲荷山から調達したという。

平安初期、伏見の稲荷山には朝鮮半島から渡来した秦氏の祖霊・山神・穀霊の稲荷神の社・祠が祀られていた。和銅四年（七一）二月初午の日に、秦氏の遠祖である秦公伊侶具（はたのきみのいろく）がこの稲荷山（伊奈利山）の三ヶ峯に

三柱の神を祀ったのである。秦氏は、山背国葛野郡（今の京都市右京区太秦）や同じく紀伊郡（今の京都市伏見区深草）や河内国讚良郡（今の寝屋川市太秦）などの土地に土着し、農業・灌漑・土木・養蚕・醸造・金属化学などの技術によって栄えた。平安京の太秦を本拠地とし、そこに蜂岡寺（広隆寺）を建立したり、松尾山には松尾大社を祀っている。秦氏は桓武の平安京遷都の際に財力と技術を提供し、朝廷の認めるところとなり京で有数の氏族となった。八色の姓では「忌寸（いみき）」の姓を賜り、その系譜には明法家のほか神社の社家・朝廷の官人・郡司などに数多くの名がみえる。

この秦氏の祖霊や稲荷社を祀る伏見稲荷山は、奈良時代から鞍馬山や愛宕山とともに修験道の聖地でもあった。空海の頃、東寺の密教僧の山林修行の場として使われていた。空海は嵯峨や淳和を通じあるいは朝廷の役務を通じ、官寺である東寺の造営別当として秦氏一族の者との親交があったと思われる。さらに東寺の密教僧の山林修行の場として、秦氏系の神職・社家の理解と協力も得ていたであろう。秦氏の側も嵯峨・淳和と空海の関係を知っていて空海には格別に好意的であったと思われる。伏見の稲荷山は、東寺の造営別当としての空海にとっては必要不可欠の山であった。空海と秦氏を触媒に、東寺と伏見稲荷山はジョイントされたのである。

東寺と伏見稲荷を結ぶ祭礼が今も続いている。毎年、四月下旬の最初の日曜日から五月三日まで行われる伏見稲荷大社の「稲荷祭」である。この祭は、貞観年間（八五九〜八七六）にはじまり、天曆年間（九四七〜九五七）以後、恒例の大祭になったと言われるが、この祭はもともと御霊会であった。五世紀頃、朝鮮半島から渡ってきてこの山背の地に定住した秦氏の御霊を鎮め、タタリを除く御霊会として行われた。おそらく、秦氏がこの地に根ざすには、人種差別や階級差別や迫害や搾取の悲哀を味あわないう時はなかったであろう。彼らは未開拓であった山背の盆地を高度な農業・灌漑・土木技術によって開墾し、治水・農業・養蚕・酒造を行い、氏神（稲荷）を祀り寺を建てた。東寺に伝わっている『稲荷大明神流記』に、次のような伝説がある。

弘仁七年（八一六）、空海は紀州田辺で稲荷神の化身である異形の老人に出会った。身の丈八尺、骨高く筋太くして、内に大権の氣をふくみ、外に凡夫の相をあらわしていた。老人は空海に会えたことをよろこんで言った。

「自分は神であり、汝には威徳がある。今まさに悟りを求め修行するとともに、他の者も悟りに到達させようと努める者になったからには、私の教えを受ける気はないか」と。

空海はこう答えた。「（中国の）靈山においてあなたを拜んでお会いしたときに交わした誓約を忘れることはでき

ません。生きる姿はちがつていても心は同じです。私には密教を日本に伝え隆盛させたいという願いがあります。神さまには仏法の擁護をお願い申し上げます。京の九条に東寺という寺があります。ここで国家を鎮護するため密教を興すつもりです。この寺でお待ちしておりますので、必ずお越しください」と。

弘仁十四年（八二三）正月十九日、空海は嵯峨天皇の勅により、東寺を鎮護国家の密教道場にすることを任された。その年の四月十三日、紀州田辺で出会った神の化身の老人が稲をかつき、梶の葉を持って婦人二人と子供一人をともない東寺の南門にやってきた。空海は大喜びして一行をもてなし、心より敬いながら、神の化身に飯食を供え菓子を献じた。しばらく一行は八条二階堂の柴守の家に止宿した。その間、空海は京の南東に東寺の造営の材木を切り出す山を定めた。またこの山に十七日の間祈り稲荷神に鎮座いただいた。これが現在の稲荷社（伏見稲荷）であり、八条の二階堂は今の御旅所である。空海は神輿を造り伏見稲荷・東寺・御旅所を回らせたのである。

この伝説が、空海と東寺（の五重塔の用材）と伏見稲荷（山）と御旅所をつなぐエピソードである。伏見稲荷には明治期の廃仏毀釈まで神仏習合がつづき、荼吉尼天法を修する真言寺院愛染寺があった。

## 一、東寺灌頂院宗徒長者大阿闍梨可加檢校縁起 第六

東寺灌頂院 宗徒・長者・大阿闍梨に檢校を加うるべき縁起 第六

### 【原文】

右院雖未造畢且始傳燈之志。雖此間所思千迴草草入山非遂此志。然則實惠大德一向可造功畢。亦諸莊嚴可如語先。但恒例灌頂阿闍梨者門徒之内最初以成立者可令修御願。若有殊病妨者以次人可請用之。若是辭退者永非吾後生弟子門徒。宜應信奉。

### 【書き下し】

右の院、未だ造り畢わんぬと雖も、且く傳燈の志を始まる。此の間思う所千迴と雖も、草々に山に入りて此の志を遂げず。

然れば則ち實惠大徳一向に造るの功畢んぬべし。亦た諸々の莊嚴、先々に語るが如くすべし。但だ、恒例の灌頂阿闍梨は、門徒の内最初に成立する者を以て御願を修せしむべし。若し殊に病の妨げ有らば、次の人を以てこれを請い用うべし。若し是れ辭退せば、永く吾が後生の弟子・門徒に非ず。宜しく應に信奉すべし。

【註記】

①山…高野山。

【私訳】

右の院はまだ完成していないのであるが、伝法の志はもうはじまっている。この間何度も考えたのであるが、早々と高野山に入り、伝法の志を具現できなかった。そこで、實惠大徳が専心造営に当り完成させてほしい。また、種々の莊嚴については前々から話していた通りにすればよい。ただし、恒例の灌頂阿闍梨は門弟のうちで最も早く密法を成就した者に、勅願を修法させなさい。もし病氣などの妨げがあれば、次の人を呼んで起用しなさい。もし辭退するようなことがあれば、永久に私の弟子でもなければ真言の門徒でもない。よろしくその通り奉じるように。

一、食堂佛前召侍大阿闍梨并二十四僧童子等可令習誦五悔縁起 第七

食堂の佛前に大阿闍梨并びに二十四僧の童子等を召し侍らせ、五悔を習誦せしむべき縁起 第七

【原文】

右案大唐青龍寺例。宗徒大阿闍梨之童子并諸名徳達之童子等令會集食堂。僧達一人童達一人。共令習學五悔每夜現契。即闕大衆所得十分之一。充行諸童子等紙墨料。案彼示此而已。但遂不可成出者雖常住寺内更強喚不可令此庭列。見器惟品可催之。亦九方便於大阿闍梨前召集諸徳弟子之内堪能之僧等。每夕可令習誦。昔大師阿闍梨耶曰。准滄受諸護法天神法味乍守護場等者。准彼示此。違他事勿駐白。

【書き下し】

右の大唐青龍寺の例を案ずるに、宗徒・大阿闍梨の童子並びに諸々の名徳達の童子等を食堂じきどうに會集えしゆうせしめ、僧達一人童達一人、共に五悔ごかいを習學しんがくせしめ、毎夜現あらわしてざん槩ざんとす。即ち大衆の得る所の十分の一を闕くわき、諸々の童子等の紙墨料しぼくりょうに充て行ゆう。彼を案あじ此を示すのみ。但だ遂つひに成なり出でずべからざる者は、寺内に常住じやうじゆうすると雖も更に強つよいて喚よび、此の庭にわに列らせしむべからず。器きを見、品おもを惟おもうてこれを催もよほすべし。亦た九方便くほうべんを大阿闍梨の前に於おいて諸々の徳弟子の内堪能うちまの僧等を召集しゆうじし、毎夕習誦しんじゆせしむべし。昔、大師阿闍梨耶曰いわく。「諸々の護法天神ほうみの法味ほうみを飡受さんじゆするに准あじ、乍たちまち場等ぢやうどうを守護しゆごする者なり。彼に准あじ此を示す。他事いたに違ちがひして自らを駐とどめること勿なれ。

【註記】

- ①童子：僧侶の身のまわりを世話する出家前の山内兒童。
- ②五悔：金剛界礼懺の「帰命」「懺悔」「随喜」「勧請」「廻向」の偈頌。今の智積院では禪宗が「五観」の偈を唱えている。
- ③槩：木札、木の名札。
- ④紙墨料：学用品代。
- ⑤九方便：胎藏界礼懺。「作礼」「出罪」「帰依」「施身」「発菩提心」「随喜」「勧請」「奉請法身」「廻向」の偈頌。
- ⑥護法天神：仏教を守護する護法善神。多くはヒンドウの神々が仏身に変身したもの。
- ⑦法味：仏法の味わい。
- ⑧飡受：飲食する、味わう。

【私訳】

右の大唐青龍寺の例を思案するに、真言の宗徒や大阿闍梨の童子あるいは諸々の名徳たちの童子らを食堂に集めて、僧ら一人と童子ら一人の一对になつて、ともに五悔を学ばせ、毎夜木の名札を提示させて出欠をとるのである。さらに世間の人たちの所得の十分の一を割いて、童子たちの紙墨料に充てるのである。青龍寺の例を思案しこのことを提示しているに過ぎないのであるが。ただなかなか結果が出ない者は、寺のなかに常住するにしても、無理に呼び出してこの学習の場に列座させてはならない。器量を見定め、性向を考えてこれに対処しなければならぬ。また、大阿闍梨の前に諸々の宥徳の弟子のうちすぐれた僧らを召集し、毎夕九方便を習誦させなさい。昔、惠果阿闍梨がよく言つたものである。「いろいろな護法天神が仏法の味わいを摂受するのに准じて、たちまち道場などを守護するのだ」と。惠果和尚の昔話に准じ今の案を提示したのである。他事に時間を費やして自らを止留させてはならない。

一、吾後生弟子門徒等以大安寺可爲本寺縁起 第八

吾が後生の弟子・門徒等、大安寺を以て本寺と爲すべき縁起 第八

【原文】

夫以大安寺是兜率之構。祇園精舎業矣。尊像釋迦即智法身之相也。初發心本吾祖師道慈律師遂爲推古天皇御願者也。依之吾大師石淵贈僧正彼寺爲本寺。而御弟子等皆令入住也。隨吾以彼寺爲本寺也。但依勅命渡東大寺建立南院。此間出生弟子等便宜入住東大寺也。方今案本意。吾先師御寺大安寺是勝地矣。先師嘗地被建立也。須吾弟子後生門徒等以彼寺爲本寺仕奉釋迦大師彼中以西塔院爲根本岫。具由在別多羅而已。復師資血脈圖在別紙。得一知萬。

【書き下し】

夫れ以れば、大安寺は是れ兜率とそつの構かまえなり。祇園精舎わかきの業なり。尊像の釋迦は即ち智法身の相なり。初發心の本にして、吾が祖師道慈律師、推古天皇の御願を遂げ爲すものなり。これに依つて吾が大師石淵贈僧正、彼の寺を本寺と爲し、御弟子等

を皆入住せしむなり。随つて吾れ彼の寺を以て本寺と爲すなり。但だ勅命に依り東大寺に渡り南院を建立す。此の間出生せし弟子等は便宜して東大寺に入住するなり。方に今、本意を案するに、吾が先師の御寺・大安寺は是れ勝地なり。先師は地を嘗みて建立せらるるなり。須く吾が弟子・後生の門徒等、彼の寺を以て本寺と爲し、釋迦大師に仕え奉るべし。彼の中に西塔院を以て根本軸と爲せ。具さなる由は別多羅に在るのみ。復た師資血脈の圖は別紙に在り。一を得て萬を知れ。

【註記】

①兜率・兜率天。弥勒菩薩の浄土。この兜率天の内院を模したのが祇園精舎。祇園精舎に擬したのが長安の西明寺。西明寺に做つたのが大安寺。空海が言う「大安寺は是れ兜率の構、祇園精舎の業なり」はそのことである。

②構・構造、造り、伽藍配置。

③祇園精舎・釈尊がよく滞在し説法もした、古代インド、コーサラ国の首都シュラーヴァステイ（舍衛城）にあつた祇樹給孤独園精舎。

④智法身・ここは胎藏界の大日如来、の意。

⑤道慈・飛鳥から平城京に移された大官大寺＝大安寺の祖。勤操が師事した善議の師。同輩に吉野（比蘇山寺）に自然智宗を開いた神叡がいる。大宝二年（七〇二）、第八次遣唐使船で入唐し、長安の西明寺に住すること十六年、養老二年（七一八）、第九次遣唐使船で帰国。日本の三論宗の三祖。長安で善無畏に会い虚空藏求聞持法を受法し、大安寺に伝えたと云われ、道慈から慶俊や勤操に、慶俊から戒明に伝えられた。空海が道慈を「わが祖師」と言うのは、剃髮得度の師・勤操↑善議↑道慈という法脈による。最近の説では、空海に虚空藏求聞持法を教えたのは戒明だという説（上山春平、堀池春峰など）が有力視されているが、私は依然元興寺の護命に関心を持っている。

⑥推古天皇・第三十三代天皇。初の女帝。用明天皇の第二皇子・聖徳太子を皇太子とした。仏教が本格的に展開した時代。

⑦南院・東大寺南院。

⑧嘗・こころみる。

⑨西塔院・西塔周辺の寺域。

⑩根本岫・根拠地。

⑪多羅・多羅の葉、鉄針などで傷つけて経文などの文字を書く、転じて記録簿？

⑫血脈・付法の順序。

### 【私訳】

思うに、大安寺は兜率天（弥勒菩薩の浄土）の構造である。祇園精舎の事業でもある。本尊の（丈六）釋迦如来は智法身（の大日の）相をしている。私をはじめて発心した根本の場所であり、私の祖師である道慈律師が推古天皇の勅願を完成させたものである。私の偉大な師である勤操大徳は、大安寺を本寺とし、弟子たちを迎えて皆住わせた。だから私もそれに倣い、大安寺を本寺としているのである。ただ、（嵯峨天皇から）勅命があつて東大寺の別当となり南院を建てた。その間に弟子になった者は、便宜上東大寺に入住させた。方に今、（大安寺の）本旨を思案するに、私の先師道慈律師の御寺・大安寺は仏法の勝れた地である。先師はよくこの地を吟味して建立したのである。私の弟子・後生の宗徒たちはすべからず、この寺を本寺とし、本尊の釋迦如来に仕えなければならぬ。伽藍のなかの西塔周辺の寺域を根拠地とせよ。具体的な理由は別途記録簿にある。また、師資の付法の順序を記した系図は別紙にある。一事を得て万事を知りなさい。

### 【付記】 国際仏教交流センター 大安寺

大安寺の起源は古く飛鳥の時代にさかのぼる。そして、聖徳太子が創建した「熊凝精舎」の時代から舒明天皇の「百済大寺」の時代、そして天武天皇の「高市大寺」の時代へ。その後、平城遷都にともない平城京左京六条四坊と七条四坊の地に再建され、六条大路をはさんで東西三丁、南北五丁の広大な敷地を有し、東西二塔をはじめ金堂を中心とした諸堂伽藍を擁する壮大な大安寺となった。その壮麗な伽藍は、のちに奇しくも空海が長安の都で留学生生活を送ることになる西明寺の伽藍を模したもので、西明寺はインドの祇園精舎を模したものとされている。奈良時代、南都の官大寺は聖朝安穩・天下泰平を祈る国家仏教の道場であつたが、大乘仏教の中心思想である法相（唯識）や三論（中観）などを講じる学問所でもあつた。この大安寺はそのなかでも特異な寺院で、法相・三論の学問のほか中国大陸や朝鮮半島やインドなどから来た仏教僧が多く出入りするいわば国際仏教交流センターであつた。

この大安寺は古くから長安への留学僧を輩出していた。道慈は、大宝二年（七〇二）、はじめて南海路をとった第八次遣唐使船で入唐し、長安の西明寺で十六年の留学生生活を送り大安寺に帰った。三論の教学に通じ、工巧明にすぐれ、養老二年（七二八）に帰朝し『金光明最勝王経』や虚空蔵求聞持法をもたらした。普照は、聖武天皇の命により鑑真和上を日本に招聘するために唐に渡り、在唐二十年にして目的を果たす。栄叡は、普照とともに、同じく鑑真和上の日本招聘のために奔走し辛苦を重ねたが、不幸にして在唐十七年での地に没した。戒明も入唐留学経験者で、宝龜十年（七七九）に帰朝したが、持ち帰った『釈摩訶衍論』を元興寺法相の学僧賢憬（璟）に偽書と疑われて不信を買い、大安寺を離れて大宰府に留まった。賢憬は、鑑真和上を難波ノ津に迎え和上を支えた一人で、桓武天皇の信頼が厚く、僧綱にもその名を連ね、山背（山城）の地に遷都（平安京）が行われる際には現地に派遣されている。永忠は、在唐三十年、長安の西明寺に止宿し唐代仏教ことに華嚴を修め、西明寺での部屋を空海に譲って帰国した人。空海帰国後も一人は親交がつづいた。

渡来僧には、東大寺大仏開眼の導師をつとめたインド僧の菩提僊那、同じく咒願師をつとめた唐僧の道瓊、おなじく大仏開眼で、ベトナムの伎楽の奉納をしたベトナム僧の仏哲、『華嚴経』を東大寺にもたらした新羅の審祥らの名が残っている。若き日の空海は隣の佐伯院に寄宿し大学寮に通うかたわら、この国際仏教交流センターにもしばしば出入りし、生まれてはじめて仏教というインド的思考の世界を知った。さらにやがて自分の将来を決定づける虚空蔵求聞持法に出合う。この大安寺で空海の異才をいち早く認め、仏教入門への道を開いたのが勤操大徳である。勤操は若くして三論の学匠となり、のちには嵯峨天皇に認められて東寺造営の別当や、西寺造営の別当に任じられている。淳和天皇の時には貧民救済の文殊会を行い、のち国家事業になった。勤操は、隣の佐伯院からしばしば来て仏教や渡来人や異国の言語に異常なほどに関心を示し、その吸収に天賦の才を発揮する大学生の空海を好ましく思い、おそらくは佐伯今毛人の仲介もあったであろう、空海を厚遇したと思われる。虚空蔵求聞持法を実際に伝授したかどうかは別として、大学寮での漢籍の学習と経学の内容に飽き足らなさを感じていた空海を、仏教に覚めさせたのは事実であろう。おそらく、勤操は阿刀大足や佐伯今毛人から空海の漢籍暗記の才、すなわち言語の異能について聞いていた。だからいきなり漢訳の『俱舍論』『成唯識論』『中論』を与えて諳んじさせ、それを講じたにちがいない。やがて空海の暗記力の並はずれた才能を身近に感じ、勤操は迷うことなく虚空蔵求聞持法に彼を導いたに相違ない。実際に修法を伝授したのは戒明だったという説が最近の研究者の間には多数ある。私は、大安寺と関係の深い吉野比蘇（曾）山寺の「自然智」宗に属する無名の行者か、元興寺の法相学者で山林修行者でもあり、空海とは親しい関係があった護命だったと思っっている。

青年期に向かう早熟な空海のなかで、漢籍の世界はすでに満足できないものになっていた。ことに大学寮で学ぶ経学は、畢竟朝廷高官のエリートコースをものにするための処世学であり、空海が感じはじめている例えば絶対者や自己や生命や認識や言霊といった哲学的宗教的な問いに何も答えてくれないものであった。ほどなく空海の心中に大きな価値転換が起きる。忽然として大学寮から姿をくらし山林での修行生活に入ってしまうのである。空海は約束されたエリート的人生をさっさと捨て在家のまま五戒または八戒を保つ乞食同様の修行者（優婆塞）となるのである。

蛇足ながら、この大安寺の国際仏教交流センターに、第十六次遣唐使船で空海と一緒に入唐した、サンスクリットがよくできる霊仙がいたはずである。おそらくこの大安寺で、インドから来たある僧に付いて、空海と一緒にサンスクリットを相当程度（今で言えば大学院の博士課程レベル）学んでいたことが推量できる。霊仙は長安で醴泉寺の般若三蔵に師事し、その訳経を手伝うまでになっている。空海のサンスクリット力に勝るとも劣らない。

## 一、宿住眞言場欲爲師師門徒者必先須以情操爲本縁起 第九

眞言の場に宿住し師師の門徒と爲るを欲せん者は、必ず先ず須く情操を以て本と爲す縁起 第九

### 【原文】

夫以大唐眞言宗門徒本自不問他徒。從赤子時得人之子教爲弟子。如螟蛉以他子爲己子。後令出家。如是繼佛性門者也。然則准彼看定赤子勞養決心惟彼操行。若不可當早却他家。叶道理者留護習道。若使爲門徒内之者操行宜者非簡我師人資汲引繼密教性。設令雖親弟子操意不調者簡略不可同共。何況可令授眞奥之道哉。

### 【書き下し】

夫れ以るに、大唐の眞言宗門徒は本より自ら他徒と問せず。赤子の時従り人の子を得て教えて弟子と爲す。螟蛉めいれいの他子を

以て己の子と爲すが如し。後に出家せしむ。是くの如く佛性門を繼ぐ者なり。然れば則ち彼に准じて赤子を看定め勞養し、

決心して彼の操行を惟い、若し當らざるべくんば早く他家に却けよ。道理に叶う者は留めて護り道を習わす。若使、門徒の内と爲る者の操行宜しき者は、我が師人資を簡えらばず、汲引して蜜教の性を繼がしめん。設令親たとしき弟子と雖も操意の不調の者は簡略して同じく共にすべからず。何ぞ況んや眞奥の道を授けらしむべけんや。

【註記】

① 螟蛉・青虫 養子。地蜂が青虫の幼虫をとつて育てることの例え。

② 操行 志操や行い。

③ 眞奥 奥義。

【私訳】

思うに、大唐の眞言宗の宗徒はそもそも自ら他宗の宗徒と関係しない。幼児の時から他人の子供を預かり、これに仏法を教えて弟子とするのである。地蜂が青虫の幼虫をとつて育てると同じく、他人の子を自分の子とするのである。然る後に出家させ、このように仏性の法門を継承するのである。であるから、大唐の眞言宗徒に倣つて幼児を見定め、養育し、心を決めてその志操や行いを判断し、もし出家するに適性でなければ早く実家に帰しなさい。適性の者は留め置いて養護し仏道を習学させなさい。もし宗徒のなかで志操や行いが出家するに適宜な者あれば、私の師恵果和尚は、人としての資性をより分けず、弟子として引き受け密教の心性を繼がせていた。たとい、親しい弟子であっても志操の意志が整っていない者は簡略にして適性の者として同じように対応してはならない。まして眞言宗の奥義の道を授けることができようか。

一、東寺可立長者縁起 第十

東寺に長者を立てるべき縁起 第十

【原文】

夫以爲吾弟子者末世後生弟子之内成立僧綱者。非求上下臈次。以最初成出可爲東寺長者。長者既是座主矣。准唐法欲奏聞座主號。雖思先入山之間既令忘脫未遂此事。須諸弟子等必遂此事。皆是非有不要言。併令法久住謀而已。我後之資勿難斯乎。

【書き下し】

夫れ以るに、吾が弟子と爲る者の、末世後生の弟子の内、僧綱そうこうに成り立たん者は、上下の臈次ろうじを求めず、最初に成り出づるを以て東寺の長者と爲すべし。長者は既に是れ座主なり。唐の法に准じて座主の號を奏聞そうもんせんと欲す。先々を思うと雖も入山の間既に忘脱せしめて未だ此の事を遂げず。須く諸々の弟子等、必ず此の事を遂ぐべし。皆是れ不要の言有るに非ず。併しながら令法久住りようぼうくじゅうを謀るのみ。我が後の資、これを難ずること勿れ。

【註記】

- ①僧綱：僧綱所。官僧や官寺など国家仏教の人事・監督官庁。東大寺のなかにあつた。
- ②臈次：僧侶としての歴年数。
- ③長者：東寺の長官。真言宗の最高位。

【私訳】

思うに、私の弟子となる者で、末世にあとから生まれた弟子のうち、僧綱所において成功する者は、僧侶としての歴年数の上下を考慮せず、一番最初に密法を成就したことを以て東寺長者としなさい。長者はすでに東寺の座主である。唐の法によつて座主の号を奏上しなければと思つていたのだが、先のことを考えていたのに、高野山への入山の間にもう忘れていて、またこのことをやり遂げていない。すべて弟子たちよ、必ずこのことを成し遂げてもらいたい。これは不必要な言葉

ではない。密法が末世に存続せしめるためだけである。私のあとの弟子たちよ、これを不服とし非難してはいけない。

一、諸弟子等并爲後生末世弟子者可敬東寺長者緣起 第十一

諸弟子等並びに後生末世の弟子と爲る者は、東寺長者を敬すべき緣起 第十一

【原文】

夫以大唐法如青龍寺例。所以然者彼寺元來無有他類。雖僧數千皆非他徒。厥中若有一人不和之者。諸衆共和調情操令無嗾事。何況分疵及俗家哉。方今冀也一家之徒假<sub>レ</sub>使數千萬。各互護惜勿出他家。一心專念可將敬尊座主官長。誹彼謗此相互莫怨。亦我師人師勿爲限別。亦分慈眷勿簡我資人資。但不隨處風不叶宗旨放逸邪見更不得共。都吾非末資。得一知千耳。

【書き下し】

夫れ以るに、大唐の法は青龍寺の例の如し。然る所以の者は彼の寺は元來他類有ること無し。僧數千と雖も皆他徒に非ず。

厥<sub>そ</sub>の中に若し一人不和の者有らば、諸々の衆共に情操を和調して嗾<sub>しやうじ</sub>事を無からしむ。何ぞ況んや疵<sub>きず</sub>を分かちて俗家に及ば

んや。方に今、冀わくば一家の徒、假<sub>たとひ</sub>使數千萬なりとも、各々互いに護り惜しんで他家に出すこと勿れ。一心に專念して

まさに座主<sub>ざす</sub>・官長<sub>かんちやう</sub>を敬尊すべし。彼を誹りこれを謗り相互に怨むこと莫れ。亦た我が師と人の師<sub>げんべつ</sub>と限別を爲すこと勿れ。

亦た慈眷<sub>じけん</sub>を分かつに我が資と人の資と簡ぶこと勿れ。但だ處<sub>ちよ</sub>風に隨わず、宗意に叶わず、放逸にして邪見あらば、更に共に

することを得ざれ。都<sub>すべ</sub>て吾<sub>まづ</sub>が末資<sub>まつし</sub>に非ず。一を得て千を知るのみ。

【註記】

- ① 噉事…かまびすしいこと。やかましいこと。
- ② 疵…きず。
- ③ 官長…管長。
- ④ 慈眷…いつくしみ眼をかける。
- ⑤ 處風…風紀。
- ⑥ 未資…後世の弟子。

【私訳】

思うに、大唐の山内の決まりごとは青龍寺の例と同じである。そのわけは、青龍寺にはもともと他宗の門弟はいない。僧侶が数千いたとしても皆他宗の門弟ではない。もしそのなかに周囲と和することができない者が一人でもいれば、諸々の衆徒は共に情操を調和してかまびすしいことをなくすのである。ましてやどうして傷を俗家にまで広げることがあるうか。まさに今、願わくば真言宗一門の宗徒は、たとい数千万いるとしても、お互いに護り合い、別れを惜しんで他宗に出るようなことがあつてはならない。一心専念して座主・官長を敬尊しなさい。あれを誹りこれをお互いに怨むことがあつてはならない。また、我が師と他人の師を区別するのもいけない。慈しみ眼をかけるにも自分の弟子と他人の弟子をより分けるのもいけない。ただし、風紀に従わず真言宗の宗意にも叶わず、勝手気ままにして誤った見解を持つ場合は、共に修学してはならない。それらはすべて私の後世の弟子ではない。一つのことがかわかつたら千のことを知りなさい。

一、末代弟子等可令兼學三論法相縁起 第十二

末代の弟子等に三論・法相を兼學せしむべき縁起 第十二

【原文】

夫以眞言之道蜜教之理。同人性故入阿字義也。然而案萬物意皆在内外。然則以蜜爲内以顯爲外必可兼學。因茲輕本宗勿重

末學宜知吾心兼學而已。但人任器不堪兼者將任本業精進修行。具由在別青龍寺例專此而已。依彼示之。亦宗分講讀定額中非要望以智行人簡定。

【書き下し】

夫れ以るに、眞言の道は蜜教の理なり。同じく性に入るが故に阿字の義に入るなり。然れども萬物の意を案じるに皆内外に在り。然れば則ち蜜を以て内と爲し、顯を以て外と爲す。必ず兼學すべし。茲に因つて本宗を輕んじ、末學を重んじること勿れ。宜しく吾が心を知り兼學するのみ。但だ、人の器に任せ、兼ねるに堪えざる者は、將に本業に任せて精進修行すべし。具なる由は別に在り、青龍寺の例は専ら此れのみ。彼に依つてこれを示す。亦た宗分の講讀は定額の中にして要望に非ずとも智行の人を以て簡定すべし。

【註記】

- ①性…本性⇨空性の本源。
- ②阿字の義…阿字本不生。
- ③萬物の意…森羅万象の動向。
- ④本業…眞言宗の行学。
- ⑤宗分…眞言宗の分。密教・顯教のうち密教の分、の意。
- ⑥定額…定額僧。平安時代、朝廷から一定の人数が定められ、供料が支給された官寺の官僧。
- ⑦智行…行学二道にすぐれた、の意。
- ⑧簡定…選定、選出。

【私訳】

思うに、眞言の法門は密教の教理である。同じく空性の本源に悟入するのであるから阿字本不生の道理に入るのである。

しかし森羅万象の動向を考えるに、すべてに内と外がある。だから密教を内とし顯教を外として、必ずともに兼學すべきである。それ故に真言宗を軽んじ、末節の学（顯教）を重んじてはならない。よくよく私の意図を知って兼學しなさい。ただし、その根機によって兼學できない者は、將に真言宗の本業により精進修行するほかはない。具体的な理由は別にある。青龍寺の例は主として以上である。それを以てここに私の意図を示した。また、真言宗の分の經典講読は定額僧のうち講じるのを望まない人でも、教理の理解と行の実践にすぐれた人を選定しなさい。

【付記】三論（中觀）・法相（唯識）の兼學

空海は儒家・道教・仏教の三教を学び、仏教を選んだ。さらに仏教を原始仏教から密教まですべて学び、密教を選んだ。総合仏教・綜合学習の人である。その空海が、真言宗の僧侶は三論・法相（顯教）を兼學すべし。それができない人は、真言宗だけでも精進しなさいと遺誡している。他宗兼學は、空海が仏教の基礎を学んだ頃の南都仏教では当たり前のことだったが、空海がとくに三論と法相を言うのはおそらく、若い日にお世話になった大安寺のことを念頭に置いてのことではないか。ただ、空海は若い頃東大寺にもお世話になっていたし、空海独自の密教思想は多くを華嚴に負っている。だが空海は、華嚴を兼學しろとは言わない。しかし、空海が言わんとしているのは、三論や法相が説く大乘の「空」の内実がわからなければ、究極『理趣經』もわからないという意味である。この遺誡とは直接関係があるかどうかわからないが、空海以後も真言宗の学匠は伝統的に他宗兼學で、もちろん伝統教学のなかで、秘法の儀軌作法（事相）などを専門とする学匠も多々いるが、教理学においては江戸期までずっと他宗兼學が伝統だった。その一例に、智積院の性相学（法相学）があり、根来時代から江戸期まで今で言う唯識学の大学林であった。

言うまでもなく、三論とはインド大乘仏教中觀派の祖龍樹の『中論』『十二門論』と、その弟子提婆（アールヤ・デーヴァ）の『百論』を典拠とする「空」の論証学で、対立的二項を「此れなければ彼なし、彼あるが故に此れあり」という相待的・相依的な縁起觀で、二項とその対立關係を「八不中道」「真俗二諦」「三諦」説によつて「無自性」「空」「仮（設）」「中（道）」と説く。中觀派はその後、仏護（ブツダ・パーリタ）・清弁（ブハーヴァヴィヴェーカ）が『中論』の註釈を著わし、陳那（デイグナーガ）が論証法を明らかにした（『因明正理門論』）。次いで月称（チャンドラ・キールティ）や法称（ダルマ・キールティ）や寂天（シャーンティ・デーヴァ）が続き、さらに智蔵（ジュニヤーナ・ガルバ）・寂護（シャーンタ・ラク

シタ)・蓮華戒(カマラ・シーラ)、そして獅子賢(ハリ・バドラ)、さらにチベット学僧のアティーシャへと展開し、寂護や蓮華戒らがチベットへ入りインドの後期中観思想をチベットに伝えた。この中観派は論証法の相違からその展開過程において、寂護を創始とする「帰謬論証派」(プラーサンギカ)と清弁をはじめとする「自立論証派」(スヴァータントリカ)に分れ、互に批判・論争をした。

このインド中観派の主要な論書を中国流に解釈して一つの学派になったのが中国三論宗で、それをそっくり移入したのが南都の三論宗だった。中国三論宗は、五世紀の冒頭、鳩摩羅什が『中論』『十二門論』『百論』を漢訳し、そのあと僧朗・僧詮・法朗と伝えられ、法朗の弟子の嘉祥大師吉蔵が『中論疏』『十二門論疏』『百論疏』『三論玄義』を著わし三論教学を大成した。日本には、この吉蔵の弟子の高麗僧慧灌が、推古天皇の三十三年(六二五)に元興寺に来て、中国僧の福亮と息子の智蔵に伝えた。智蔵はその後入唐して吉蔵に師事し、帰国後は法隆寺を中心に東大寺・西大寺・大安寺にも三論を広め、弟子の智光・礼光が元興寺の三論を守った。同じ智蔵の弟子の大安寺の道慈は、大宝元年(七〇一)に入唐して、元康(吉蔵の孫弟子)から三論を学ぶとともに善無畏から虚空蔵求聞持法を受法して帰国し、大安寺に三論と求聞持法を伝えた。のち、元興寺の三論からは理源大師聖宝(空海の門弟で東大寺別当だった真雅の弟子)が出て、東大寺東南院を創建し、永観・珍海を輩出した。また大安寺からは善議・慶俊・勤操が出た。しかし、空海が入唐する延暦年間の頃には三論を学ぶ人が減少し、その勢いは次第に低調となる。一説によれば、空海の留学生資格は三論宗の留学生希望が定数に満たなかったため、三論宗の留学僧の補充だったとも言われ(藤井淳『空海の思想的展開の研究』)、やがて法相宗に吸収されることになる。

また法相とは、瑜伽行すなわち「止(シヤマタ)」「観(ヴィパシユヤナー)」やその双運の瞑想行中における精神現象学的認識学、あるいは深層心理学で、具には「五位百法」の「無自性」「空」を論証する唯心論である。大乘までの認識論が眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六識だったのに加え、唯識派は、六識がそのはたらきを止めてもなおその背後で不断に活動し我執を生じる末那識(マナ識、自我意識、第七識)と、認識対象となる種々の現象(現行、一切法(五位百法))の種子を内蔵し、六識・末那識のはたらきをそうあらしめる根源の阿頼耶識(アーラヤ識、根本識、第八識、蔵識、一切種子識)を新たに設定した。

インド大乘仏教瑜伽行唯識派は、『瑜伽師地論』『大乘莊嚴經論頌』『弁中辺論頌』『金剛般若經論頌』『分別瑜伽論』を著わ

したと中国に伝承されている弥勒（マイトレイヤ）を始祖とし、部派仏教の説一切有部から大乘に転じた無著（アサンガ）・無著（ヴァスバンドウ）の『撰大乘論』『顯揚聖教論』『順中論』や『唯識二十頌』『唯識二十論』『大乘成業論』によって中観派と拮抗する大乘の教理学派となった。その後、徳慧（グナ・マテイ）・無性（アスヴァバーヴァ）・安慧（スティラ・マテイ）・護法（ダルマ・パーラ）・戒賢（シーラ・バドゥラ）が出た。この唯識派もその発展過程において、認識作用の根源としての阿頼耶識も究極的には「空」として否定されるという無相唯識派と、これに対して阿頼耶識は実在であって「空」によっても否定されないという有相唯識派の二派に分れた。

中国では、無著・世親・安慧の流れを汲む真諦（パラマ・アルタ）が無著の『撰大乘論』を漢訳し、いち早く中国に唯識思想を広めた（撰論宗）。真諦には大興善寺の道尼があり、道尼からは道嶽が出ている。次いで玄奘が西域・インドに遊学し、ナーランダール寺院で戒賢に師事して有相唯識を学んだ。玄奘は持ち帰った仏典の訳経に従事しながら唯識を慈恩大師（窺）基に伝え、（窺）基は『解深密経』や護法の『成唯識論』を論拠に中国における新しい唯識学を大成した（法相宗）。日本には、白雉四年（六五三）に入唐し、玄奘に学んだ道昭が飛鳥の法興寺（のちの元興寺）に伝え、次いで斉明天皇の四年に入唐した智通・智達が中国法相の第三祖智周に学んで帰り、同じく飛鳥寺に伝えた。さらに、養老元年（七一七）に入唐した玄昉が智周に師事して法相を学び、南都の興福寺に伝えた。以後法相宗は人も得て盛んになり、興福寺からは室生寺を創建した賢憬、空海とも親しかった室生寺で賢憬の弟子の修円、会津慧日寺の徳一らが輩出し、そののちも蔵俊・貞慶・覚憲・信円らが出る一方、元興寺にも空海と特に親しかった護命、そして明椿らがいた。

蛇足ながら、近代日本における法相学者として法隆寺の佐伯定胤師の名を銘記しておきたい。師は若い頃に自ら建立した勸学院で『成唯識論』を講じ、聴講したい者には宗派を問わなかった。本宗にも師の講義に参じた先学がいた。私の知る範囲だが、智積院第六十一世化主竹村教智猊下や私の父もその人である。

## 一、東寺定供僧二十四口縁起 第十三

東寺に供僧二十四口を定める縁起 第十三

【原文】

夫以件寺定供僧元注官符五十口。今奏定二十四口。方今同末代所有志本願聖靈元庭速崩不堪造畢。加以未入庄田正稅等。寺大料少因以奏定。就中二十一口修學練行者。三口即三綱造治雜預者也。是亦皆用淨行之人。勿用員外人有犯之僧。但有工巧意操風流可用修理造作莊嚴佛事者。不求淨不淨置於非入寺之權三綱。依之不得猥雜他家穢僧等。阿闍梨耶得一悟千。

【書き下し】

夫れ以るに、件の寺に供僧くそうを定めること元官符に五十口を注す。今、奏して二十四口を定む。方に今、末代所有の志を同うに、本願聖靈の元庭、速く崩じ未だ造り畢るに堪えず。加しかのみならず以、未だ庄田しょうでん・正稅しょうぜい等を入れられず。寺は大いに料少く、因つて以つて奏して定む。就中、二十一口は修學・練行者の者、三口は即ち三綱・造治・雜預の者なり。是れ亦た皆淨行の人を用い、員外の人・有犯の僧を用いること勿れ。但し、工巧くぎょう・意操・風流有り、修理・造作・莊嚴・佛事に用うべき者は、淨・不淨を求めず非入寺の權三綱に置くべし。これに依り他家の穢僧等を猥雜するを得ず。阿闍梨耶は一を得て千を悟る。

【註記】

- ①供僧：東寺の僧侶のうち、寺の運営に当る一員として評定に参加し法会を勤めたりする供奉僧。
- ②庄田：莊園。
- ③正稅：日本の律令制の下において国衙の正倉に蓄えられた米。
- ④三綱：寺院を統括管理する上座・寺主・維那の総称。
- ⑤造治：建物等の建造・修治？
- ⑥雜預：雜事預り？

【私訳】

思うに、東寺の供僧の定めはもともと、官符に五十口と注記されている。今は、奏上して二十四口である。今、未代の志を察するに、東寺改造の願主である桓武天皇が早く崩御になられたので、まだ完成に至っていない。そればかりでなく、まだ莊園から当然得られるはずの租税の米も収められず、寺は大いに供料が少く、その故に奏上して二十四口に減らしたのである。そのうち、二十一口は教学を修め行法を練磨する者、三口は即ち三綱・造治・雜預の者である。これらもまた清廉潔白の人を充て、定数外の人や戒律を犯すような僧侶を用いてはならない。ただし、技術や志操や風雅の趣きがあり、修理・造作・道場莊嚴・仏事に使える者は、淨や不淨を問わず非入寺の三綱に準ずるところに置いておくように。これによつて他宗の汚れた僧たちがみだりに入り込むことはできない。阿闍梨耶は一を得て千を悟るのである。

一、可請用以二十四口定額僧宮中正月後七日御願修法修僧縁起 第十四

二十四口の定額僧を以て宮中正月の後七日御願修法の修僧に請い用いる縁起 第十四

【原文】

夫以大唐青龍寺住僧數千。就中定供僧二百口皆秘密徒也。即内道場御願正月修僧等以此請用。但今案物意我日本國修僧十五口之中。大阿闍梨耶一人。入室弟子一人三綱之中行事一人。今以十二口可請用於年替。彼支度皆在式文。勿令請用努力他僧。須先錄七日以前修僧等名簿奏聞。次參入修僧畢之後亦奏聞。若在殿上仰被省捨僧徒者。雖厥之人速可令罷出。依此不得請補非門徒僧。但任大阿闍梨心。簡定門徒之中智行者。亦經奏聞請用而已云云。

【書き下し】

夫れ以るに、大唐の青龍寺の住僧は數千なり。就中、供僧は二百口に定む。皆、秘密の徒なり。即ち内道場の御願の正月の修僧等は此れを以て請い用う。但し、今物意を案ずるに、我が日本國の修僧十五口の中、大阿闍梨耶一人、入室の弟子一人、三綱の中の行事一人。今十二口を以て年替りに請い用うべし。彼の支度皆式文に在り。努力して他僧を請い用いること

勿れ。須く先ず七日以前に修僧等の名簿を録して奏聞するべし。次に修僧を参入させ、これを畢つて後、亦た奏聞すべし。若し、てんじょう殿上の仰せに省捨せらるる僧徒在らば、厥の人速しと雖も罷り出でせしむべし。此れに依つて非門徒僧を請補すしよつこほること得ず。但し、大阿闍梨の心に任せ、門徒の中に智行の者を簡定せば、亦た奏聞を経て請い用いるのみ、云云。

【註記】

- ① 祕密の徒…密教徒。
- ② 内道場…宮中内の仏殿。
- ③ 御願…勅願。
- ④ 物意…正月修法の諸般の現状。
- ⑤ 式文…法要の式次第。
- ⑥ 参入…宮中に参内すること。

【私訳】

思うに、大唐の青龍寺に住する僧は数千であるが、そのうち供僧は一百口に定めている。全員、真言宗の門弟である。宮中の内道場における勅願による正月の修法はこれらの僧を召集して用いるのである。ただし、今、諸般の現状を案するに、日本の場合、修僧の十五口のうち、大阿闍梨耶が一人、その内弟子（侍者）が一人、三綱のうちから会行事一人。残りの十二口は、伴僧として年替りに召集し用いるべきである。その支度は皆式次第にある。努めて定額僧以外の僧侶を召集し用いてはならない。先ずは七日前に修僧などの名簿を作つて宮中に奏上し、次に修僧を参内させ、そのあと再度奏上をしなければならぬ。もし宮中の仰せに名簿から除外される僧徒があつた場合は、その人は早々にでも退出させなければならぬ。こうして真言宗の門弟でない僧を召して補充することはできない。ただ、大阿闍梨の思いに任せて、門弟のなかから教理の理解と行の実践にすぐれた者を選定し、また奏上を経て召集し用いるだけである、云云。

一、宮中御願正月修法修僧等分各所得上分可充高野寺修理雜用縁起 第十五

宮中御願の正月修法の修僧等、各々所得の上分を分かちて高野寺の修理雜用に充てるべき縁起 第十五

【原文】

夫以大唐青龍寺祖師被建立天台山下私少伽藍矣。彼名新禪寺也。以内道場正月施物上分令修理彼道場。亦以青龍寺大衆年中所得上分令充用彼用也。此非凡政芳師資迹謀也。莫咲難後生資云云。

【書き下し】

夫れ以るに、大唐青龍寺の祖師、天台山の下に私の少伽藍を建立せらる。彼の名は新禪寺なり。内道場の正月の施物の上分を以て彼の道場を修理せしむ。亦た青龍寺の大衆の年中所得の上分を以て彼の用に充用せしむなり。此れ凡の政に非ず師資の迹を芳しくするはかりごと謀なり。後生の資を咲い難ずること莫れ、云云。

【註記】

①青龍寺の祖師…不空三藏。

②天台山…もとは道教の靈山であるが中国仏教の三大聖地の一つで、現在の浙江省天台県の北方にある。華頂峰・桐柏峰・仏隴峰・赤城峰・瀑布峰といった峰々から成る。中国の太建七年（五七五）に、智顛（ちぎ）が仏隴峰の南山麓に入り（国清寺）、天台教学を大成し、以後天台宗の根本道場となった。伝教大師最澄をはじめ、日本天台宗の英才円載・円珍・成尋・栄西・重源らが入唐・入宋して学んでいる。

③新禪寺…？

④上分…一部。

⑤凡…世間一般。

【私記】

思うに、大唐青龍寺の祖師である不空三藏は、天台山の麓に私的に小さな寺院を建て、その名を新禪寺と言った。宮中の内道場で行われる正月御修法のお布施の一部を、その寺院の修理費用にし、また青龍寺に止住する僧侶の年中所得の一部もそれに充てていた。これは世間一般のやりくりではなく、師から弟子へと密法を継承発展させるために考えをめぐらせたのである。後世の弟子たちを笑ったり避難したりしてはいけない、二云。

一、可試度宗家年分縁起 第十六

宗家年分を試度すべき縁起 第十六

【原文】

夫以件宗分度者須如初思試度東寺。然而欲不令荒山家更改奏官符欲申下金剛峯寺者也。敢厭東寺汲南嶽哉。今須東寺座主大阿闍梨耶執事欲改直之。亦簡定諸定額僧中能才童子等。於山家試度。即於東大寺戒壇受具足戒。受戒之後於山家三箇年練行。厥後各各隨師受學蜜教。具在先文而已。但曰座主大阿闍梨者即東寺大別當號也。門徒之間修學最初成出爲長者言也。不可求臆次。修學爲先最初成立爲長者而已。

【書き下し】

夫れ以るに、件の宗分度者は須く初思の如く東寺に試度すべし。然れども山家を荒さしめざるを欲して、更に改めて奏し、官符を金剛峯寺に申し下すことを欲するものなり。敢えて東寺を厭い南嶽を汲まんや。今須く東寺の座主大阿闍梨耶執事してこれを改め直さんと欲す。亦た諸々の定額僧の中の能才の童子等を簡び定め、山家に於いて試度し、即ち東大寺戒壇於いて具足戒を受けしめよ。受戒の後、山家に於いて三箇年練行し、厥の後、各々師に隨い蜜教を受學せしめよ。具に先文

に在るのみ。但し、座主大阿闍梨と曰うは即ち東寺の大別當の號なり。門徒の間に修學して最初に成出し長者と爲るを言うなり。鵬次ろうじを求むべからず。修學して先んじて最初に成立を爲すを長者と爲すのみ。

【註記】

- ①宗分度者…平安時代、僧綱から仏教各宗に一定数が認定された官僧。年分度者。
- ②試度…試験及び得度。
- ③山家…高野山。
- ④金剛峰寺…高野山の中心寺院。
- ⑤南嶽…高野山。
- ⑥具足戒…平安時代、国家認定の官僧になる条件として受戒すべき戒律。鑑真和尚が東大寺にもたらした「四分律」では、比丘（男）が二五〇戒、比丘尼（女）が三四八戒。
- ⑦鵬次…僧侶としての経験年数による序列。

【私訳】

思うに、真言宗の年分度者はすべて、最初に考えたように、東寺において試験を受け得度すべきである。しかし高野山を荒廢させてはならないという願いから、改めて奏上し、年分度者の官符を金剛峯寺に申し下していただくようお願いしたのである。だが、強いて東寺を嫌い高野山を汲み上げるといものではない。今、よくよく東寺の座主大阿闍梨耶が寺務を執り行つてこれを改め直してくれるよう願っている。また、諸々の定額僧に承仕するすぐれた童子たちを選定し、決つて高野山で試験と得度を行い、さらに東大寺の戒壇で具足戒を受戒させよ。受戒のあとまた高野山で三年間修行し、そのあと各々の師に随つて密教を受學させなさい。具体的には先の文に在る。ただし、座主大阿闍梨とは東寺の大別當の尊名である。真言宗の門弟で密法を修學して最初に成就し、長者となつた人を言うのである。僧侶としての経験年数による序列に従ふ必要はない。密法を修學し誰にも先んじて最初に成就した者を長者とするだけである。

一、可報進後生末世弟子祖師恩緣起 第十七

後生末世の弟子、祖師の恩に報進すべき緣起 第十七

【原文】

夫以東寺座主大阿闍梨耶者吾末世後生弟子也。吾滅度以後弟子數千萬之間長者也。雖門徒數千萬。併吾後生弟子也。雖不見祖師吾頗有心之者。必聞吾名號知恩德之由。是吾非欲白屍之上更人之勞。護繼蜜教壽命可令開龍三華庭謀也。吾閉眼之後必方往生兜率他天可侍彌勒慈尊御前。五十六億餘之後必慈尊御共下生祇候可問吾先跡。亦且未下之間見微雲官可察信否。是時有勤得祐不信之者不幸。努力努力勿爲後疎。亦案僧尼令曰。非有甚琴制限者。然而竊案蜜教心此家可令無此事。所以然者若有未練僧并童子等被放此遊必有後代過。何況圍碁雙六一切亭止。若強好此事者都吾非末世資。不論刹利種性蔭子蔭孫併悉追放。一切勿得寬宥云云。

【書き下し】

夫れ以るに、東寺の座主大阿闍梨耶は、吾が末世後生の弟子なり。吾が滅度以後、弟子數千萬の間の長者なり。門徒數千萬と雖も、併し吾が後生の弟子なり。祖師の吾が顔を見ずと雖も心有るの者は、必ず吾が名號を聞き恩徳の由を知れ。是れ吾が白屍はくしの上に更に人の勞ねがらいを欲するに非ず。蜜教の壽命を護り繼ぎ、龍三華庭りゅうさんげていを開かしめるべき謀なり。吾が閉眼の

後、必ず方に兜率他天に往生し、彌勒慈尊の御前に侍るべし。五十六億餘の後、必ず慈尊と御共に下生し祇候しこして吾が先跡を問うべし。亦た且つは未だ下らざる間、微雲官びうんかんを見て信否を察すべし。是の時、勤有るは祐を得、信ぜざれば不幸なり。

努力せよ、努力せよ、後に疎に爲ること勿れ。亦た僧尼令そうにれいを案じて曰わく。「碁・琴は制限すること有らず」と。然れど

も竊ひそかに蜜教の心を案ずるに、此の家に此の事を無からしむるべし。然る所以は、若し未練の僧并びに童子等有つて此の遊あそびに放たるれば、必ず後代に過ち有らん。何ぞ況んや圍碁すしご・雙六すしごくを一切亭止するにおいておや。若し強いて此の事を好めば、

都て吾が末世の資に非ず。刹利種性せつりしゅじょう・蔭子蔭孫おんしおんそんを論ぜず、併し悉く追放せよ。一切寛宥かんゆうを得ること勿れ、云云。

【註記】

①白屍はくし・白骨。

②龍三華庭りゆうさんげだう・釈迦滅後五十六億七千万年のうちに、弥勒菩薩が龍華樹の下で三回說法するという伝承。龍華樹は高さ・広さともに四十里、枝には龍が百宝を吐き出すように、百宝の花（龍華）が咲くという。

③祇候ぎこう・伺候。ここは弥勒菩薩に仕えて、の意。

④先跡せんせき・かつて自分が活動した場所。高野山・東寺・高雄山寺・東大寺・大安寺・興福寺・神泉苑・綜芸種智院・吉野・室戸・槇尾山寺・大宰府觀世音寺・満濃池・青龍寺・西明寺・醴泉寺等々。

⑤微雲官ゐいんくわん・管のような雲のすき間。

⑥信否しんひ・信じられているか否か。

⑦勤しん・密法の励み。

⑧祐ゆう・助け。

⑨僧尼令そうにれい・僧尼に関する行政的な法令。

⑩雙六すしごく・すごろく。

⑪刹利種性せつりしゅじょう・ヒンドウのカースト。クシャトリヤ。王族。

⑫蔭子蔭孫おんしおんそん・朝廷高官の子や孫。

⑬寛宥かんゆう・寛容に許す。

## 【私訳】

思うに、東寺の座主大阿闍梨耶は、私の晩年や入滅後の弟子である。私が入滅したあと、数千万いる弟子のなかの長者である。門衛が数千万いると言っても、私が入滅したあとの弟子である。祖師である私の顔を見なくても心ある者は、必ず私の名號を聞いて恩徳の由来を知るように。これは、私の白い屍の上に（死んだあとまで）、なお人のねぎらいを欲しがっているのではない。密教の寿命を護り継ぎ、弥勒菩薩が龍華樹の下で三回の説法を行うことができるよう考えをめぐらせたのである。私は、入滅ののち必ず兜率他に往生し、弥勒菩薩の御前に詣でて仕える決心でいる。そして、五十六億七千万年ののち、必ず弥勒菩薩にお供をして下生し、そば近くに仕えて自分がかつて活動した跡がどうなっているかこの目で確かめようと決めている。また、まだ下生しない間は、雲間の管のようなすき間から見、密教が信じられているかどうか観察することも決めている。その時、密教が励まれていけば助けがあり、信じられていなければ不幸なことである。努力せよ、努力せよ、後世に密法を疎かにしてはならない。

また、僧尼令を思案して言うのだが、僧尼令に「碁やお琴は制限する必要はない」とあるが、内々に密教の精神を考えてみれば、真言宗にこういうことは無いことにしなければならない。理由は、もし修行の練磨が未熟の僧や童子たちがこの遊興を放任されれば、必ず後々に過ちが起きよう。ましてやなせ、囲碁やすごろくをすべて禁止できないわけがあるうか。もし、敢えて言うが、遊興を好む者はすべて私の後世の弟子ではない。王族や朝廷高官の子孫かどうかを論ずることなく、皆追放しなさい。一切大目にみてはならない、二五云。

## 【付記】空海の弥勒信仰

空海が弥勒信仰に崇敬の念をもっていたことは、二十四才の時に書いた『禪誓指歸』（『二教指歸』）に明らかである。そのことは遺誡第一の【付記】に前述した。空海は、奈良の都に上京してまもなく、大安寺や元興寺や興福寺や東大寺で、この南都仏教における弥勒信仰を知ったであろう。勤操などから、大安寺が長安の西明寺を模したものであり、西明寺はインドの祇園精舎に倣ったものであり、その祇園精舎は弥勒菩薩のおわす兜率天の内院をこの世に再現したものだということも教えられていたに相違ない。その大安寺と西明寺で空海は学んだ。さらに、空海の弥勒信仰の傍証には、

1、高野山造営中の空海を見舞って讃岐から出て来た母のために、高野山麓の九度山に建てた寺に弥勒菩薩の尊像を自ら謹刻し、寺の名を慈尊院とした。

2、(実在の人物とされる) 弥勒(マイトレイヤ)を始祖とする法相の学を重んじ、門弟には三論とともに兼学することを遺誡した。

3、豊前の「秦王国」の時代から、英彦山などの弥勒信仰をもつ渡来系氏族の秦氏との親しい関係もある。何が決定的なのか定かではないが、大安寺Ⅱ兜率天の内院を有力に思いつつ、私は秦氏もたらした弥勒信仰に注目する。

ミルチア・エリアーデの言葉を借りるまでもなく、古代のシャーマンが鍛冶師と一体であることは多くの専門家が指摘しているところである。日本の「巫」の周辺では、氏神の祭祀とともに鉦山・採鉦・精錬・合金・メッキ・薬品精製・医術といったサイエンスやテクノロジが発達していた。「秦王国」豊前には、秦氏の宗教とも言うべき古代シャーマニズムと道教と仏教が混濁したハイブリッドな常世信仰があり、豊国奇巫(とよくにのくしかむなぎ)や豊国法師といったシャーマンが活躍していた。『日本書紀』の用明天皇二年四月二日の条には、用明天皇の病氣に際し、皇弟皇子がこの豊国法師を呼んで内裏に入れたところ、物部守屋大連が反対して怒ったことが書かれている。

わが国への仏教公伝は、宣化天皇三年(五三八)と欽明天皇十三年(五五二)の二説あるが、崇仏派天皇だった用明天皇が三宝(仏・法・僧)への帰依を表明しつつも、周囲の薦めで秦氏系の法師が内裏に招き入れられた記述から、百済系の仏教を容認したヤマト王権(蘇我氏、用明・聖徳太子)がシャーマンのもつ病魔除け呪術や医薬品の効能に期待し、豊前の高度な文化や医術の情報をすでにキャッチしていたことが読みとれる。

その「秦王国」には、常世信仰や山岳信仰や弥勒信仰を含む新羅系の仏教が伝わっていた。新羅には古くから熊野信仰につながる擬死再生の常世信仰があった。太子や花郎(ふあらん)と呼ばれる山岳修行者は神が降臨した依り代とみなされ、鉦脈を探索するために山に入り、洞窟などに籠って斎戒修行を行った。そこに仏教の弥勒下生信仰が重なり、彼らに弥勒菩薩が降臨(憑依)することから、彼らは弥勒の化身だと言われるようになった。豊前には英彦山という日本の代表的な修験の霊山がある。この英彦山には、兜率天の内院の四十九院に擬した四十九窟がある。その英彦山と、英彦山で修行し「法医」とまでいわれた法蓮という僧(辛嶋氏系宇佐氏の氏寺・虚空蔵寺の座主や宇佐八幡宮の神宮寺・弥勒寺の別当)と、宇佐八幡宮の八幡大菩薩にかかわる弥勒信仰の伝承には、秦氏もたらした新羅の仏教が大きく影を落としていた。この秦氏の弥勒信仰はやがて、秦氏が本拠地とした山背秦に秦河勝(はたのかわかつ)が建てた蜂岡寺(後の広隆寺)

の本尊弥勒半跏思惟像や、聖徳太子の伝建立七寺の本尊弥勒半跏思惟像や、平城京の官大寺に流行した弥勒信仰や、空海の弥勒信仰にも大きな影響を及ぼした。

一、不可入東寺僧房女人縁起 第十八

東寺の僧房に女人を入れるべからざる縁起 第十八

【原文】

夫以女人是萬性本弘氏繼門者也。然而於佛弟子親厚諸惡根源嗾嗾本也。是以六波羅蜜經曰。不可女人親近。若猶親近善法皆盡等云云然則不可入居僧房內。若有要言諸家使至者。立外戸速返報却之。不得迴時剋。具准青龍寺例云云。

【書き下し】

夫れ以るに、女人は是れ萬性ばんしやうの本、氏を弘め門を繼ぐ者なり。然れども佛弟子に於いて親厚すれば諸惡の根源、嗾嗾ごうごうの本なり。是れを以て六波羅蜜經に曰わく。女人に親しく近づくべからず。若し猶お親しく近づけば善法ぜんぽう皆盡く等、云云。然れば則ち、僧房の内に入居すべからず。若し要言有つて諸家の使い至らば、外戸に立てて速かに返報しこれを却しりぞけよ。時剋を迴すことを得ざれ。具に青龍寺の例に准ずるなり、云云。

【註記】

- ①嗾嗾：不満・やかましい非難・かまびすしい批判。
- ②六波羅蜜經：般若三藏訳『大乘理趣六波羅蜜經』。

【私訳】

思うに、女性は万民の本であり、氏族を広くし家門を継いでいく者である。しかし仏弟子の世界においては女性と親しくなり厚く接すれば諸悪の根源となり、非難の元となる。であるから『六波羅蜜經』に曰うには「女性に親しく近づいてはならない、なお親しく近づけば善法は皆尽きてしまう」と、云云。すなわち（男だけの）僧房の中に入居させてはならない。もし必要な用言があつて他宗のお使いがきたら、外の戸のところ立たせて速かに返事をしてさっさと帰しなさい。時間をかけてはならない。具には青龍寺の例に准ずることである、云云。

一、不可飲僧房内酒縁起 第十九

僧房内で酒を飲むべからざる縁起 第十九

【原文】

夫以酒是治病珍風除之寶矣。然而於佛家爲大過者也。是以長阿含經曰。飲酒有六種過等云云。智度論曰。有四十五種過等云云。亦梵網經所說甚深也。何況祕密門徒可酒愛用哉。依之所制也。但青龍寺大師與并御相弟子内供奉十禪師順曉阿闍梨共語擬曰。依大乘開文之法治病之人許鹽酒。依之亦圓坐之次呼平不得數用。若有必用從外入不瓶之器來副茶祕用云云。

【書き下し】

夫れ以るに、酒は是れ治病の珍、風除の寶なり。然れども、佛家に於いては大過と爲るものなり。是れを以て長阿含經に

曰わく。「飲酒に六種の過等有り」と、云云。智度論に曰わく。「四十五種の過等有り」と、云云。亦た梵網經の所説は

甚深なり。何ぞ況んや祕密の門徒、酒を愛用すべけんや。これに依つて制する所なり。但し、青龍寺大師と並びに御相の

弟子、内供奉十禪師、順曉阿闍梨と共に語り擬して曰わく。「大乘開文の法に依つて、治病の人に鹽酒を許す。これに依

つて亦た、圓坐の次いでに平を呼んで敷用するを得ざれ。若し必用有らば外従り入瓶ならざるの器に入れ來り、茶に副えて祕用せよ、云云。

【註記】

- ①長阿含經…仏典で最も古い内容、すなわち釈尊の言葉や伝記などが書かれた三十卷からなる原始經典。ディーガニカーヤ。
- ②智度論…龍樹による『大品般若』（『二万五千頌般若經』）の注釈書『大智度論』。
- ③梵網經…『梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品第十』。上下二卷。上卷は四十種の菩薩の位を、下卷は十重禁戒と四十八輕戒を説く。通称菩薩戒という。天台智顛に『菩薩戒義疏』、法藏に『梵網經菩薩戒本疏』、空海に『梵網經開題』がある。
- ④大乘開文の法…大乘が經文を開いて説く仏法。慈悲利他の教え。
- ⑤鹽酒…塩酒。

【私訳】

思うに、酒は病氣を治す珍しい効能があり、風邪除化の宝である。しかし、出家僧の場合は大きな過ちとなりかねない。だから『長阿含經』には「飲酒には六種類の過ちがある」と言い、『大智度論』には「四十五種の過ちがある」と言い、また『梵網經』の説く所には深い意味がある。ましてや、どうして真言宗の門弟が酒を愛用すべきか。以上のことで禁止しているのである。ただし、青龍寺の大師とその同輩の弟子である、内供奉十禪師の、順曉阿闍梨とが、共に語りそれになぞって言うには「大乘が經文を開いて説く慈悲利他の教えによつて、病氣治療中の人に塩酒を許可することがあるが、これをいいことに、車座になり、そのついでに勧め合つて何度も酒を飲むことがあつてはならない。もしどうしても用があれば、寺の外から酒瓶ではない器に入れて來て、お茶に副えて内緒で用いなさい、云云。

一、可令神護寺家宗門徒長者大阿闍梨口入縁起 第二十

神護寺をして家宗の門徒長者大阿闍梨に口入せしむべき縁起 第二十

【原文】

夫以神護寺是和氣氏建立。八幡大菩薩主吒庭也。而依眞繩大夫達所言。余頃年修住。爰眞繩大夫達於建立蜜教之言朝夕宛如示護法之相。因茲師檀之期篤在肝岫加以寺院付屬永代敢無内外之汚。然而後代必有爭噉。吾資末羽等隨狀進退而已。得一知萬。云云。

【書き下し】

夫れ以るに、神護寺は是れ和氣氏の建立なり。八幡大菩薩の主吒しゆたの庭なり。而して眞繩まつな大夫達の所言に依り、余頃年きやうねん修住す。爰に眞繩大夫達、蜜教を建立する言に於いて朝夕宛あとかも護法の相を示すが如し。因つて茲に、師檀の期篤く肝岫かんしゆに在り。加しかのみならず以、寺院を永代に付屬し、敢えて内外の汚無し。然れども、後代必ず争噉そんごう有り。吾が資末羽等、狀に隨つて進退するのみ。一を得て萬を知れ、云云。

【註記】

- ①口入…口入れ、仲介、斡旋、世話。
- ②和氣氏…平安時代の朝廷高官に氏族。
- ③八幡大菩薩…宇佐八幡などの八幡神が仏身（菩薩）になったもの。
- ④主吒…託宣。
- ⑤眞繩大夫…和氣眞綱。和氣清麻呂の五男。
- ⑥頃年…数年。
- ⑦師檀…依るべき師と檀越。
- ⑧期…ちぎり、期する所。
- ⑨肝岫…誠意。

⑩争嗽…やかましい非難。

【私訳】

思うに、神護寺は和氣氏が建立した氏寺である。八幡大菩薩の託宣によって創建された寺である。然るに私は、和氣真綱大夫らの言う所に従い、数年住して密法を行じた。そこに、真綱大夫らが密教道場を建立すると言いはじめ、朝夕密法を護持する姿勢を示すかのようであった。よつてそこで、依るべき師と檀越の互いに期する所篤く誠意があった。そればかりでなく、神護寺を永久に密教に付屬して、内外の汚がなくなつた。しかし、後代には必ず争いごとや非難があるだろう。わが弟子たちよ、この遺告に従つて進むも退くも判断しなさい。一事を得て万事を知りなさい、二云。

【付記】 帰国して二年余、ようやく高雄山寺（神護寺）に入る

大同四年（八〇九）の春頃であつたらう、和泉国司に対し「空海を京に住まわしめよ」との太政官符が下る。同年（八〇九）七月、空海は満を持して京の高雄山寺に入った。高雄山寺は和氣氏の私寺であつた。和氣氏は、清麻呂が最澄の外護者となつて以来、次代の広世もこの寺を最澄に任せ、伯母の広虫（清麻呂の姉、出家名「法均」）の追善法会も最澄に頼んで行つたくらいであつた。空海はその山に迎えられたのである。最澄は自分の立場の微妙な変化を察知して、進んで空海に住持の座を譲つたのであろう。この人事を根回したのは、おそらく勤操や東大寺をはじめとする南都仏教勢力の宿老たちであつた。和氣氏の私寺の住職人事であるにもかかわらず、そのレベルを越え国家仏教の宿老たちが介入したに相違ない。

和氣氏は当時、平安京の朝廷内でも権勢を誇れる立場にあつた。清麻呂は孝謙天皇時代の道鏡事件で一度流罪になつたが孝謙の没後復権し桓武の信認をえた。清麻呂は日頃から、南都仏教勢力の政治介入に手を焼いていた桓武に遷都を奏上し、平安京の造営にあつては大夫の重責を担つた。南都仏教勢力とその背後にいる藤原氏一門にとつて、清麻呂は不愉快極まりないはずの人物であつた。最澄への不満もこの辺からきていたかもしれない。和氣氏は、広世が亡くなり、その弟の五男真綱や六男仲世の時代になつていた。司馬遼太郎は奈良の宿老たちが真綱に空海の高雄山寺晋住を談判したというが、事はそんな単純ではなかつたであらう。

私の推測では、たぶん勤操が空海をよく知る藤原葛野麻呂を動かした。葛野麻呂は藤原氏の一門で、清麻呂の娘（真綱・仲世の姉）を妻にしていた。この時期中納言になり、正三位にも上り、天皇の近臣の地位にあった。空海が密教の伝法第八祖となつて短時日で帰国したことに驚きつつも、無事に帰つたことを誰よりも喜んだのは彼であった。唐土福州に上陸する際彼の窮地を救つたのは空海であった。彼は、義弟たちに空海の文章と唐語の異能を熱く語つて聞かせ、最澄に代つて高雄山寺に迎えるべきであり、空海を外護することで南都の旧勢力とも融和できるであろうことを説いたと思われる。

最澄はこの事態を甘受した。高階判官の手を経て空海が朝廷に提出した「請来目録」を一覧し、空海が唐から持ち帰つた密教の経軌・論疏章・真言讚・曼荼羅・法具・絵像等のただならぬ質量に最もおどろき、かつショックを受けたのは密教受法の経験をもつ最澄であつた。最澄は空海と同じ第十六次遣唐使船で唐に渡り、天台山での修学の帰途たまたま紹興の峰山道場で龍興寺の順晷に密教を学んだ。最澄が提出した「将来目録」のなかに密教があることを大いによるこんだ桓武に命じられるまま、延暦二十四年（八〇五）九月、最澄はこの高雄山寺で国家的行事として日本最初の灌頂を行つたものの、自分の密教が正統密教なのか否か不安をおぼえるなか、空海の「請来目録」を見て、さらに空海が正統密教の第八祖となつて帰つてきたことを聞き、自分の密教と高雄山寺での国家灌頂の不備をすぐに察した。最澄は、自分の未学未修の部分率直に認め、下臈である空海に対して慇懃な態度で臨むほどに生真面目な仁者であつた。高雄山寺をさつさと明け渡したのはおそらく空海の密教の本物さを一番よくわかつたからであり、自分の密教の不備を正すのに格好の依止師が現れたとして、むしろ歓迎をすべきと判断したからであろう。事実、最澄は高雄山寺に空海が入るのを待ちかねていたように、翌八月にはもう密教經典十二部五十五巻の借覧を申し出ている。さらに弘仁三年（八一二）十月、最澄は直々に乙訓寺の空海を訪ね、金胎両部の灌頂受法を願ひ出る。有名な高雄灌頂は、十一月十五日に金剛界が行われ、最澄と和氣真綱・仲世の三人が入壇を許され、翌十二月十四日に胎藏界が行われ、その時に空海が記録したといわれる『灌頂曆名』には、延暦寺ではなく興福寺僧として最澄の名が見える。最澄とともに参加した泰範は元興寺僧として受法している。ただこの時の灌頂は「受明灌頂」という密教入門者のための略式の灌頂であり、正式な密教伝法のための「伝法灌頂」ではなかつた。空海は長安の青龍寺で恵果和尚が自分にくれた通りの手順に従つたまでであつた。最澄はおそらく灌頂というものをよく知らなかつたのではないか。終つてから、受法した灌頂が自分が望んだ阿闍梨位をえるための灌頂ではなかつたことを知り、途方にくれて「私が正式な（伝法）灌頂を受けられるのは幾月かかるのでしょうか」と空海に聞く

と、空海は「三年かかります」と答えたという。この時の受法者は皆、密教修行を経験していない僧俗、しかも仏道に入

門したばかりの童子が多数加わっていたことから正式な「伝法灌頂」ではなかったことは明らかである。「伝法灌頂」は、一定の密教修行を成満した者でなければ許されない。空海の当時は修行の成満以外にも密教の根柢に富むことが条件であったことも考えられ、安易に受法がかなうものではない。空海の帰国、そして高雄山寺入りは最澄の身と仏教にも大きな影響を与えたのである。

空海の聖跡として重要な位置にある高雄山寺（現在、神護寺）ではあるが、本堂内に展示されている『灌頂曆名』（写し）や境内伽藍の隅にある往時空海の住房であった大師堂など、空海の事蹟として重要なものに関心を寄せる観光客は皆無に等しい。この寺が日本密教発祥の地であることを改めて銘記しておきたい。高雄山の一带は「三尾めぐり」といわれる京の紅葉の名所で毎年十一月下旬の紅葉の時期になると観光客でにぎわう。となりが横尾山西明寺、その奥に梅尾山高山寺がある。その高山寺を再興した明恵上人（高弁）は、奈良東大寺において華嚴宗を学んだほかに仁和寺で真言密教も修学し、鎌倉時代初期の顕密諸宗の復興につとめながら念仏の流行に対抗した。また建仁寺において臨濟禪も修め、四十年にも及ぶ観行中の夢想をつづつた『夢記』ほかを著している。

## 一、輒不可授傳法灌頂阿闍梨職位并兩部大法縁起 第二十一

輒たやすく傳法灌頂の阿闍梨の職位并びに兩部の大法を授くべからざる縁起 第二十一

### 【原文】

夫以蜜教是大日如來心肝金剛薩埵腦膽者也。而輒授非器之者從蜜教主御身有出之罪。是以昔大日尊勅金剛薩埵曰。不可授非器之者。若授非器之者蜜教不久。從法身出血罪自然可生者。又金剛薩埵宣龍猛菩薩。伏以大日如來爲一切衆生說蜜教也。無非蒙萬生利益。但此法者是如意寶珠。喻如意寶珠在名號聞不顯實身。然而出生萬寶利益一切衆生。存龍宮祕藏居龍王肝輒不顯身。雖居祕藏并龍肝。此玉不被攝龍王衆。是法亦亦如此。所以者何。雖存蜜法阿闍梨之心肝并經藏。不被任阿闍梨之心府。雖有名號聞不顯實身。唯以威光利益一切衆生。蜜教最貴最尊道理唯是然也。是故阿闍梨耶我能欲知道任己私劣

心不可授非器之者。若有頗證器之者唯授尊法看定彼心器然後授金剛界大法一部。然授猶未練根之者必後可有悔。何況輒授兩部大法哉。但欲授兩部大法。顯見定人器氣色之後。向本尊界會能祈願夢見厥想。若有感應彼欲學者三箇月令修行精進然後可授兩部大法。但於傳法灌頂阿闍梨職位專然不應授諾。

所以者何。授非器之者金剛薩埵與蜜迹神俱加呵嘖。授證器之者作大歡喜。是則令法久住緣也。護惜傳法灌頂位阿闍梨職應護惜已肝神。輒不應令知傳法印契蜜語。若有精進者望仰。唯大阿闍梨以語言呼許諾言。以五智五股加持仰人之首三般散瓶水。是亦看定證器之人應令如然。啻以是人於修法處應充用諸護摩雜道。亦以尊法可許授弟子於一部。兩部更不可令傳教以傳教言可惜傳法於傳法印契蜜語爲能學者可傳授練根已熟弟子。猶未熟根更不可授。須大阿闍梨耶求得世間人之赤子以方便言令出離世俗。語量彼操意令出家人道得度受具足戒。滿生年五十以後授傳法灌頂阿闍梨耶職位可令繼蜜教種性。哀哉嘆哉此道欲不傳者應斷法種。傳授之時宛如令持若赤子兩舌劍。宜知是心應授阿闍梨職位。不忍非器之人甘語言諾授是位。彼此會坐相更披露蜜教肝印。正教非嚴滅法之相自然將至。是罪所可得傳法阿闍梨也。十佛大日御前百千劫懺悔都不滅除。是以入室有勞。弟子於非器之者更不可授是位者云云。是章句在梵本。從經文并儀軌之外取離出所蜜納也。吾三衣箱底納置。亦在精進峯。入室弟子沙門土心水師所云云。

【書き下し】

夫れ以れば、蜜教は是れ大日如來の心肝しんかん、金剛薩埵の腦膽のうたんのものなり。而るに、輒く器に非ざる者に授ければ、蜜教主の御身従り出（血）の罪有り。是れを以て、昔、大日尊が金剛薩埵に勅して曰わく。「器に非ざるの者に授けるべからず。若し器に非ざるの者に授ければ蜜教久しからず。法身従り出血するの罪、自然に生ずべきものなり」と。又、金剛薩埵が龍猛菩薩に宣ふるに「伏して以るに、大日如來は一切衆生の爲に蜜教を説くなり。萬生利益を蒙らざることなし。但し、此の法は是れ如意寶珠の如し。如意寶珠に喩つるは、名號聞くことなれども實の身を顯さず。然れども萬寶を出生して一切の衆生を利益す。龍宮の祕藏に存し、龍王の肝に居すれども輒く身を顯さず。祕藏並びに龍肝に居すと雖も、此の玉龍王の衆に攝せられず。是の法亦た亦た此の如し。所以は如何。蜜法は阿闍梨の心肝並びに經藏に存すと雖も、阿闍梨の心府に任せられず。名號を聞くこと有りと雖も、實の身を顯わさず。唯だ威光を以て一切衆生を利益す」と。

蜜教の最貴にして最尊の道理は唯だ是れ然りなり。是の故に阿闍梨耶、我れ能く道を知ると欲い、己を私の劣心に任せ、器にあらざるの者に授くべからず。若し頗る器たるを證するの者有らば、唯だ尊法を授け、彼の心器を看定めて然る後、金剛界の大法の一部を授けよ。然れども、なお未練根の者に授ければ必ず後に悔い有るべし。何ぞ況んや輒く兩部の大法を授けんや。但し、兩部の大法を授けんと欲すれば、顯かに人器氣色を見定めたるの後。本尊界會に向い能く祈願し夢に厥の想を見よ。若し感應有つて彼學ぶことを欲せば、三箇月修行し精進せしめて然る後兩部の大法を授けるべし。但し傳法灌頂の阿闍梨の職位に於いては、專然して應に授け諾うべからず。

所以は如何。器に非ざるの者に授ければ、金剛薩埵と蜜迹神は俱に呵嘖を加う。器たるを證するの者に授ければ、大歡喜を作す。是れ則ち令法久住の縁なり。傳法灌頂の位の阿闍梨職を護り惜しむこと、應に己の肝神を護り惜しむが如くすべし。輒く應に傳法の印契・蜜語を知らしむべからず。若し、精進の者有つて望仰すれば、唯だ大阿闍梨、語言を以て許諾の言を呼び、五智の五股を以て仰人の首を加持すること三般、瓶水を散ぜよ。是れ亦た器たるを證するの人を看定め、應に然かの如くならしむべし。音ただに是の人を以て修法處に於いて應に諸々の護摩の雜道に充用すべし。亦た尊法を以て弟子に一部に於いて授けるを許すべし。兩部は更に傳教せしむべからず。傳教の言を以て傳法を惜しむべし傳法の印契・蜜語に於いては、能く學す者の爲に練根の已に熟せる弟子に傳授すべし。なお未だ熟根せざるに更に授けるべからず。須く大阿闍梨耶、世間の人の赤子せきしを求め得て、方便の言を以て世俗を出離せしむ。語つて彼の操意を量り、出家人道し得度して具足戒を受けしめよ。生年五十に満ちて以後、傳法灌頂の阿闍梨耶職の位を授け、蜜教の種性を繼がしむべし。哀れなる哉、嘆かわしき哉。此の道傳えざるを欲せば、應に法種を斷つべし。傳授の時は宛あたかも若い赤子に兩舌の劍を持たしめるが如し。宜しく是の心を知つて應に阿闍梨職の位を授くべし。器に非ざるの人の甘語言に忍えず、諾して是の位を授ければ、彼此會坐して

相更に蜜教の肝印を披露せん。正教は厳しきに非ず、滅法の相は自然に將に至る。是の罪傳法の阿闍梨の得べき所なり。十  
佛大日の御前にて百千劫に懺悔するも都て滅除せず。是れを以て、入室有勞の弟子、器に非ざるの者に於いては、更にはの  
位を授くべからざるものなり、云云。是の章句は梵本ほんほんに在り。經文並びに儀軌の外従り取り離し出して、蜜かに納むる所  
なり。吾が三衣さんねの箱底に納め置くなり。亦た精進峯の入室の弟子、沙門土心水師の所に在り、云云。

【註記】

- ①心肝…心の内、心底。
- ②腦膽…肝心なもの、精神。
- ③蜜教主…大日如来。
- ④如意寶珠…チンターマニ。意のままに宝を出す玉。
- ⑤尊法…一尊法。
- ⑥金剛界の大法…金剛界念誦法
- ⑦両部の大法…金剛界念誦法と胎藏界念誦法。
- ⑧感應…大日如来の感応。
- ⑨蜜迹神…蜜迹金剛神。執金剛神。金剛力士。
- ⑩肝神…肝心。
- ⑪印契・蜜語…印相（ムドラー）・真言。
- ⑫瓶水…五智の瓶水。
- ⑬赤子…幼児。
- ⑭十佛…十智。世俗智・法智・類智・苦智・集智・滅智・道智・尽智・無生智・他心智。
- ⑮梵本…サンスクリット原本。
- ⑯三衣…三種の袈裟。大衣・七条・五条。

①⑦精進峯・室生山の精進カ峯。室生山は、今の奈良県宇陀郡から三重県名張市・一志郡に連なる火山群。精進カ峯は室生寺の堅慧(恵)が修行したという峰。

①⑧土心水師・室生山精進カ峯(室生寺)の堅慧(恵)法師。天台の学僧であるが、空海の弟子とも言われている。土心水師は、「土」が「堅」の部首、「心」が「恵」の部首、「水」が「法」の部首。「ササ」を「菩薩」、「報恩」院流を「幸心」流とするのと同じ隠語法。

### 【私訳】

思うに、密教は大日如來の心の内、金剛薩埵の精神である。然るに安意にその器ではない者に授ければ、大日如來の身体(法身)から出血させる罪があり、それ故に昔、大日如來が金剛薩埵に命じて言った。「器ではない者に密法を授けてはいけない。もし器ではない者に授ければ密法は永く続かない。法身から出血する罪は自ずと生じることになる」と。又、金剛薩埵が龍猛菩薩に言うに「平身して考えるに、大日如來は一切の衆生のために密教を説くのである。生きとし生けるものはその利益に浴さないことがない。ただし、この密法は如意寶珠と同じである。如意寶珠に喩えるのは、大日如來の名号を聞くことはあっても、實際その身を顯わさない。しかしいろいろたくさんの宝を生み出し、一切の衆生を利益するのである。(この宝珠は)龍宮の秘密の蔵にあり、龍王の肝のなかに居るのだが、簡単には姿を現さず、秘密の蔵や龍王の肝に居るといっても、この玉は龍王たいでも手に取ることができない。この密法もまたこれと同じである。どうしてかと言えば、密法は阿闍梨の心の内や経蔵のなかにあるとしても、阿闍梨の意のままにはならない。その名号を聞くことはあっても、實際の姿を顯わさない。ただ威光によって一切の衆生を利益するのである」と。

密教の最も貴く最も尊い道理はこれである。であるから阿闍梨耶よ、自分はよく密法を知っていると思ひ込み、劣っている自分の私心に任せて、器ではない者に密法を授けてはならない。もしすこぶるすぐれた器の者がいた場合は、ただ一尊法を授け、まず彼の心の器を見定め、その後金剛界の大法の一部を授けなさい。しかし、まだ密法が練磨できていない者に授けると必ず後になって後悔することがある。ましてや、安意に兩部の大法を授けることがあるか。ただ、兩部の大法を授ける場合は、顯かに受者の機根や人間性を見定めた後、本尊界會の諸尊によく祈願し、夢のなかでそのお姿を拝見しなさい。もしご本尊と感応することがあり、彼の學ぶことをご本尊に願えれば、まず三カ月間修行に精進させ、その後兩部の大法を授けるのがよからう。ただ、傳法灌頂の阿闍梨位にある者においては、やすやすと伝授に応じてはなら

ない。なぜかと言えば、器ではない者に授ければ、金剛薩埵と密迹金剛神が叱責するし、すぐれた器の者に授ける場合は、大いに歡喜するからである。

これはすなわち、令法久住の条件である。傳法灌頂の位の阿闍梨職を護り大切にすることは、自分の肝心を護り大切にすると同じく心得なさい。だから、たやすく印契や真言を他人に教えてはならない。もし、密法に精進して伝授を心から希望する場合は、大阿闍梨は言葉で許諾し、五智の五股で伝法を希望する人の首を三度加持し、五智の瓶水を頭頂に注ぐがよい。この場合もまた、すぐれた器かどうかを見定めてからにすべきである。ただこういう人は、修法処においては、諸々の護摩の雜用係に充てるとよい。またこういう弟子には一尊法を一部授けてもよい。兩部の大法はまだ伝授してはならない。(傳教の言を以て傳法を惜しむべし) 印契や真言は、よく学修する者のために、機根の練磨に習熟した弟子に伝授するがよい。なおまた習熟根していない者にはまだ授けてはならない。大阿闍梨耶よ、是非世間の人の幼兒を探し出して、わかりやすい言葉で説得し世間から離れ入寺させなさい。よく話し合つてその志操や意志を推し量り、出家・得度させて具足戒を受戒させなさい。そして五十才になつてから、傳法灌頂の阿闍梨耶職の位を授け、密法の法統を継がせなさい。哀れなことよ、嘆かわしいことよ。密法の法統を伝えないことを願えば、密法の種はなくなつてしまふ。

密法の伝授は、まるでまだ幼い幼兒に二枚舌の劍を持たせているのと同じで、そのような心を知つて、阿闍梨職の位を授けなければならぬ。阿闍梨耶の器ではない人の甘言に耐えられず、これを許して阿闍梨耶の位を授ければ、あれこれ法会に集つて坐りお互いに密法の肝心の密印を披露し合うだろう。正しい教えは厳しからず、法滅の様相が自然に頭われる。この罪は器でない者に密法を伝授した阿闍梨が負うべきである。十智を具足する大日如来の御前で百千劫に懺悔してもその罪過は滅することがない。であるから、入室して勞多き弟子でも、器ではない者には、なおこの阿闍梨位を授けてはならない、云云。この章句はサンスクリット原本にある。經文や儀軌から取り出して内緒で納めたものである。私の三衣箱の底に納め置いた。また、室生山の精進方峯の入室の(私の)弟子、沙門堅慧法師のところにある、云云。

## 一、金剛峯寺加東寺宗家大阿闍梨應眷務縁起 第二十二

金剛峯寺を東寺に加えて宗家大阿闍梨應に眷務すべき縁起 第二十二

【原文】

右件寺者は少僧私所建立也。然而進官爲御願庭者也。宜知是心。吾弟子等中先成立長者東寺座主大阿闍梨耶一向應管攝。莫遺告誤得一知萬云云。

【書き下し】

右の件の寺は、是れ少僧、私が建立する所なり。然れども進官して御願の庭と爲すものなり。宜しく是の心を知るべし。吾が弟子等の中に先んじて成立せし長者・東寺座主・大阿闍梨耶、一向に應に管攝かんしやうすべし。遺告誤ること莫れ。一を得て萬を知れ、云云。

【註記】

①眷務…眼をかけるて管理する。

②進官…上奏。

③管攝…管理・監督。

【私訳】

右の金剛峰寺は、私が建立したものである。しかし、朝廷に上奏して嵯峨天皇勅願の寺とした。是非ともこの趣旨をよく知っておいて欲しい。弟子等の中で一番先に密法を成就した長者で東寺座主の大阿闍梨耶が、ひとえに管理監督すべきである。この遺告を誤ってはならない。一事を得て万事を知れ、云云。

一、六 一山土心水師建立道場每朔可修避蛇法三箇日夜縁起 第二十二（此條不可令案内文書散 眼守猶護己如肝

一山の土心水師が建立の道場に、毎朔、ひじやほう避蛇法を三箇日夜、修すべき縁起 第二十三（此の條、文書に案内して散ぜしめるべからず。眼の守り、なお己を護ること肝の如し、二云云）

【原文】

夫以避蛇法呂者是凡非所傳。金人祕要阿闍梨心肝口決也。東寺代代大阿闍梨像彼修法。乍每後夜念誦畢爲護身而已。籠道肝於精進峯。亦本尊海會安彼岫也。是祕密呂不語者不知。念煩千迴也。不可令專猥聞。得一知萬云云。

【書き下し】

夫れ以るに、ひだ避蛇の法呂は是れ凡の所傳に非ず。金人の祕要、阿闍梨心肝の口決くけつなり。（具には別意在り）東寺代々の大阿闍梨は彼を像想して修法せよ。乍ち每後夜に念誦し畢つて護身を爲すのみ。道肝を精進カ峯に籠め、亦た本尊海會を彼の岫あなぐらに安んずるなり。是の祕密の呂、語らざれば知らず。念い煩うこと千迴なり。専ら猥りに聞かせめるべからず。一を得て萬を知るべし、二云云。

【註記】

①一山：室生山。前出。

②避蛇法：蛇を避ける修法。空海が師惠果和尚から授かった如意宝珠を室生寺の精進カ峯の東嶺に埋め、日本の国土に危難が及んだ時この宝珠を掘り出し、秘法の「避蛇法」を三日間修法すると危難は免れるとされた。「避蛇法」はまた「如意宝珠法」（空海が惠果和尚から付嘱され、堅慧（惠）法師に伝授した真多摩尼法）と言われ、その実際には諸説あるが、堅慧（惠）法師によれば、宝生如来あるいは金剛宝菩薩を本尊とする金剛界の供養法。

諸説のなかの一つに、例えば實運（一一〇五〜一一六〇）の『諸尊要抄』中の「後七日御修法」には「後七日御修法に二種の護摩壇有り。息災増益なり。息災は不動を本尊とし、増益は吉祥天を本尊とす、云々。師主の極深秘伝に云う。本尊は

如意宝珠の部主、宝生尊なり、云々。印言は、金剛界三昧耶印真言これを用う。(略)壇上本尊は一山これを勧請す。一体無二なり、云々とあり、「眞言院晦御念誦」には「宝生尊真言これを用う。増益護摩の如く云々本月一日これを修す・・・正月十四日夜。御薬加持香水作法・・・両手額を上げ、少し頭を下げ、目を閉じ、一山を想え」とあり、「五大虚空蔵」には「仁海僧正・・・壇中央に小塔を安置し、仏舍利五粒あるいは一粒を籠め奉つる。是れ即ち虚空蔵の三摩耶身は如意宝珠の故なり」という仁海(九五二〜一〇四六)の伝承による虚空蔵菩薩の三昧耶形即ち如意宝珠という説もある。

③口決：口伝。文字で伝えない秘訣。

④道肝：如意宝珠。

### 【私訳】

思うに、避蛇の秘法は凡庸な人が伝えたものではない。仏の秘奥であり、密教阿闍梨にとって肝心要の口伝秘訣である。(具には別意在り)東寺代々の大阿闍梨は彼(堅慧(恵)法師)を想定してこの法を修法しなさい。乍ち、毎後夜(深夜から夜明け)に避蛇法を念誦修法し終つて護身法を結びなさい。恵果和尚から授かつた如意宝珠を精進カ峯に埋め、また本尊海會の諸尊をあつ洞窟に安置しておいた。この秘法は話さなければ誰も知らない。この内緒ことは何度も何度も思いわずらつた。決つてみだりに他言してはならない。一事を得て万事を知りなさい、云云。

### 一、東寺座主大阿闍梨耶可護持如意寶珠縁起 第二十四 (此條章專不可令案文書散護守此法宛如傳法印契蜜語)

東寺の座主・大阿闍梨耶は如意寶珠を護持すべき縁起 第二十四 (此の條章は専ら文書に案じて散せしむべからず。此の法を護守すること宛も傳法の印契・蜜語の如し)

### 【原文】

夫以如意寶珠是從無始以來非有龍肝鳳腦等。自然道理如來分身者也。或偏鳳肝龍腦云云。是大虛言也。所以者何。自然道理如來分身。惟眞實如意寶珠也。號自然道理如來分身者是任祖師大阿闍梨口決成生玉也。蜜之上蜜深之上深者。輒不注儀軌。是大日如來所說也。曰成生玉是能作性玉也。須以九種物爲之。爾九種者。一佛舍利三十二粒。二未用他色沙金五十兩。

三紫檀十兩。四白檀十兩。五百心樹沈十兩。六桑木沈十兩。七桃木沈十兩。八大唐香木沈十兩（謂香木沈以專名香木沈。不簡彼色唯以清淨用之）。九漢桃木沈十兩也。是等之中沙金五十兩白銀五十兩以是合爲壺。安置彼三十二粒舍利。即便永閉壺口誦封堅結。以彼六種香木沈入未用他色鐵臼春之。以未用他色絹囊漏之七箇度。其糟亦同春未入同囊漏之。如是乍無妨物未用他色以真漆丸之。等分合成奉入彼佛舍利壺。方圓合丸高下等分。如此之間大阿闍梨立屏風率清淨細工入居屏風之內可合丸。彼細工之口含名香。專不雜語爲丸之。亦大阿闍梨耶者同口含名香。誦不動真言三百遍。次誦佛眼真言一千遍令爲丸。亦未用他色以香油炬五方明燈。但真言雖滿呪遍及于事畢猶員外可誦之。亦同門之間以智行僧十五口立替。乍以一番二時爲剋限。結三箇番不斷修法。此十五口僧者却屏風三丈許也。雖同門僧不令知事心。造玉既畢而始從事發七箇日夜之間不斷修法。此七箇日夜法前後可神供。然後以寶珠入檜深箱安置寶臺。其寶臺者作水壇。其中敷細絹可立臺。壇迴引五色糸。然後不求吉日更亦率五口智行僧親從大阿闍梨三時念誦。亦以五口僧內每時介子供。如是可滿百箇日夜。十日之間神供。又彼寶珠至于滿百箇日夜輒不可見大阿闍梨耶。何況他人可令見哉。滿百日。之後者以赤色九條衣可裹此玉。亦大阿闍梨誦再拜言。口曰再拜而實拜三般。即手取玉頂戴可月輪觀行。然後玉乍裹赤色袈裟大阿闍梨隨身每常歸命頂禮。出入前後左右可侍仰之。亦入室智行弟子不可令見知。假令雖見有箱不令見知寶珠所在。案道理意在大海底龍宮寶藏無數玉。然而如意寶珠爲皇帝。方同其實體自然道理釋迦分身也。以何知之。此玉從寶藏。通海龍王肝頸下。藏與頸不斷常住。或時出善風發雲於四洲令生長萬物利益一切衆生。水府陸地萬物誰不蒙利益哉。而世間凡夫等任己愚口稱如意玉涌寶。彼海底玉常此通能作性寶珠御許親近分德。所以可觀大阿闍梨曰歸命頂禮在大海龍王藏并肝頸如意寶珠權現大士等。三般誦之念觀可念誦本尊真言。凡却一切惡可爲攀善性之心。是法呂大毘盧遮那經文也。雖然蜜之上蜜深之上深者。闍留祕句唯爲阿闍梨心槩也。專不可令寫散。若是披露者蜜教不久。親弟子等之內彼心性不調者更不可令授知。代代座主阿闍梨耶。若自門弟子。若同門之內相弟子。并諸門徒衆等之中。能者看定。以怨親平等觀行。可令預護。若簡付法弟子等中者涉枝枝不留大阿闍梨耶手。移門門以被披露不信者。遂可爲淡道自然隱沒。因茲密教將滅。然則猶爲東寺座主長者之人必應付屬。彼擬付屬之日三箇日洗浴觀念兩部諸尊。亦觀驚普天之下率土之上冥官衆發起四無量觀付屬而已。雖慈父母勿令知之。如此祕密即是護三蜜教肝性也。但大唐大師阿闍梨耶所被付屬能作性如意寶珠載頂。渡大日本國勞籠名山勝地既畢。彼勝地者所謂精進峯土心水師修行之岫東嶺而已。努力努力勿令後人彼處。是以蜜教劫榮末徒博延。（復東寺大經藏佛舍利大阿闍梨須如守惜傳法印契蜜語。勿令一粒他散。是即如意寶珠。是即護道。以何言之。彼能作玉心本之故）

【書き下し】

夫れ以るに、如意寶珠は是れ無始従り以來、龍肝鳳腦等に有るに非ず。自然の道理にして如來の分身のものなり。或いは偏えに鳳肝龍腦、と云云。是れ大虚言なり。所以は如何。自然の道理にして如來の分身なり。惟れ眞實の如意寶珠なり。自然道理・如來分身と號するは、是れ祖師・大阿闍梨の口決に任せて成生する玉なり。蜜の上の蜜、深の上の深なる者なり。輒く儀軌に注せず。是れ大日如來の所説なり。成生の玉と曰うは是れ能作性の玉なり。須く九種物を以てこれを爲す。爾の九種とは、一に佛舍利三十二粒、二に未だ他に用いざる色の沙金五十兩、三に紫檀十兩、四に白檀十兩、五に百心樹の沈(香)十兩、六に桑木の沈(香)十兩、七に桃木の沈(香)十兩、八に大唐の香木の沈(香)十兩(香木の沈と謂うは以て専ら香木の沈と名づく。彼の色を簡ばず唯だ清淨を以てこれを用う)、九に漢の桃木の沈(香)十兩、是等の中に沙金五十兩・白銀五十兩、以て是れを合わせて壺と爲し、彼の三十二粒の舍利を安置し、即ち便ち永く壺の口を閉じ、誦して封じ堅く結ぶ。彼の六種の香木沈を以て未用の他の色の鐵臼に入れ、これを舂し、未用の他の色の絹の囊を以てこれを漏すこと七箇度、其の糟を亦た同じく舂して末とし、同じ囊に入れてこれを漏す。是くの如く乍ち妨げ無き物を、未だ用いざる他の色の眞の漆を以てこれを丸くし、等分に合成し、彼の佛舍利の壺に入れ奉り、方と圓と合わせて丸くし、高下を等分せよ。

此の間、大阿闍梨は屏風を立て、清淨なる細工入を率いて屏風の内に居り、合せて丸くせしむべし。彼の細工の口に名香を含ませ、専ら雜語せずこれを丸くせよ。亦た大阿闍梨耶は同じく口に名香を含み、不動の眞言を三百遍誦し、次に佛眼の眞言を一千遍誦し、丸くならしめよ。亦た未だ用いざる他の色の香油を以て五方に明燈を炬せ。但し眞言呪遍を満たすと雖も事の畢るに及ぶまで猶お員外にこれを誦すべし。亦た同門の間、智行の僧十五口を以て立ち替え、乍ち一番は一時を以て剋限と爲し、三箇番を結んで不斷に修法す。此の十五口の僧は、屏風を三丈許り却くなり。同門の僧と雖も事の心を知らしめず。玉を造ること既に畢るも、事を始めて従り發し七箇日夜の間、不斷に修法す。此の七箇日夜法の前後に神供あるべし。然る後、寶珠を以て檜の深き箱に入れ寶臺に安置す。其の寶臺は水壇に作る。其の中に細絹を敷き臺を立てるべし。壇の廻りに五色の糸を引き、然る後、吉日を求めず、更に亦た、五口の智行の僧を率いて、親しく大阿闍梨に従い、三時に念誦す。亦た五口の僧の内を以て毎時に介子を供す。是くの如くして百箇日夜を満たすべし。十日の間神供す。又、彼の

寶珠百箇日夜を満たすに至るまで、輒く大阿闍梨耶も見るべからず。何ぞ況んや他人の見るべけんや。百日を満たし、こ

の後は赤色の九條衣を以て此の玉を裏にすべし。亦た大阿闍梨再拜の言を誦す。口に再拜と曰うも實に拜すること三般。

即ち手に玉を取り、頂戴して月輪觀を行はずべし。然る後、玉乍ち赤色の袈裟に裏にし、大阿闍梨隨身し毎常に歸命頂禮す。

前後左右に出入りし侍りてこれを仰ぐべし。亦た入室智行の弟子は見せ知らしむべからず。假令、箱の有るを見ると雖も寶珠の所在を見せ知らしむべからず。

道理を案ずるに、大海の底の龍宮の寶藏に在る無數の玉を意う。然れども如意寶珠は皇帝爲り。方に其の實體を何うに自然の道理にして釋迦の分身なり。何を以てかこれを知る。此の玉、寶藏従り、海龍王の肝頸の下に通ず。藏と頸と不斷にして常住なり。或る時、善風を出し四洲に雲を発し、萬物を生長せしめ一切の衆生を利益す。水府陸地の萬物、誰か利益を蒙らざらんや。而るに世間の凡夫等は、己の愚に任せて口に如意玉寶を涌かすと稱す。彼の海の底の玉は常に此れ能作性の寶珠の御許に通じ、親近して徳を分かつ。所以に、觀ぜし大阿闍梨は「大海の龍王藏並びに肝頸に在る如意寶珠の權現大士に歸命頂禮す」等と曰うべし。三般これを誦し、念じ觀じて本尊の眞言を念誦すべし。凡そ一切の惡を却け善性の心に攀を爲すべし。是の法呂は大毘盧遮那經の文なり。然りと雖も、蜜の上の蜜、深の上の深なるものなり。闍留祕句唯だ阿闍梨の心槩と爲るに留るなり。専ら寫して散せしむべからず。若し是れを披露すれば蜜教久しからず。親しい弟子等の内、彼の心性不調の者は更に授け知らしむべからず。代々の座主・阿闍梨耶は、若しは自門の弟子、若しは同門の内の中の弟子、並びに諸々の門徒衆等の中、能ある者を看定め、以て怨親平等に觀行し預護せしむべし。若し付法の弟子等の中の者を簡び、枝枝に涉つて大阿闍梨耶の手に留めざれば、門門に移り以て不信の者に披露せられ、遂に淡道と爲り自然に隱没すべし。茲に因つて密教將に滅す。

然れば則ち猶お東寺の座主・長者爲るの人は必ず應に付屬すべし。彼の付屬に擬する日、三箇日洗浴し、兩部の諸尊を觀念すべし。亦た普く天の下・率土の上の冥官衆みょうかんしゅうを觀驚し、四無量を發起する觀を付屬するのみ。慈父母と雖もこれを知らしむること勿れ。此の祕密は即ち是れ三蜜の教肝の性を護るが如きなり。但し大唐の大師阿闍梨耶が付屬せらる所の能作性の如意寶珠を頂に戴き、大日本國に渡り、勞して名山勝地に籠めること既に畢んぬ。彼の勝地は所謂精進カ峯、土心水師修行の岫の東嶺なるのみ。努力せよ、努力せよ。後の人に彼の處を知らしむ勿れ。是れを以つて蜜教は劫榮し未徒は博延す。(復た、東寺大經藏の佛舍利は、大阿闍梨須く傳法の印契・蜜語を守り惜しむが如し。一粒も他に散せしむこと勿れ。是れ即ち如意寶珠なり。是れ即ち道を護るなり。以何を以てかこれを言う。彼の能作の玉、心はこれを本とするが故に)

【註記】

- ① 如來・釈迦如來。
- ② 祖師・大阿闍梨・空海のこと。
- ③ 能作性・意のままに種々のものを生み出すこと。
- ④ 不動の眞言・おそらく根本咒。
- ⑤ 佛眼の眞言・おそらく大咒。
- ⑥ 員外・既定の数以外に、の意。
- ⑦ 二時・ふたとき。いつとき(一時)の二倍。約四時間。
- ⑧ 神供・十二天など護法善神を主尊とする供養法。
- ⑨ 寶臺・立派な台。
- ⑩ 水壇・丸い壇。
- ⑪ 三時・初夜・日中・後夜。
- ⑫ 月輪觀・菩提心の象徴である月輪と一体になる觀法。
- ⑬ 四洲・須弥山を中心とする九山八海の四大洲。南瞻部洲・東勝神洲・西牛貨洲・北俱盧洲。

⑭水府・海中の都。龍宮。

⑮怨親平等・敵対関係もなく平等に、の意。

⑯冥官衆・冥官冥衆。冥界の役人と鬼神。

【私訳】

思うに、如意宝珠は無始よりこのかた、龍の肝や鳳凰の腦などにあるのではない。それは自然の道理で釈迦如來の分身である。あるいは一途に鳳凰の肝や龍の腦と言う人がいるが。これは大うそである。なぜかと言えば、自然の道理であつて釈迦如來の分身だからである。これが真実の如意宝珠である。自然道理・如來分身と呼ぶのは、祖師・大阿闍梨の口伝秘訣によつて成り立つ玉なのである。秘密の上の秘密、深秘の上の深秘である。安易に儀軌に注記などしない。これは大日如來の説く所である。成生の玉と言うのは、意のままに種々のものを生み出す玉という意味である。すべては九種の物から成つてゐる。九種とは、一に佛舍利三十二粒、二に他にまだ未使用の色の沙金五十兩、三に紫檀十兩、四に白檀十兩、五に百心樹の沈(香)十兩、六に桑木の沈(香)十兩、七に桃木の沈(香)十兩、八に大唐の香木の沈(香)十兩(香木の沈と謂うは以て専ら香木の沈と名づく。彼の色を簡はず唯だ清淨を以てこれを用う)、九に漢の桃木の沈(香)十兩、またこれらのうち沙金五十兩と白銀五十兩を合せて壺をつくり、先の三十二粒の舍利を中に安置し、永く壺の口を閉じ、真言を誦してこれを封じ、堅くひもで結ぶのである。また、先の六種の香木の沈香を未使用の鉄臼に入れてこれを潰し、未使用の絹の袋に入れてこれを振ふる過すること七度、その糟をまた同じくつぶして粉末とし、同じく袋に入れてこれを振ふる過するのだ。このようにして、不純物がなくなつた粉末を、未使用の他の色の純粹な漆で練り合わせてこれを丸くし、等分に合成し、先の仏舎利の壺に入れて、四角と丸と合わせて丸くし、上下を等分して宝珠の形にしない。この間、大阿闍梨は屏風を立て、身心ともに清らかな細工入を率いて屏風の内側にあり、そこで練り合わせたものを丸い形に作らせなさい。その細工人の口には名香を含ませ、ムダ口をさせず一心にこれを丸くさせなさい。また未使用の他の口に名香を含み、不動明王の真言を二百遍誦し、次に佛眼の真言を一千遍誦し、丸い形にさせなさい。また未使用の他の色の香油で真ん中と東西南北の五方に明るい灯明を灯せ。ただし、真言は既定の数を誦し終つてもなおその数以外を誦しなさい。また、門弟のうち行学ともにすぐれた僧十五人を交替で、すなわち一組四時間を刻限として、五人ずつの三組となり不斷に修法するのである。この十五人の僧は、屏風から三丈ばかり離れ、同門の僧であつても事の真相をおしえて

はならない。玉を造り終ったとしても、事の始めから七カ日夜、不斷に修法をしなければならぬ。この七カ日夜の修法の前後に神供を修しなければならぬ。そのあと、宝珠を深い松の箱に入れ立派な台に安置するのである。その立派な台というのは円形の壇である。そのなかに細い絹でできた打ち敷を敷き台を立てるのである。壇の周囲に五色の糸を引き回し、そのあと、とくに吉日を選ばず、さらに五人の行学にすぐれた僧を率い、親しく大阿闍梨に従って初夜・日中・後夜に真言を念誦するのである。また、五人の僧のうちの一人は一時間ごとに介子を供じるのだ。このようにして百カ日夜を成満すべし。十日の間は神供を修するがよい。又、先の寶珠は百カ日夜を成満するまで、大阿闍梨でも妄意に見てはならない。ましてや他の人が見てはいけぬ。百日を成満したあとは、赤色の九条袈裟のなかにこの宝珠を包み入れなさい。また、大阿闍梨は再拜の真言を誦すのである。口では再拜と言いつけけれども実際には三拜するのである。すなわち手に玉を取り、それを額に頂戴して月輪觀を行じなさい。そのあと、玉を赤色の袈裟のなかに包み入れ、大阿闍梨はその近くにいて常に頭を床につけて礼拝するのである。その前後左右に出入りし近くに侍してこれを讃仰しなさい。

また、私のところに入門した行学にすぐれた弟子にも見せたり教えたりしてはならない。たとい、箱があるのを見たとしても宝珠があるのを見せたり教えたりしてはいけぬ。道理を思案するに、大海の底の龍宮の宝蔵に無数の玉があるが、如意寶珠はそのなかでも皇帝のように随一である。その実体を察すれば、自然の道理にして釋迦の分身である。どうしてかと言うと、この玉は宝蔵から海龍王の心臓の上・頸の下に通じている。宝蔵と頸とはつながっていて常住である。ある時、(宝珠は)善き風を吹かせ、四大洲に雲を起し、万物を生長せしめて一切の衆生を利益した。龍宮や陸地の生きとし生けるもので、その利益に浴さないものがあるか。ところが世間の凡夫たちは、己の愚をかえりみず如意寶珠は宝を涌出させるなどと言うのである。先の海の底の玉は常に能作性の如意寶珠のそばに通じ、親しく近くにいて徳を分け合っている。だから、大阿闍梨は如意寶珠を觀じて「大海の龍王蔵ならびに肝頸にある如意寶珠の権現大士に帰命頂礼す」などと称えなければならぬ。三度これを誦し、念じつつ觀じて本尊の真言を念誦せよ。およそ一切の悪を排除し、善性の心に昇るよう励むべきである。この秘法は『大毘盧遮那經』の經文にあり、秘密の上の秘密、深秘の上の深秘なるものである。(しかし)この秘句は(今の『大日經』には欠けていて)ただ阿闍梨の心中の木札に留まっただけである。だから一心にこれを書写して散失しさないようにしなければならぬ。もしこれを公けにすれば蜜教は長く続かない。親しい弟子たちのなかに、その心性が調わない者は、ましてや授けたり教えたりすることはできない。代々の座主・阿闍梨耶は、あるいは自門の弟子、あるいは同門のうちの相弟子、または諸々の門徒衆たちのなかの宥能な者を見定め、個人的な感情や

評価は別として觀法の修行をさせ、この秘法を預り護らせなければならぬ。もし付法の弟子たちのなかの者を選び（伝授し）、個別にわたって大阿闍梨耶の手許に留め置かなければ、他宗や他門に秘法が移り不信の者にまで披露され、遂に（密教は）目だたない道となつて自然に消えてなくなるにちがいない。よつてそこで密教は消滅するのである。であるからなお、東寺の座主・長者たる人は必ず付法しなければならぬ。その付法に予定した日の前日、三日間は齋戒沐浴し、金胎兩部の諸尊を觀想しなければならぬ。また普く天上天下の冥官衆を觀想し驚覺し、四無量心を起す觀法を付法するのである。慈悲に満ちた父母といえどもこれを教えてはならない。この秘密は三密の教法の本性を護るのであるから。ただ、大唐の大師阿闍梨耶が私に付屬された、意のままに種々のものを生み出す如意寶珠を頭頂に戴き、日本国に將來し、苦勞して名山の勝地に埋めることができた。その勝地は室生山の精進カ峯、堅慧（恵）法師が修行した洞穴の東嶺である。努力しなさい、努力しなさい。後世の人にあの場所を教えてはならない。この故に、密教は未來永劫榮え、末徒は広く増え続けるのである。（また、東寺の大經藏にある仏舍利は、大阿闍梨が専ら伝法の印契や真言を守り大切にしているのと同じである。一粒たりとも他に散失してはならない。これは室生山の如意寶珠と同じである。これは密教の道を護るものである。どうしてかと言つと、あの能作の如意寶珠は、その本性は東寺の仏舍利と同じであるから）

## 一、若有末世凶婆非禰等擬破蜜華蘭應修法緣起 第二十五

若し末世に凶婆・非禰等有つて、蜜の華蘭を破せんと擬せば、應に修法すべき緣起 第二十五

### 【原文】

夫以昔南天竺國有一凶婆一非禰等破是蜜華蘭。爾時華蘭門徒之中有一強信者。修奧砂子平法呂七箇日夜。彌亦次次修員度者。彼凶婆等自退爲蜜華蘭安寂也。是以末世阿闍梨耶宜知是由必應勤守彼法呂。彼法呂者在入室弟子中。一山精進嶺土心水師之竹木目底。然則大阿闍梨耶是道借護苑如傳法灌頂阿闍梨職位印契。凡須傳法印契蜜語並調凶婆法呂輒不可授非器心不調者。若如是道任已私心無簡授放之時。諸尊護法天等俱共非聽。於大阿闍梨爲大災矣。選覓善人授放之時俱共爲大歡喜令續法性種。所以阿闍梨存心肝槩待覓器人可非斷蜜教之子。當知易得難大阿闍梨位。豈應非用心哉。是以非可令傳法印契語猥雜。

【書き下し】

夫れ以るに、昔、南天竺國に一の凶婆きよぼう・一の非禰ひでい等有つて、是の蜜の蘭華を破る。爾の時、華蘭の門徒の中に一の強信者有り。奥砂子平おつさしひやうの法呂を修すること七箇日夜。彌亦いやまた次次に眞度を修せば、彼の凶婆等自ら退き蜜の華蘭安寂と爲るなり。是れを以て、末世の阿闍梨耶は宜しく是の由を知り、必ず應に彼の法呂を勤め守るべし。彼の法呂は入室の弟子、一山精進カ嶺の土心水師の竹木目底にあり。然れば則ち大阿闍梨耶の是の道を惜しみ護ること、宛も傳法灌頂の阿闍梨職の位の印契の如し。凡そ須く、傳法の印契・蜜語並びに凶婆を調する法呂を、輒く器に非ずして心調わざる者に授けるべからず。若し是くの如き道を己に任せ私心にて簡ぶことなく授けこれを放す時、諸尊・護法天等は俱に共に聽くに非ず。大阿闍梨に於いて大災と爲らん。善人を選び覓めて授けこれを放つ時は俱に共に大歡喜と爲り法性種を續かしむ。所以に阿闍梨、心の肝槩きんがいに存して器の人を待ち覓め、蜜教の子を断せざるべし。當に知るべし、得ること易く難しきは大阿闍梨位なり。豈に應に用心せ非るべけんや。是を以て傳法の印・蜜語を猥雜にせしむべからず。

【註記】

- ①凶婆…凶惡な婆羅門（バラモン）、外教の徒。
- ②非禰…尊崇されない無信の外道。
- ③奥砂子平…おうさしひやう。如意宝珠法（真多摩尼法）・避蛇法とともに真言宗の秘法。その實際は「不動法」と言われている。如道和尚がインドでこの法を修して凶婆・非稱を降伏したことを不空三藏が伝え聞き、不空三藏が惠果和尚にこれを伝えた。それをまた惠果が空海にこの話を伝えたという（醍醐三流の一つ理性院流の祖・理性房賢覚の諸尊法に関する口決集『別法』）。また「奥砂子平」の「奥砂」はサンスクリットの「アチャラ *acala*、阿遮、不動」で、「奥」と「阿」とがサンスクリット音では相通じ、「奥砂」は「阿砂」すなわち「阿遮」だとする。「子平」とは、弟子の平安・平穩・

安寂の意味で、この法を修法する弟子は将来が安寂であるという意味。秘中の秘の秘法なので、通常の名稱を用いず、不動を「奥砂」と表記した。密教が消滅の危機にある時、不動法を修すれば、仏法を信じようとしないう外道の凶婆・非禪を降伏・退散させることができるという。（賢覚の口説を宗命が記した真言事相に関する雑記『対聞記』）。

④員度・回数。

⑤竹木目底・箱の底。「竹」は「箱」の部首。「木」は「箱」の下部の「相」の「木」。「目」は同じく「相」の「目」。「室」を「宀」とし、「生」を「一」とし、「堅惠法師」を「土心水師」とするのと同じ。

⑥肝槃：心の奥の木札。心の奥に記憶し留めること。

【私訳】

思うに、昔、南インドに一人の凶悪な婆羅門と一人の尊崇されない無信の人がいて、この密教の花園を破壊した。その時、花園の門弟のなかに信仰心の強い信者がいて、「奥砂子平」の秘法七日間修し、さらに次々と修法の回数を増やすと、その凶悪な婆羅門たちは自ら退散し、密教の花園は平安と静けさを取り戻した。であるから、後世の阿闍梨はよくこの趣旨を知り、必ずこの秘法を勤修し守らねばならない。この秘法は私の弟子で、室生山精進カ嶺の堅慧（恵）法師が持つ箱の底にあり、だから大阿闍梨が密教を大切にして護ることは、あたかも伝法灌頂の阿闍梨職の位の印契を護るのと同じである。

およそ絶対的に、伝法の印契や真言並びに凶悪な婆羅門を調伏する秘法を、安意に密教の器でもなく自覚もない者に授けてはならない。もしこのような密法を、自分勝手に私心にて、人を選ばず授けこれを放置すれば、諸尊や護法天たちはみなともに聴く耳を持たない（容認しない）。大阿闍梨には大きな災いとなる。（逆に）すぐれた人を選んで密法を授けこれを許す時は、諸尊や護法天たちはみなともに大いなる歓喜になり、法性の種が続くであろう。だから阿闍梨は、その密法を心の奥にある木札に書き記し、密教の器の人を待ち求め、密教の子を断絶させてはならない。どうぞ心得ておきなさい、大阿闍梨位になるのは簡単だが、その職位は難しいことを。どうして用心しないことがあるか。であるから、伝法の印や真言を乱雑に覚えてはならない。

【原文】

右件遺書努力不得違失故告。

承知二年三月十五日。入唐求法沙門空海。

【書き下し】

右、件の遺書、努力して違失すること得ざれ。故に告ぐ。

承知二年三月十五日。入唐求法の沙門、空海。

【原文】

編者曰。右御遺告一卷。以高野山御影堂所藏正本爲原本。兼以同御影堂所藏紺紙金字本。并江州石山寺所藏榮海法印杲寶法印等傳授本。及其他數本校合畢。今所出本文全依御影堂正本。不増損一字。間有誤字不得止改者悉標之冠註。冠註記云一本者指紺紙金字本及石山本等。

【書き下し】

編者曰わく。「右の御遺告」一卷、高野山御影堂所藏の正本を以て原本と爲す。兼ねて同御影堂所藏の紺紙金字本並びに江州石山寺所藏の榮海法印・杲寶法印等の傳授本を以てす。及び其の他數本を校合し畢んぬ。今出す所の本文は全て御影堂の正本に依る。一字も増損せず。誤字有る間は止むを得ざる者悉くこれを標し冠註す」と。冠註に記して云わく。「一本は、紺紙金字本及び石山本等を指す」と。

## ■あとがき

先にも述べたように、この「御遺告」の第一条、すなわち「空海伝」は、真言宗の伝統教学では宗祖真撰の「空海伝」として絶対視され、あたかも史実の如く、多くの空海伝記に影響を与えた。故に私も、伝統教学に倣い、「御遺告」の文を空海の肉声として何度も著述等に引用してきた。「御遺告」に真撰・偽撰説があることに無頓着だった。恥じ入るばかりである。恥じ入りついでに、できる限り先学の論文を探して拝読し、けっこう古い時代から真撰・偽撰が問われていたことを知った。私も先学に倣い、「御遺告」を僭越ながら疑念の目で読んだ結果がこのノートである。

以下、飛躍になるかも知れないが、「御遺告」を読んでいてふと脳裡にひらめいたことがある。

第十三の条（東寺に供僧二十四口を定める縁起）と第十四の条（二十四口の定額僧を以て宮中正月の後七日御願修法の修僧に請い用いる縁起）で、本来官符で認められていた東寺の供僧五十口という人数が、智積院の菩提院結衆の五十と一致し、経済的事情で半分に減らした供僧二十四口のうち、事教二相ともにくぐれた「智行の人」二十一口は、智積院の菩提院結衆五十人のうちの集議二十席に仮に能化様を加えた二十一に一致する、という数字の符合である。

東寺の「後七日御修法」に出仕する定額僧の数を、根来方智積院の菩提院結衆や集議の数に重ねるのは、いささか飛躍かも知れないが、根来方の智積院が新義の法鼓を打ち鳴らす際に、東寺の「後七日御修法」に擬し、論議に出仕する学道衆を東寺の定額僧に重ねてもおかしくはない。これまで私は、ずっと菩提院結衆の五十とそのうちの上席の二十（集議）の根拠を知らなかったが、この数字的な符合を偶然とは思えないのである。蛇足ながら、菩提院結衆とは根来山内の塔頭「菩提院」に論議のために結集する学道衆のことで、「菩提院」は興教大師覚鑿上人を荼毘に付した聖地である。

宗祖大師のご誕生一二五〇年の佳年に、伝統教学では絶対的な「空海伝」として知られる「御遺告」を読み、その真撰・偽撰を問う疑義に参じることができたことをうれしく思っている。大師は、兜率天の雲間から下界をのぞき、書いた覚えのない「御遺告」が自分の真作としてこの世では独り歩きしているのを知り、苦笑いしているかも知れない。